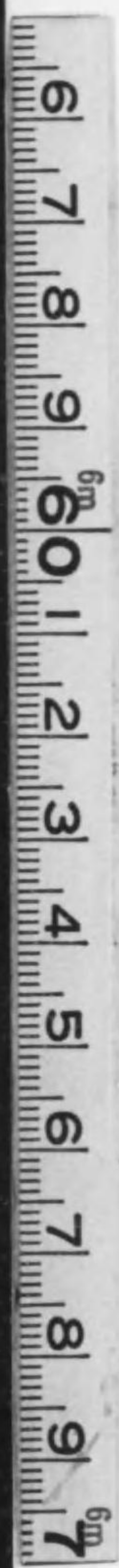


續國譯漢文大成

文學部
五

309
65

入



始



續國譯漢文大成

文學部第五册 (第二帙の一)
李太白詩集中の一

吉田待應氏 寄贈本



309
65

李太白集中卷目次

卷八

贈

贈孟浩然……………	二	贈丹陽橫山周處士惟長……………	二四
贈從兄襄陽少府皓……………	三	玉真公主別館苦雨贈衛尉張卿 二首……………	二六
淮海對雪贈傅靄……………	六	贈韋祕書子春……………	三三
贈徐安宜……………	八	贈韋侍御黃裳 二首……………	三七
贈任城盧主簿潛……………	一〇	贈薛校書……………	四〇
早秋贈裴十七仲堪……………	一一	贈何七判官昌浩……………	四一
贈范金鄉 二首……………	一五	讀諸葛武侯傳書懷贈長安崔少府叔封昆季……………	四三
贈瑕邱王少府……………	一九	贈郭將軍……………	四六
東魯見秋博通……………	二〇	觀去溫泉宮後贈楊山人……………	四七
見京兆韋參軍量移東陽 二首……………	二一	溫泉侍從歸逢故人……………	五〇

李太白集 中卷目次

李太白詩集卷八

李太白詩集卷八

李太白詩集卷八

贈表十四……………五三

贈崔侍御……………五三

述德兼陳情上哥舒大夫……………五五

雪謾詩贈友人……………五六

贈參寥子……………五六

贈饒陽張司戶燧……………六六

贈清漳明府姪聿……………七一

贈臨洛縣令皓弟……………七五

贈郭季鷹……………七六

鄴中贈王大勸入高鳳石門山幽居……………七七

卷九

贈八

秋日鍊藥院鑷白髮贈元六兄林宗……………一〇三

書情贈蔡舍人雄……………一〇七

贈華州王司士……………八一

贈盧徵君昆弟……………八二

贈新平少年……………八四

贈崔侍御……………八六

走筆贈獨孤駙馬……………八九

贈嵩山焦鍊師并序……………九二

口號贈楊徵君……………九五

上李邕……………九七

贈張公洲革處士……………一〇〇

憶襄陽舊遊贈馬少府巨……………一一三

對雪獻從兄虞城宰……………一一五

訪道安陵遇蓋寰爲余造真錄臨別留贈……………一二七

贈崔郎中宗之……………一二二

贈崔諳議……………一二四

贈昇州王使臣忠臣……………一二六

贈別從甥高五……………一二八

贈裴司馬……………一三三

敍舊贈江陽宰陸調……………一三五

贈從孫義興宰銘……………一四〇

草創大還贈柳官迪……………一四六

卷十

贈

贈王判官時余歸隱居廬山屏風疊……………一七九

在水軍宴贈幕府諸侍御……………一八三

贈武十七諤并序……………一八七

贈崔司戶文昆季……………一五一

贈深陽宋少府陟……………一五五

戲贈鄭深陽……………一五七

贈僧崔公……………一五九

遊深陽北湖亭望瓦屋山懷古贈同旅……………一六四

醉後贈從甥高鎮……………一六八

贈秋浦柳少府……………一七一

贈崔秋浦 三首……………一七三

望九華贈青陽韋仲堪……………一七六

贈閔丘宿松……………一九〇

獄中上崔相換……………一九二

中丞宋公以吳兵三千赴河南……………一九四

流夜郎贈辛判官……………一九八
 贈劉都使……………二〇〇
 贈常侍御……………二〇三
 贈易秀才……………二〇六
 流夜郎憶舊遊書懷贈江夏韋太守良宰……………二〇八
 江夏使君叔席上贈史郎中……………二二一
 博晉鄭太守之武陵立馬贈別……………二二三
 江上贈寶長史……………二二七
 贈王漢陽……………二四〇
 贈漢陽輔錄事 二首……………二四二
 江夏贈韋南陵水……………二四五

贈盧司戶……………二五〇
 贈從弟南平太守之遙 二首……………二五三
 贈潘侍御論錢少陽……………二五八
 贈柳圓……………二六〇
 書懷示息秀才……………二六一
 贈張相鎬 二首……………二六六
 聞謝楊兒吟猛虎詞因此有贈……………二七八
 宿清溪主人……………二七九
 繁尋陽上崔相換 三首……………二八〇
 巴陵贈賈舍人……………二八三

卷十一

贈

贈別舍人弟臺卿之江南……………二八五

醉後贈王歷陽……………二八八

贈歷陽褚司馬……………二八九
 對雪醉後贈王歷陽……………二九〇
 贈宣城宇文太守兼呈崔侍御……………二九三
 贈宣城趙太守悅……………三〇三
 贈從弟宜州長史昭……………三〇
 於五松山贈南陵常贊府……………三二三
 自梁園至敬亭山見會公談陵陽山水有贈……………三二六
 贈友人 三首……………三三一
 陳情贈友人……………三三七
 贈從弟冽……………三三三
 贈閻邱處士……………三三七

卷十二

寄

安陸白兆山桃花巖寄劉侍御綰……………三七一

贈錢徵君少陽……………三三八
 贈宣州靈源寺仲潘公……………三四〇
 贈僧朝美……………三四一
 贈僧行融……………三四四
 贈黃山胡公求白鷗……………三四六
 登敬亭山南望懷古贈寶主簿……………三四九
 經亂後將避地剡中留贈崔宣城……………三五二
 獻從叔當塗宰陽冰……………三五六
 書懷贈南陵常贊府……………三六四
 贈汪倫……………三六九

淮南臥病書懷寄蜀中趙徵君蕤……………三七四

寄弄月溪吳山人……………三七八
 秋山寄衛尉張卿及王徵君……………三七九
 望終南山寄紫閣隱者……………三八一
 夕霽杜陵登樓寄韋繇……………三八二
 秋夜宿龍門香山寺寄王方城等……………三八四
 春日獨坐寄鄭明府……………三八七
 寄淮南友人……………三八九
 沙邱城下寄杜甫……………三九〇
 聞丹邱子於城北營石門幽居……………三九二
 淮陰書懷寄王宋城……………三九七
 聞王昌齡左遷龍標遙有此寄……………四〇〇
 寄王屋山人孟大融……………四〇二

卷十三

寄

廬山謠寄盧侍御虛舟……………四三七
 下尋陽城汎彭蠡寄黃判官……………四四二
 書情寄從弟邢州長史昭……………四四四
 寄王漢陽……………四四六
 春日歸山寄孟浩然……………四四八
 流夜郎永華寺寄潯陽羣官……………四五〇
 流夜郎至西塞驛寄裴隱……………四五二
 自漢陽病酒歸寄王明府……………四五四
 望漢陽柳色寄王宰……………四五六
 江夏寄漢陽輔參事……………四五七
 早春寄王漢陽……………四六〇
 江上寄巴東故人……………四六二

卷十四

留別

憶舊遊寄譙郡元參軍……………四〇四
 月夜江行寄崔員外宗之……………四一三
 宿白鷺洲寄楊江寧……………四一五
 新林浦阻風寄友人……………四一七
 寄韋南陵冰……………四二〇
 題情深樹寄象公……………四二三
 北山獨酌寄韋六……………四二四
 寄當塗趙少府炎……………四二六
 寄東魯二稚子……………四二七
 獨酌清溪江石上寄權昭夷……………四三〇
 禪房懷友人岑倫……………四三二

江上寄元六林宗……………四六三
 寄從弟宜州長史昭……………四六五
 涇溪東郡寄鄭少府諤……………四六七
 宣州九日聞崔侍御與宇文太守遊敬亭 二首……………四六九
 寄崔侍御……………四七四
 涇溪落星潭可以卜築寄何判官昌浩……………四七六
 早過漆林渡寄萬巨……………四七八
 遊敬亭寄崔侍御……………四八〇
 三山望金陵寄殷淑……………四八二
 自金陵泝流過白壁山觀月寄王主簿……………四八四
 寄上吳王 三首……………四八七

秋日魯郡堯祠亭上宴別杜補闕范侍御……………四九一

別魯頌……………四九四

別中都明府兄……………四九五

夢遊天姥吟留別……………四九七

留別曹南羣官之江南……………五〇四

留別于十一兄逃裴十三遊塞垣……………五一〇

留別王司馬嵩……………五一四

還山留別金門知己……………五一六

夜別張五……………五一八

魏郡別蘇明府因北游……………五一九

留別西河劉少府……………五二二

潁陽別元丹邱之淮陽……………五二四

留別廣陵諸公……………五二七

廣陵贈別……………五三〇

感時留別從兄徐王延年從弟延陵……………五三一

別儲邕之剡中……………五四〇

留別金陵諸公……………五四一

口號……………五四四

金陵酒肆留別……………五四五

金陵白下亭留別……………五四六

別東林寺僧……………五四八

竄夜郎於烏江留別宗十六璟……………五四九

留別襄陽處士……………五五〇

贈別鄭判官……………五五六

黃鶴樓送孟浩然之廣陵……………五五七

將游衛嶽過漢陽雙松亭留別族弟浮屠談皓……………五五九

留別賈舍人至 二首……………五六三

渡荆門送別……………五六七

留別金陵崔侍御十九韻……………五六九

別韋少府……………五七五

南陵別兒童入京……………五七六

別山僧……………五七九

卷十五

送

南陽送客……………五八五

送張舍人之江東……………五八六

送王屋山人魏萬還王屋并序……………五八七

送當塗趙少府赴長蘆……………六〇五

送友人尋越中山水……………六〇七

送族弟凝之滌求婚崔氏……………六〇九

送友人遊梅湖……………六一一

送崔十二遊天竺寺……………六一二

送楊山人歸天台……………六一四

送溫處士歸黃山白鵝峰舊居……………六一七

贈別王山人歸布山……………五八〇

江夏別宋之悌……………五八二

送方士趙叟之東平……………六二一

送韓準裴政孔巢父還山……………六二三

送楊少府赴選……………六二六

對雪奉餞任城六父秩滿歸京……………六三〇

魯郡堯祠送吳五之瑯琊……………六三三

魯郡堯祠送寶明府薄華還西京……………六三四

金鄉送韋八之西京……………六四二

送薛九被讒去魯……………六四三

單父東樓秋夜送族弟沈之秦……………六四九

送族弟凝至晏堦單父三十里……………六五三

魯城北郭曲腰桑下送張子還嵩陽……………六五五

卷十六

送

送魯郡劉長史遷弘農長史……………六五七
 送族弟單父主簿凝攝宋城主簿至郭南月橋……………六六〇
 魯郡東石門送杜二甫……………六六三
 魯郡堯祠送張十四遊河北……………六六五
 杭州送裴大澤時赴廬州長史……………六六七
 瀟陵行送別……………六六九
 送賀監歸四明應制……………六七二
 送寶司馬貶宜春……………六七五
 送羽林陶將軍……………六七七
 送程劉二侍郎兼獨孤判官赴安西幕府……………六七八
 送姪良攜二妓赴會稽戲有此贈……………六八一

送賀賓客歸越……………六八二
 送張遙之壽陽幕府……………六八九
 送裴十八圖南歸嵩山 二首……………六九二
 同王昌齡送族弟襄歸桂陽 二首……………六九五
 送外甥鄭灌從軍……………六九九
 送于十八應四子舉落第還嵩山……………七〇三
 送別……………七〇六
 送族弟綰從軍安西……………七〇八
 送梁公昌從信安北征……………七一〇
 送白利從金吾薰將軍西征……………七一三
 送張秀才從軍……………七一四

送崔度還吳……………七七一
 送祝八之江東賦得浣紗石……………七一九
 送侯十一……………七三一
 魯中送二從弟赴舉之西京……………七三三
 奉饒高尊師如貴道士傳道錄畢歸北海……………七三五
 金陵送張十一再游東吳……………七三七
 送紀秀才遊越……………七三八
 送長沙陳太守 二首……………七三一

卷十七

送

送韓侍御之廣德……………七五二
 白雲歌送友人……………七五三
 送通禪師還南陵隱靜寺……………七五三
 送友人……………七五五

送楊燕之東魯……………七三三
 送蔡山人……………七三六
 送蕭三十一之魯中兼問稚子伯禽……………七三八
 送楊山人歸嵩山……………七四〇
 送殷淑 三首……………七四二
 送岑徵君歸鳴阜山……………七四五
 送范山人歸太山……………七四八

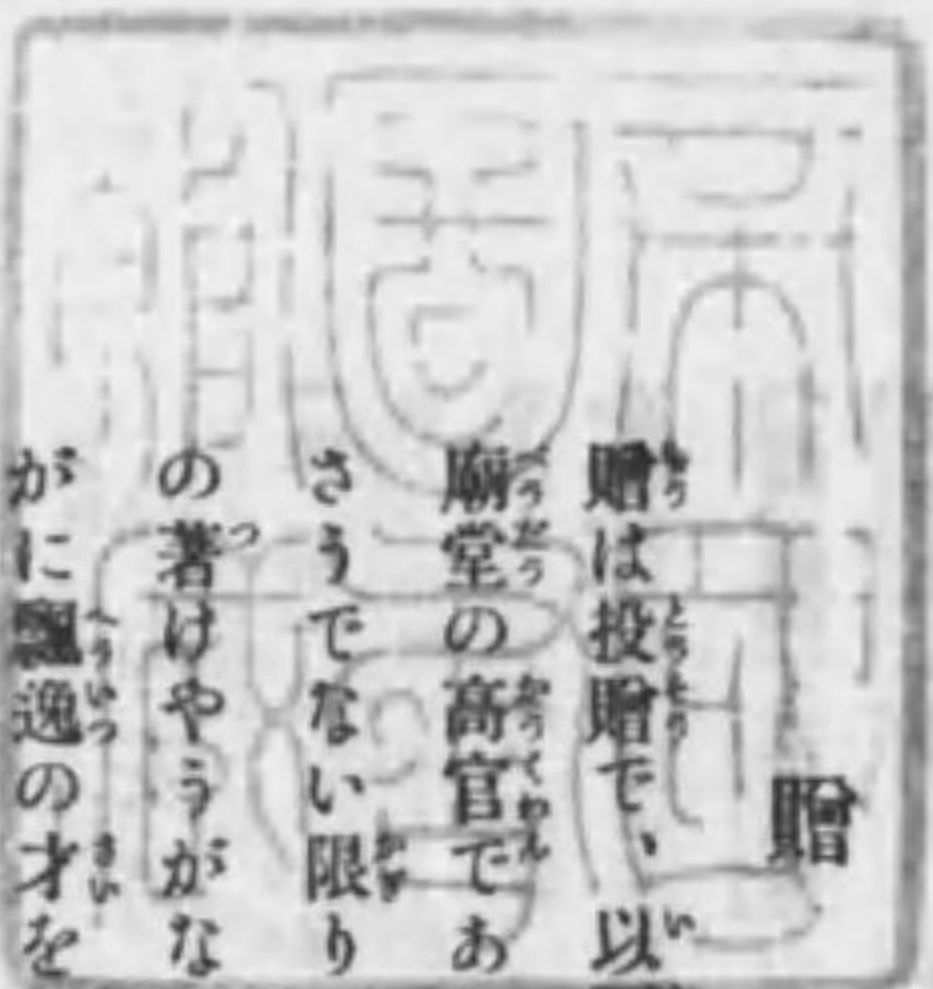
送別……………七五八
 江上送女道士褚三清遊南嶽……………七五八
 送友人入蜀……………七六〇
 送趙雲卿……………七六二

送李青歸華陽川……………七六三
 送舍弟……………七六四
 送別得書字……………七六六
 送趙十少府……………七六七
 送張秀才謁高中丞并序……………七六九
 潯陽送弟昌嗣郡陽司馬作……………七七三
 餞校書叔雲……………七七七
 送王孝廉觀省……………七七八
 同吳王送杜秀芝舉入京……………七八〇
 洞庭醉後送絳州呂使君杲流澧州……………七八一
 與諸公送陳郎將歸衡陽并序……………七八三
 送趙判官赴黔府中丞叔幕……………七八七
 送陸判官往琵琶峽……………七九一
 送梁四歸東平……………七九三

江夏送友人……………七九三
 送都昂謫巴中……………七九四
 江夏送張丞……………七九六
 賦得白鷺鷥送宋少府入三峽……………七九八
 送二季之江東……………七九九
 江西送友人之羅浮……………八〇一
 宣州謝朓樓餞別校書叔雲……………八〇三
 宣城送劉副使入秦……………八〇七
 涇川送族弟綽……………八一二
 五松山送殷淑……………八一五
 送崔氏昆季之金陵……………八一七
 登黃山凌歊臺送族弟深陽尉濟充……………八一九
 送儲邕之武昌……………八二四

李太白集 卷八

文學博士 久保天隨 譯解



贈は投贈で、以下、すべて人に贈つた詩ばかりである。元來、投贈の詩といふものは、その相手が、廟堂の高官であるとか、高德の人であるとか、その他、何か特徴があれば、著筆の仕様もあるが、さうでない限りは、兎角、千篇一律に流れ易く、誰が作るにしても、さう變つた、目ざましい趣向の著けやうがない。李白の投贈した人は、その二三を除いて、格別の人でもないが、李白は、さすがに飄逸の才を持つて居ただけに、如何なる場合に於ても、おのが真本領を没却せず、且つ對者の事をいふよりも、自己の現況を訴へるといふ方に重きを置いたから、ひとり、詩として觀るべきのみならず、その内外閱歷の一斑を知ることゝ於て、極めて重要であつて、尋常投贈の作と實に其授を異にして居る。

贈孟浩然

孟浩然に贈る

吾愛孟夫子。風流天下聞。

吾は愛す孟夫子、風流、天下に聞こゆ。

紅顏棄軒冕。白首臥松雲。

紅顏、軒冕を棄て、白首、松雲に臥す。

醉月頻中聖。迷花不事君。

月に酔うて頻りに聖に中り、花に迷うて君に事へず。

高山安可仰。徒此挹清芬。

高山、安んぞ仰ぐべけむや、徒に此に清芬を挹す。

【字解】

【一】軒冕 前に見ゆ、大官の乗る車と冠。【二】中聖 三國志に「徐邈、尚書郎たる時、酒禁を科す。而して、邈、私に飲んで沈醉に至る。校事通達、問ふに曹事を以てす。邈曰く、聖人に中ると。邈、これを太祖に白す。太祖、甚だ怒る。鮮于輔進んで曰く、平日、辟客、酒の清きものを謂うて聖人となし、濁れるものを賢人となす。邈、性修眞、偶々醉言するのみ」とある。【三】高山安可仰 詩の小雅に高山仰止、景行行止とあるに本づく。

【題義】

孟浩然の事は唐書に見え、襄州襄陽の人、少にして、節義を好み、喜んで人の患難を拯ふ。鹿門山に隠れ、年四十、乃ち京師に遊ぶ。かつて大學に於て詩を賦し、一座歎服して、敢て抗するなし。張九齡・王維、雅に之を稱道す。維、私に邀へて内署に入る。俄にして、玄宗至る。浩然、牀下に匿る。維、實を以て對ふ。帝、喜んで曰く、朕、その人を聞いて、未だ見ざるなり、何ぞ懼れて匿る、と。浩然に詔して、出でしむ。帝、その詩を問ふ。浩然再拜して、自ら爲るところを誦す。不才明主棄の句に至り、帝曰く、卿、仕を求めず、しかも、朕、未だ嘗て卿を棄てず、奈何ぞ我を誣ふる

と、因つて、放ち還らしむ。探訪使韓朝宗、浩然と約し、偕に京師に至り、これを朝に薦めむと欲す。

會ま故人至り、劇飲して歡甚し。或は曰く、君、韓公と期あり。浩然曰く、すでに己に飲む、他を

恤むに遑あらむや、と。卒に赴かず。朝宗、怒つて辭して行く。浩然、悔いざるなり。張九齡、荊州

たり、辟して府に置く。府、罷む。開元の末、疽を背に病んで卒す」とある。李白の此詩は、孟浩然

に贈つたので、彼が世に用ひられず、隠者を以て其心を高尚にした其處から筆を著けたのである。

【詩意】孟夫子の風流の盛名は、天下に聞こえ、その人は、わが最も愛するところである。孟夫子は、

紅顏の年若き頃より、軒冕を著ける役人などは、すべて棄てて仕舞つて、白首に至るまで、山中に住

み、青松白雲を友として、隠者の生活を送つて居た。そこで、ある時は、月に酔うて、頻りに聖人の

稱ある極上の酒に中てられたと稱し、ある時は、花に心を樂ましめて、君に事へることなどは全く念

頭にも無い。かくの如き高尚の心は、さながら高山の如くで、容易に人に仰がしめないから、その人

を見やうと思つても、滅多に遇はれず、唯だ芳はしき其名を聞いて、これを慕ふのみである。

贈從兄襄陽少府皓

從兄襄陽少府皓に贈る

結髮未識事。所交盡豪雄。

結髮、未だ事を識らず、交るところは、盡く豪雄。

贈 贈孟浩然・贈從兄襄陽少府皓

却秦不受賞。擊晉寧爲功。

秦を却けて、賞を受けず、晉を撃つて、寧ろ功と爲さむや。

小節豈足言。退耕春陵東。

小節豈に言ふに足らむや、退いて耕す春陵の東。

歸來無產業。生事如轉蓬。

歸り來つて、産業なく、生事、轉蓬の如し。

一朝烏裘敝。百鎰黃金空。

一朝、烏裘敝れ、百鎰、黃金空し。

彈劍徒激昂。出門悲路窮。

劍を弾じて、徒ら激昂、門を出でて、路の窮まるを悲む。

吾兄青雲士。然諾聞諸公。

吾兄、青雲の士、然諾、諸公に聞こゆ。

所以陳片言。片言貴情通。

片言を陳ずる所以、片言、情の通ずるを貴ぶ。

棣華儻不接。甘與秋草同。

棣華儻し接せざれば、甘んじて、秋草と同じからむ。

【字解】【一】結髮、はじめて冠すること。【二】却秦、魯仲連、趙をして秦を辱んで帝と爲さしむることを肯んぜず、秦將、これを聞いて、爲に軍を却くること五十里。平原君、これを封ぜむと欲す、魯仲連、肯て受けず。その事、前に見ゆ。【三】擊晉、朱亥、信陵君に従ひ、魏を救ふに、晉を撃つに因り、信陵君、その軍を奪ひ、邯鄲を救うて趙を存す。その事、前に見ゆ。【四】小節、晉書に「阮渾、少にして通達を慕ひ、小節を修めず」とある。【五】春陵、元和郡縣志に「春陵の故城は、隨州襄陽縣の東南三十里に在り」と見ゆ。【六】轉蓬、揚齊賢の解に「蓬花は北土之あり、圓轉して、穂の如く、風起れば、地に墮つて轉じ、自ら止まらざる」とある。【七】百鎰、鎰は二十兩、二十四兩、もしくは三十兩といふ説がある。【八】棣華、詩經に棠棣之華、鄂不韋韡、凡今之人、莫如兄弟」とあつて、兄弟和睦の事を詠せしに因り、棣華を以て、兄弟の義として用ひたのである。

【題義】これは、李白が、その従兄で襄陽縣の少府たりし李皓といふ人に贈つた詩である。李皓は、如何なる人か、その傳記は分らない。但し、微官に居たものの、相當の人物であつたに相違なく、そこで、李白は、その人に向つて、自己の窮狀を訴へて、どうか救濟して呉れろといつて、懇懇依頼したのである。

【詩意】われは、始めて冠を著けて、人並に男と成つた頃、まだ十分に世間の事を知らず、英雄の士とばかり交際して居た。かくて、魯仲連が一言して、秦を帝とせず、その爲に、秦將が軍を却けたといふやうなことをしても、矢張、褒美を貰はうと思はず、朱亥が四十斤の鐵椎を以て、將軍晉部を推殺し、信陵君は、その軍を奪つて、邯鄲の圍を解いて趙を存し、さしもの難局を切り抜けたといふやうな壯烈の事を遣つても、決して功とはしなかつた。區區たる小節は、もとより論ずるに足らず、そこで、兎角、この世に容れられぬ處から、春陵の東に退居して、自ら野に耕さむとし、さて其處へ歸つて見ると、何分、産業を修めることも出来ず、生活状態は、さながら蓬の穂の風に吹かれて飛ぶやうな、まことに哀れな有様である。かくて、黒い色をした裘も、いつしか破れて仕舞ひ、百鎰の黄金も、使ひ盡して、手元に何も残らず、劍を弾じて高歌しつつ、心氣いたづらに激昂するばかり。門を出ても、路がどんづまりに成つて、先へ往かれぬと同じ様な境涯である。吾兄は、青雲の士で、今や官途に立つて、羽振も善く、その上、平生俠を負ひ、然諾を重んじ、一言うんと言へば、必ず引

き受けて呉れるといふ評判が諸公の間に聞こえて居る。そこで、今、片言を呈し、手短ながら、情の通ずるを旨として、この詩を賦し、わが窮状を訴へるから、どうか一肌ぬいで、助けて戴きたい。もし棠棣の華に比すべき兄弟の情誼に接するを得れば、愈よ仕方が無いこととして、秋草と同じく、枯れはてることを甘んずる外はない。

【餘論】 繆本には擊晉寧爲功の下に、託身白刃裏、殺入紅塵中、當朝揖高義、舉世欽高風の四句があるが、これは、無い方が好い。嚴滄浪は「起二句は未だ事を諷らす、即ち能く此の如し、もとより贊語と作して説く。未だ事を諷らす、乃ち能く此の如し、亦た危語と作して看るべし。一結、至性の語、甚だ烈」といつて居る。

淮海對雪贈傅靄

淮海雪に對し、傅靄に贈る

朔雪落吳天。從風渡溟渤。

朔雪、吳天より落ち、風に從つて、溟渤を渡る。

海樹成陽春。江沙皓明月。

海樹、陽春を成し、江沙、明月よりも皓たり。

興從剡溪起。思繞梁園發。

興は剡溪より起り、思は梁園を繞つて發す。

寄君郢中歌。曲罷心繼絕。

君に郢中の歌を寄す、曲罷んで、心繼いで絶ゆ。

【字解】 (一) 朔雪、朔天の雪。(二) 溟渤、二海の名、大海の義に用ふ。(三) 剡溪、世説に「王子猷、山陰に居る、夜、大に雪

ふる、既覺めて室を開き、命じて酒を酌み、四望皎然、因つて起つて彷徨し、左思招隱の詩を誦じ、忽ち戴安道を憶ふ。時に戴、剡に在り、すなはち、夜、小舟に乘じて之に就く。經宿、方に至つて、門に造る。前まずして返る。人、その故を問ふ、王曰く、吾、本と興に乗じて行き、興盡きて反る、何ぞ必ずしも戴を見む」とある。剡溪は紹興府嵊縣治の南に在つて、一名戴溪といふ。【四】梁園、謝靈運の雪賦に「歲將に暮れむとす、時すでに昏、寒風積り、愁雲繁し。梁王愕ばす、兎園に遊ぶ。俄にして、微霰零ち、密雪下る。王乃ち北風を奮詩に歌ひ、南山を周雅に誦じ、前を司馬大夫に授けて曰く、子が馳思を抽いて、寡人の爲に之を賦せよ」とある。【五】郢中歌、宋玉の對楚王問に「客、郢中に歌ふものあり、その陽春白雪を爲すや、和するもの數人に過ぎず」とある。

【題義】 禹貢の揚州は、北は淮に至り、東南海に至るが故に、淮海といふのである。この詩は、李白が淮海地方に流寓せしとき、一日雪に對して、その友傅靄を思ひ出て、賦して之に贈つたのである。

【詩意】 北地に見るやうな大雪が吳天に降り來り、風に從つて、大海を度つて居るから、ここばかりでなく、君の居る處も、定めて同じやうな雪であらう。海邊に立てる木木は、俄に花が咲いたやうで、宛然たる陽春三月の景色、江邊の沙は、愈よ白くなつて、明月の光よりも皓然として居る。かくて、剡溪にまで出かけて、友を訪ひたいやうな興が起り、又むかし梁園に於て、司馬相如輩が梁王に陪して、文酒の興を繼にしたことを思ひ出したが、せめて、君にして一所に此處に居たならば、どんなに樂しからうと思ふが、遠く懸け離れて居ては、仕方がない。そこで白雪に因ある郢中の詠を爲して、君に寄せるのであるが、その曲を唱へ終ると、心が斷絶せむばかりである。

【餘論】 繆本には、江沙皓明月の下に、飄飄四荒外、想象千花發、瑤草生階墀、玉塵散庭闕の四

句がある。

贈徐安宜

徐安宜に贈る

白田見楚老歌詠徐安宜

白田に楚老を見る、歌詠す徐安宜。

製錦不擇地操刀良在茲

錦を製して、地を擇ばず、刀を操つて、良に茲に在り。

清風動百里惠化聞京師

清風、百里を動かし、惠化、京師に聞こゆ。

浮人若雲歸耕種滿郊歧

浮人は雲の歸るが若く、耕種して、郊歧に滿つ。

川光淨麥隴日色明桑枝

川光、麥隴に淨く、日色、桑枝に明かなり。

訟息但長嘯賓來或解頤

訟息んで、但だ長嘯し、賓來つて、或は頤を解く。

青橙拂戸牖白水流園池

青橙は戸牖を拂ひ、白水は園池に流る。

遊子滯安邑懷恩未忍辭

遊子、安邑に滯し、恩を懷うて、未だ辭するに忍びず

翳君樹桃李歲晚託深期

翳君、桃李を樹う、歲晚、深期を託す。

【字解】一 白田 安宜の地名。二 楚老 楚地の父老。三 製錦、操刀 左傳に「子皮、尹何をして邑を爲めしめむと欲す。子皮曰く、少にして、未だ可否を知らず。子皮曰く、臣は吾これを受す、夫をして往いて學ばしむ、夫亦た愈々治を知らむ。子

皮曰く、人の人を受するは、これを利せむことを求むればなり。今吾子、人を受し、すなはち政を以てす、猶ほ未だ刀を操る能はずして、割かしむるがごときなり。その傷、實に多し。子に美錦あり、人をして製するを學ばしめず。大官大邑、身の庇するところなり。しかも、學者をして、製せしむ、その美錦たる、亦た多からずや」とある。四 京師 京は大、師は衆の義。五 浮人、流人、流亡せる人民。六 解頤 漢書に「諸儒、これが語を爲して曰く、無説詩、匡鼎來、匡説詩、解三人頤」とある、人をして笑うて止む能はざらしむること。七 安邑 即ち安宜。八 翳 惟れと訓す、又發語の辭。九 樹桃李 説苑に「陽成、罪を善に得、北、簡子を見て曰く、今より以後、復た人を種ます。簡子曰く、夫れ桃李を樹うるものは、夏、休息するを得、秋、その實を得、莢華を樹うるものは、夏、休息を得ず、秋、その刺を得。今、子の樹うるところは莢華なり、今より以來、人を擇んで之を樹ま、すでに樹んで之を擇ぶなかれ」とある。

【題義】徐安宜とは、安宜縣令徐某といふこと。王琦の解に「唐時、淮南道楚州に安宜縣あり、上元三年、その地、定國の寶十三枚を得たるを以て、因つて、寶應と改元し、仍つて安宜縣を改めて寶應縣となす。徐は、蓋し安宜の令たるものなり」とある。

【詩意】白田へ往つて、楚地の父老が何をして居るかと思ふと、縣令徐君の徳を頌して、しきりに歌詠を遣つて居る。徐君は、その才、民治に宜しく、どこで、錦を裁ち切るも意の儘で、大邑をも治め得るし、刀を操ることに熟達して、今しも此地に居るのである。されば、その徳は、清風の如く、方百里の域内に行き互り、惠化は都にまでも聞こえて居る。そこで、ここを出で往つた流民どもは、雲の如く羣を爲して歸り來り、郭外の廣い處に往つて、耕作をして居る。されば、野水はきらきらと

して麥畑の間に淨く見え、日の光は、新に芽を出した桑の枝に鮮かである。公庭の上には、訴訟沙汰もなく、至つて香氣である處から、ただ長嘯して居るだけであるし、折しも、賓客が來訪すれば、話上手で、人を笑はしめる。そして、君の住居はといへば、青橙が窓際に植わつて居るし、清らかな水は、園池に流れ込む。われは、今旅人として、この安邑に來て久しく滯留して居たが、徐君の治化を見て、いたく心に感じ、辭して去るに忍びない。おもへば、君は桃李を植ゑたやうなもので、夏は休息を得べく、秋は實を得べしといふ通り、いづれ、目に見える様な結果が有るに相違ないから、これを君の晩年に期して、心のどかに待つて居られるが善からう。

贈任城盧主簿潛

任城の盧主簿潛に贈る

海鳥知天風。竄身魯門東。

海鳥は天風を知り、身を魯門の東に竄す。

臨觴不能飲。矯翼思凌空。

觴に臨んで、飲む能はず、翼を矯げて、空を凌がむを思ふ。

鐘鼓不爲樂。煙霜誰與同。

鐘鼓も樂と爲さず、煙霜、誰と同じからむ。

歸飛未忍去。流淚謝鴛鴻。

歸り飛んで、未だ去るに忍びず、涙を流して鴛鴻に謝す。

【字解】(一) 海鳥、莊子に「むかし、海鳥、魯郊に止まる。魯侯、御して之を廟に觴し、九韶を奏して以て樂となし、太宰を具

へて以て膳となす。鳥、乃ち眩視し、憂患して、敢て一爵を食はず、一杯を飲まず、三日にして死す」とある。(二) 鐘鼓、宮書と廟。

【題義】唐書地理志に「河南道兗州に任城縣あり」と記してある。又唐の官制として、縣令の佐に主簿があつて、その位は、丞の下、尉の上に在り、京縣は二人、從八品、畿縣上縣は正九品、中縣下縣は從九品、各一人といふこと。この詩は、李白が任城に往つた時、その縣令から、物質的には大分好遇されたが、その人が餘り譯の分かつた人物でもなかつたらしく、そこで不満で堪まらず、やがて辭して去らむとするとき、この詩を作つて、主簿の盧潛といふものに贈つたのである。

【詩意】むかし海鳥が天風の荒きに堪へ兼ねて、魯の東の城門に逃げて來ると、魯君は非常に之を好遇し、廟に觴し、九韶の樂を奏して、これを樂しませむと務めたが、海鳥は、今まで、かかる事に出遇はぬ故に、呆氣に取られて、觴に臨むも飲むこと能はず、翼を舉げて大空に飛ぶことを思ひ、鐘鼓の賑はしきも、少しも樂らしき心持はせず、野外の煙霜に其身をさらしたいと思つて居た。自分も、この任城の地に來り、非常に優遇はされたが、少しも満足せず、今將に歸り飛ばむとして居る。唯だ君だけは、同類の鴛鴻と思はれて、今まで親密にして居たから、物とはなしに別れ兼ね、ここに覺えず涙を流して、御挨拶を申し上げる次第である。

【餘論】この首は、全篇が比であつて、海鳥を以て自ら比し、鴛鴻を以て主簿に擬し、同類相憐むの意に本づいて、惜別に及んだのである。

早秋贈裴十七仲堪

早秋、裴十七仲堪に贈る

遠海動風色。吹愁落天涯。
 南星變大火。熱氣餘丹霞。
 光景不可廻。六龍轉天車。
 荆人泣美玉。魯叟悲匏瓜。
 功業若夢裏。撫琴發長嗟。
 裴生信英邁。屈起多才華。
 歷抵海岱豪。結交魯朱家。
 復攜兩少妾。豔色驚荷葩。
 雙歌入青雲。但惜白日斜。
 窮溟出寶貝。大澤饒龍蛇。
 明主儻見收。煙霄路非賒。
 時命若不會。歸應鍊丹砂。

遠海、風色を動かし、愁を吹いて、天涯に落つ。
 南星、大火を變じ、熱氣、丹霞を餘す。
 光景、廻すべからず、六龍、天車を轉す。
 荆人は美玉に泣き、魯叟は匏瓜を悲む。
 功業、夢裏の若く、琴を撫して、長嗟を發す。
 裴生、信に英邁、屈起、才華多し。
 歷抵す海岱の豪、交を結ぶ魯の朱家。
 復た兩少妾を攜へ、豔色、荷葩を驚かす。
 雙歌、青雲に入り、但だ惜む白日の斜なるを。
 窮溟には寶貝を出し、大澤には龍蛇饒し。
 明主儻し收めらるれば、煙霄、路賒なるに非ず。
 時命、若し會せざれば、歸つて應に丹砂を鍊るべし。

【字解】 一 南星變 大火、南星は南方の星、大火は心星。初昏の時、大火南方に見はれ、時に於て夏たり。もし、轉じて西に流るれば、わづかに秋となる。二 六龍 前に見ゆ。三 天車 日車と同じ。四 荆人泣美玉 卞和の事、前に見ゆ。五 魯叟悲匏瓜 魯叟は孔子、論語に「吾豈に匏瓜ならむや、焉んぞ、能く聚がつて食はざらむ」とある。六 風起 勃起と同じ。七 海岱 禹貢に海岱惟青州とあつて、孔傳に「東北は海に據り、西南は岱に距る」とある。八 朱家 漢の高祖と同時で、かつて季布を救つたことがあるし、游俠を以て時に聞こえ、關より以東、頸を延べて、交を願はざるなしといふ位。その詳は、史記游俠列傳に見ゆ。九 荷葩 荷花と同じ。【10】 餘はるかなり、遠しといふこと。

【題義】 十七は例の排行で、前に説明して置いたことがある。この詩は、早秋に際して、裴仲堪といふ人に贈つたので、その人物、英邁不羣なることを讚美して居る處を見ると、どうやら李白と同調の人と思はれる。

【詩意】 遠い海上に於て、風模様が變り、わが愁を吹いて天涯に落ち、其方に居る人を思ふの情に堪へぬ。南方の星たる大火は、その位置を變じ、世は、いつしか秋となり、夏の暑熱は、唯だ紅色の夕やけに残つて居るだけである。折ふしの移り行くのは、人力で引き戻すことは出来ず、羲和は、六龍に鞭ち、日の車を驅つて、しばらくも止む時はない。かくの如く、歲月相促す此世に居て、人事は兎角齟齬し易く、事は志と違ふのが常である。されば、楚の卞和は、美玉を獻せむとしても、石と誤まられたるに因つて、山中に號哭し、孔子は、吾、豈に匏瓜ならむや、とても食はずに居る譯には行か

ぬといつて嘆息された位。功業は、夢中の幻影に過ぎず、想うて此に至れば、琴を撫して長嘆を禁じ得ぬ次第である。ここに、わが友表仲堪といへる人は、天資英邁にして、草莽の中より屈起し、才華多きを以て世に知られ、東海泰山の間なる、古しへの齊魯の地を歴めぐりて、豪士の輩を訪問し、又朱家のやうな俠客とも交際して居る。仲堪は、一面に於ては、風流を解するもので、旅をする間、毎に二人の若い妾を引き具し、その容色の美なることは、蓮花かと驚くばかり、二人が一處に歌ふときは、すすしく句ある聲が青雲に入り、ただ白日の斜なるを惜む程である。むかしより、深い海には寶貝を生じ、大澤には龍蛇が多く住んで居るといふが、表生は、まさしく寶貝に擬し、龍蛇に比すべきもので、實に人中の精英である。されば、上に聖明の天子があつて、この人を收用したならば、雲の上の路とても、決して遙なるに非ず、やがて追追と立身するであらうし、若し時の運命と會せざれば、意を仕進に絶ち、丹砂を鍊つて神仙を學べば善い。いづれにしても、表生の如きは、超絶的の大人物であつて、顧みて、自重して貰ひたいのである。

【餘論】歴抵の二句を或は歴遊趙魏豪、結交列如麻に作り、繆本には、魯朱家の下に、良圖竟未展、意欲飛丹砂、破産且救人、遺身不爲家の四句がある。そして時命の二句を知飛萬里道、勿使歲寒嗟に作つてある。

贈范金鄉 二首

范金鄉に贈る 二首

君子枉清盼。不知東走迷。
離家未幾月。絡緯鳴中閨。
桃李君不言。攀花願成蹊。
那能吐芳信。惠好相招攜。
我有結綠珍。久藏濁水泥。
時人棄此物。乃與燕石齊。
撫拭欲贈之。申眉路無梯。
遼東慙白豕。楚客羞山雞。
徒有獻芹心。終流泣玉啼。
祇應自索漠。留舌示山妻。

君子、清盼を枉げ、知らず、東に走つて迷ふを。
家を離れて、未だ幾月ならず、絡緯、中閨に鳴く。
桃李、君、言はず、花を攀ちて、蹊を成さむことを願ふ。
那ぞ能く芳信を吐き、惠好、相招攜せむ。
我に結緑の珍あり、久しく濁水の泥に藏す。
時人、この物を棄て、乃ち燕石と齊し。
撫拭して之を贈らむと欲す、眉を申べて、路に梯なし。
遼東、白豕に慙ぢ、楚客、山雞に羞づ。
徒に獻芹の心あり、終に流す、玉に泣くの啼。
祇だ應に自ら索漠、舌を留めて山妻に示すべし。

【字解】(一)清盼、盼は目の白黒がはつきり分るること、涼しい目。(二)東走、淮南子に「狂者は東走し、逐ふ者亦た東走す、東走は同じ、東走する所以は異なり」とあり、抱朴子に「これ亦た東走の迷、忘奏の甘なり」とある。(三)絡緯、前に見ゆ。(四)

桃李 漢書に桃李不言、其下自成蹊とあつて、顔師古の註に「蹊は徑道を謂ふなり、言ふは桃李、その花實の故を以て、召呼あるに非ず、しかも、人争うて踰越し、來往絶えず、その下、自然に蹊を成す、以て、人、誠信の心を體げば、故に能く蹊に感ずるところあるに喩ふるなり」とある。【一】 芳信 芳訊、芳言に同じ。【二】 惠好 詩經に惠而好、我とある。【三】 結絲 玉の名、史記に「周に砥礪あり、宋に結絲あり、梁に懸琴あり、楚に和璞あり。この四寶は、土の生ずるところ、良工の失ふところなり」とある。【四】 燕石 河東に至り、墓冢の皆白きを見て、驚を懐いて還る」とある。【五】 楚客 楚山、尹文子に「楚客、山雉を擔ふ。路人問ふ、何の鳥ぞや。雉を擔ふもの、これを欺いて曰く、鳳凰なり。路人曰く、我、鳳凰を聞く、今直に之を見る、汝これを欺るか。曰く、然り、すなはち十金と。與へず、加倍せむことを請ふ。乃ち之を與ふ。楚王に獻せむとし、經宿にして死す。その金を惜むに違あらず、惟だ王に獻するを得ざるを恨む。王、聞いて之に感じ、召して厚く之に賜ひ、鳥を買ふの金に過ぐることを十倍」とある。【六】 獻芹 魯康の絶交書に「野人、背を炙ることを快とし、芹子を美とするものあり、これを至尊に獻せむと欲す。區區の意ありと雖も、亦た已に疎んぜらる」とある。【七】 泣玉 卞和の事、前に見ゆ。啼は即ち涙。【八】 索莫 索莫に同じ。【九】 留舌 史記に「張儀、その妻に謂つて曰く、吾が舌を觀よ、尚ほ在りや否や」とある。

【題義】 范金郷は、金郷の縣令范某である。唐書地理志に「河南道兗州に金郷縣あり」としてある。又蕭本には、金郷に作つてあつて、それならば字であらう。しかし、第二首に范宰とあるを見れば、これは、矢張、縣令に相違ない。

【詩意】 君子は、涼しき目を動かして、四邊を見まはし、狂者を逐うて東走するもの、心迷へるを知らず、あくまで純潔の心情を持つて居る。われ家を離れて、未だ幾月も経過せざるに、春去り、夏徂

き、世は既に秋に成つて、かごとがましき蟲の聲が、閨中に近くすだくのが聞こえる。君の徳化は、さながら桃李の花の如く、物言はざれども、誠信の心は、自然、人を引きつけて、その下、自ら蹊を成す位、われも亦た其花を攀ちて、蹊を開きたいと思ふ位。君にして、わが爲に、芳言を吐き、惠して之を好し、われを招いて、提攜して呉れるならば、この上もない仕合な事である。われは、結絲の美玉を持つて居るが、濁れる泥水の中に久しく藏して置いた故に、時人は、その寶たることを知らず、これを棄てて、宋人の燕石と同様、全然價の無い詰まらぬ物と思つて居る。そこで、われは之を拾ひ上げ、綺麗に拭つてから、君に贈らうと思ふのであるが、眉を伸べて仰ぎ見ると、君の處に登つて行く路に、梯が無いので、どうにも仕方が無い。つまり、自分には、才能があるけれども、世人に馬鹿にされて居るのが残念で、是非君の御目にかけたいと思つて居る、しかし紹介する人が無いから困まつて居る始末である。尤も自分でばかり善いと思つて居ても、遼東の白豕の如く、他に、いくらも其類があつたり、或は楚人が山雞を鳳凰と誤認したやうものであつては、まことに恥かしく、恐縮に堪へない。何は兎もあれ、野人獻芹の微志を以て、これを捧げむとし、又卞和が玉の眞價を認めて呉れる人が無いといつて、血の涙を流したといふやうに、自分も今おのが不運に泣いて居るので、其邊の處は、どうか、御推察を賜はりたい。かくて、今日の境涯は、索莫たる物淋しい中に居て、古しへの張儀の如く、吾が舌なほ有りや、これがあれば足れりといひつつ、山妻に向つて、威張つて居るやう

なものである。

范宰不買名。絃歌對前楹。

范宰名を買はず、絃歌して前楹に對す。

爲邦默自化。日覺氷壺清。

邦を爲むる、默して自ら化し、日に氷壺の清きを覺ゆ。

百里雞犬靜。千廬機杼鳴。

百里、雞犬靜に、千廬、機杼鳴る。

浮人少蕩析。愛客多逢迎。

浮人、蕩析少く、客を愛して逢迎多し。

遊子觀嘉政。因之聽頌聲。

遊子、嘉政を觀、これに因つて頌聲を聽く。

【字解】「一」不買名。淮南子に「絃歌鼓舞、詩書を飾飾し、以て名譽を天下に買ふ」とある。【二】自化。老子に「我無爲にして、民自ら化す」とある。【三】氷壺。鮑照の詩に「清如玉壺氷」とある。【四】機杼。織具、機は以て軸を轉じ、杼は以て緯を持す。【五】蕩析。播磨分析、分離する。【六】頌聲。太平歌頌の聲。

【詩意】范縣令は、前面の柱に對して、心のどかに絃歌しつつ、決して名譽を天下に買ふことをしない。かくて、無爲の治を以て、邦に臨み、しかも、民は自ら化し、その心情の清きことは、さながら玉壺の氷の如くである。かくて、百里の境内に於ては、雞犬の聲、しづかに相和して聞こえ、家ごとに、機織る響が絶間ない位、浮浪人とても、ここを離れて流寓することなく、又縣令自ら客を愛し

て、日夕逢迎することが多い。われは、旅人として此地に來り、面のあたり、善政を見て、縣令の人物を感じ、歌頌の聲賑はしきも、尤も至極な事と深く心に感じて、うれしく思つた。

贈瑕邱王少府

瑕邱の王少府に贈る

皎皎鸞鳳姿。飄飄神仙氣。

皎皎たる鸞鳳の姿、飄飄たる神仙の氣。

梅生亦何事。來作南昌尉。

梅生亦た何事ぞ、來つて南昌の尉となる。

清風佐鳴琴。寂寞道爲貴。

清風、鳴琴を佐け、寂寞として、道を貴しと爲す。

一見過所聞。操持難與羣。

一見聞くところに過ぐ、操持ともに羣し難し。

毫揮魯邑訟。目送瀛洲雲。

毫は魯邑の訟を揮ひ、目は瀛洲の雲を送る。

我隱屠釣下。爾當玉石分。

我は屠釣の下に隱るるも、爾は當に玉石を分つべし。

無由接高論。空此仰清芬。

高論に接するに由なく、空しく此に清芬を仰ぐ。

【字解】「一」梅生。漢書に「梅福、字は子真、九江壽春の人、郡の文學となり、南昌の尉に補せらる。後、官を去つて、壽春に歸る。元始中に至つて、王莽、政を專にす、福、一朝妻子を棄て、九江に去る。今に至つて、傳へて、以て仙となす」とある。【二】瀛洲。海中三山の一、前に見ゆ。【三】屠釣。晉書に「梁國の張儉、志趣常ならず、自ら屠釣に隱る」とある。

【題義】瑕邱は、唐書地理志に「河南道兗州に瑕邱縣あり」と記してある。この詩は、瑕邱の縣令王某に贈つたのである。

【詩意】王少府は、皎皎たる鸞鳳の姿であつて、飄飄たる神仙の氣を備へ、天晴な人物であるのに、かかる微官に居るのは、丁度、梅福が南昌の尉となつたやうなものである。王少府は、堂上に坐し、清風に向つて琴を弾じ、無爲寂寞の道を以て、その地を治めて居るといふ評判であるが、實際、この地に来て見ると、從來聞くところに過ぎて、その操守は、超然として羣を抜いて居る。かくて、筆を揮へば魯邑の訴訟を判決し、そして、閑暇なるときは、瀛洲の雲を望んで、出世間的の遠志を託して居る。われは今屠釣の下に隠れて居るが、君の慧眼を以て、容易に玉石を判別されるであらう。しかし、縁薄くして、未だ面晤の上、高論を拜聴することが出来ず、ただ君の美名の高きを仰いで、敬慕の念を寄するのみである。

東魯見狄博通 東魯に狄博通を見る

去年別我向何處。去年、我に別れて、何處に向ふ。

有人傳道遊江東。人あり、傳へ道ふ、江東に遊ぶと。

謂言挂席度滄海。謂ふならく、席を掛けて滄海を渡る。

却來應是無長風。却つて來る、應に是れ長風なかるべし。

【字解】(一)長風 宋書の宗憲傳に「願はくは、長風に乘じて、萬里の浪を破らむ」とある。

【題義】唐書宰相世系表に、博通は梁公狄仁傑の曾孫、戸部郎中光濟の孫とある。して見れば、名門の後裔で、又然るべき人物であつたに相違ない。この詩は、李白が東魯に於て、其人に遇つた時、賦して贈つたのである。

【詩意】君は、去年、我に別れて、旅路に向はれたが、何處へ往かれたか、人の噂を聞けば、江東に遊んで居ることである。そこへ往くには、帆をかけて、大海を渡つたのであるが、歸ることの遅かつたのは、長風の便が無かつたからであらう。

見京兆韋參軍量移東陽 二首

京兆韋參軍が東陽に量移せらるるを見る 二首

潮水還歸海。流人却到吳。潮水、還た海に歸り、流人、却つて吳に到る。

相逢問愁苦。淚盡日南珠。相逢うて愁苦を問へば、涙は盡く日南の珠。

【字解】【一】吳、東陽は東吳の地なるが故に云ふ。【二】日南珠、相傳へて、日南郡の海中、多く珠を産す、むかし、鮫人あり、水中より出でて人家に寄居し、鮫を賣る、去るに臨んで、主人より器を索め、泣いて珠を出し、盤に滿ちて主人に贈るといふことがある。鮫人は即ち人魚の類。又洞冥記に「日南の人、長さ七尺、象に乗つて海中に入り、寶物を鮫人の宅に求めて、涙珠を得たり、鮫人泣くところの珠なり」とあつて、涙靈の句は、即ち之を暗用したのである。

【題義】京兆は長安。參軍は刺史の官屬。量移とは罪を得て遠方に貶竄されしものが、赦に遇つて近地に改められることで、つまり、情狀を酌量して、いくらか善い地方へ移すといふことである。東陽は婺州、後には浙江金華府に屬して居た。舊唐書玄宗紀に、開元二十年十一月庚午、后土を唯上に祀り、天下に大赦し、左降官は近處に量移す。二十七年二月己巳、尊號を加へて、天下に大赦し、左降官は近處に量移す」とあつて、量移の字は、はじめ、此に見え、又李白の此詩を作つたのは、多分、後の方、即ち開元二十七年であつたらうと推測される。この詩は、京兆府尹參軍たりし章某が、はじめ、日南の驩州に流され、後に大赦に會し、量移して東陽に遷されることになり、李白が其人に遇つて贈つたのである。

【詩意】潮水自ら海に歸る時あれば、流人も亦た歸朝の日あるべきに、君は今、やつと東陽に量移されたばかりである。そこで、相遇うて、謫官以來の愁苦を問はむとするに、千萬無量の意は、なかなか言葉で盡されず、相見ては、ただ泣くばかり。ああ日南の珠を擧げて、盡くこの涙より生

せしか、抑も日南の珠、盡く化して、この涙となりしか。いづれにもせよ、感慨無量、まことに情に堪へぬことである。

聞説金華渡、東連五百灘。

聞くならく金華の渡、東は五百灘に連ると。

全勝若耶好、莫道此行難。

全く若耶の好きに勝る、道ふ莫れ、この行難しと。

猿嘯千谿合、松風五月寒。

猿嘯、千谿合し、松風、五月寒し。

他年一攜手、搖艇入新安。

他年一たび手を攜へ、艇を搖かして新安に入らむ。

【字解】【一】五百灘、一統志に「五百灘は、金華府城西五里に在り、灘の最も大なるもの、番に傳ふ、舟行挽牽五百人、方に渡るべし」とある。【二】若耶、前に見ゆ。【三】艇、小舟。【四】新安、江の名、一名青溪、歙州に出で、歙縣より淳安縣界を經、嚴州府城の南に至りて、嚴州港に合し、東、浙江に入る」とある。

【詩意】君の今度行かれる東陽には、金華渡といふ名勝があるさうで、東は名だたる五百灘に連り、その風景は、若耶谿にも勝つて居るから、今次の旅の困難なことなどは、言はずとも善い。その金華渡附近には、千谿疊合して、猿の聲が聞こえ、松風颯颯として、五月なほ寒さを覺える位。われも亦た他年その地に至り、君と手を攜へ、小舟に乗つて、そこより、新安江の方に行きたいと思つて居る。【餘論】前首は、無限の愁苦を敘し、淒涼滿目、いかに悲しげであつたから、後首に於ては、その

地の絶勝を點出し、聊か慰藉の意を寓したので、二首相俟つて、各その妙を盡して居る。

贈丹陽横山周處士惟長

丹陽横山の周處士惟長に贈る

周子横山隱。開門臨城隅。

周子横山の隱、門を開いて城隅に臨む。

連峰入戶牖。勝槩凌方壺。

連峰、戸牖に入り、勝槩、方壺を凌ぐ。

時作白紵詞。放歌丹陽湖。

時に白紵の詞を作り、放歌す丹陽湖。

水色傲溟渤。川光秀菰蒲。

水色、溟渤に傲り、川光、菰蒲を秀づ。

當其得意時。心與天壤俱。

その得意の時に當つて、心は天壤と俱にす。

閒雲隨舒卷。安識身有無。

閒雲、舒卷に隨ひ、安んぞ身の有無を識らむ。「を笑ふ。

抱石恥獻玉。沈泉笑探珠。

石を抱いて、玉を獻するを恥ぢ、泉に沈んで、珠を探る」

羽化如可作。相攜上清都。

羽化如し作すべくんば、相攜へて清都に上らむ。

【字解】(一) 横山、題義の項に見ゆ。(二) 方壺、海中三神山の一、前に見ゆ。(三) 白紵詞、前に見ゆ。(四) 丹陽湖、江南志に「丹陽湖は、江寧府高淳縣の西南三十里、太平府當塗縣の東南七十里に在り、湖の中央を以て分界とす。その源、三あり、歐州高淳、

寧國、廣徳の諸溪、皆これに匯し、進じて三湖となる。一を石臼といひ、一を固城といひ、一を丹陽といふ。而して、丹陽最も大、蓋し總名なり、周圍三百餘里」とある。【五】菰蒲、菰はこも、本草に「蘇頌曰く、菰根は、江湖波澤中、皆之あり、水中に生ず、葉は蒲葉の如く、刈つて以て馬を秣へば甚だ肥ゆ。春末、白芽を生ず、節の如し、即ち菰菜なり、又これを莖白といふ、生熟皆喫ふべし、甜美。その中心、小兒の臂の如きものを菰手と名づく、菰首に作るは非なり」とある。蒲はがま、本草に「李時珍曰く、蒲は水際で叢生し、莖に似て編、香あつて柔、二三月、苗を生じ、八九月、葉を收む、以て席と爲す、亦た扇を作るべし、軟滑にして温」とある。【六】抱石、抱石、下和の故事、數ば前に見ゆ。【七】探珠、莊子に「人、宋王に見ゆるものあり、車十乘を以て莊子に獻る。莊子曰く、河上に、家貧に、隸屬を恃んで食するものあり、その子、淵に没して千金の珠を得たり。その父、その子に謂つて曰く、石を取り來つて之を鍛へよと。夫れ、千金の珠は必ず九重の淵にして、麗龍領下に在り、子、能く珠を得とは、必ず其淵に遭ふなり。麗龍をして寤めしむれば、子尙ほ笑んぞ微しく之あらむや。今、宋國の深きは、直に九重の淵のみに非ざるなり、宋王の猛は、直に麗龍のみに非ざるなり。子、能く車を得たるは、必ず其淵に遭へるならむ。宋王をして寤めしむれば、子、蓋粉とならむ」とある。【八】羽化、仙と成つて去ること。【九】清都、上帝の都するところ、前に見ゆ。

【題義】丹陽は縣名、唐書地理志に「潤州の丹陽郡に丹陽縣あり、本と曲阿、天寶元年、名を更む」とある、横山は、太平御覽に「山謙之の丹陽記に曰く、丹陽縣東十八里に横山あり、連亘數十里、傳へて云ふ、楚の子重、横山に至ると、是れなり」とあり、江南通志に「横山は、江寧府江寧縣の東南一百二十里、高淳縣東二十里に在り。その山、四方、これを望めば皆横、故に横山といふ」とあり、太平府志に「横山は、當塗縣東六十里に在り、高さ二百丈、周八十里、穹窿巖峻、蒼翠、天際に互り、四望皆横、故に横山と名づく。江寧の深水と壤を接す。丹陽湖は、その南に在り。春秋、楚の子重、

贈丹陽横山周處士惟長

重、吳を伐つて至るところの地」とある。この詩は、丹陽縣の横山に住める處士、周惟長に贈つたのである。

【詩意】周惟長は、横山に住む隱士であつて、その家の門よりすれば、丹陽縣城を見下ろすことが出来る。横山につづける連峰は戸牖に入り來り、その景勝は、海中三神山の一なる方壺をも凌ぐ位。時としては、吳地に流行する白紵の詞を作り、丹陽湖上に放歌して居る。その湖中の水の色は、大海に倣るべく、汀渚一帯には、菰だの蒲だのが秀でて、つやつやしく見える。周子が得意の時に當つては、その心、天地と契合するが如く、たとへば、閉雲が心のままに舒卷すると一般、この形骸の有無をさへ忘れる位である。むかし、卞和は、玉璞を獻じて、楚王に容れられず、石だといはれ、その石を抱いて、山中に號哭したといふが、われは折角の才能あるも、世に認められないのは、如何にも残念であるし、泉に沈んで、驪龍の晝睡をして居る間に、珠を見つけやうとするのは、如何にも險呑な話で、そんな事は、爲たくはないので、つまり、この世に對しては、何も望むところはな。但し、眞を修めて羽化登仙することが出来るならば、君と相攜へて、天帝の在ます清都に往きたいものである。

玉眞公主別館苦雨贈衛尉張卿 二首

玉眞公主別館に雨に苦しみ、衛尉張卿に贈る 二首

秋坐金張館。繁陰晝不開。

秋、金張の館に坐し、繁陰、晝、開かず。

空煙迷雨色。蕭颯望中來。

空煙、雨色を迷ひ、蕭颯として、望中より來る。

翳翳昏墊苦。沈沈憂恨催。

翳翳として、昏墊苦なり、沈沈として、憂恨催す。

清秋何以慰。白酒盈吾杯。

清秋、何を以てか慰めむ、白酒、吾が杯に盈つ。

吟詠思管樂。此人已成灰。

吟詠、管樂を思ひ、この人、すでに灰となる。

獨酌聊自勉。誰貴經綸才。

獨酌、聊か自ら勉む、誰か貴ばむ經綸の才。

彈劍謝公子。無魚良可哀。

劍を彈じて、公子に謝す、魚なきは、良に哀むべし。

【字解】【一】金張、漢書に「功臣の後、唯だ金氏張氏あるのみ、親近寵貴外戚に比す」とある。【二】昏墊、暗くして濕める、霖雨の苦をいふ。【三】成灰、王充論衡に「人死して血脈竭く、湯きて精氣滅す、滅して形體朽つ、朽ちて灰土を成す」とある。【四】公子、張卿を指す。【五】無魚、史記孟嘗君列傳に「馮驩、その劍を彈じて歌つて曰く、長饑歸來乎食無魚」とある。

【題義】玉眞公主は、前に一寸見えて居たが、その詳は、唐書公主列傳に「玉眞公主は、睿宗の第十女なり、はじめ、崇昌縣主に封せらる。大極元年、出家して、道士となり、方士史崇玄を以て師となし、改めて、玉眞公主と稱し、玉眞觀を京師に築き、俄に號を上清玄都太洞三景師に進む。天寶三載、上言すらく、先帝、妾が家を捨つるを許す。今仍ほ主第を明りにし、租賦に食す。願はくは、

公主の號を去り、邑司を罷め、これを王府に歸さむ、と。玄宗許さず。又言ふ、妾は高宗の孫、睿宗の女、陛下の女弟、天下に於て賤と爲さず、何ぞ必ずしも名を主號に繋ぎ、湯沐に資し、然る後に貴と爲さむ。請ふ、數百家の産を入れ、十年の命を延ばさむ、と。帝、その意を知り、乃ち之を許す。實應の時の古樓觀に葬す」とある。又紫雲衍慶集に「玉真公主、金仙公主と俱に入道す、今樓觀南山の麓に玉真公主祠堂の存するあり。俗傳、その地を邸宮といひ、以て主家別館の遺址と爲すなり。然れども、碑誌湮沒、圖經廢舛、惟だ開元中戴璇樓觀碑に玉真公主師心此地の語あり、而して、王維、儲光羲、皆玉真公主山莊山居の詩あれば、玉真祠堂觀の別館たること審かなり」といひ、因盡錄に「唐人の題詠、これを祠中に刻す、元祐二年歲在丁卯七月既望、河東薛紹彭題、謂はゆる別館、疑ふらくは、即ち此地是れか」とある。して見れば、玉真公主は、玉真觀を立て、清修の處として之に居り、別に今の祠堂の在る地に別館を建てて、燕息の處としたので、李白は、從來公主の御引立を蒙りたるに因り、その別館に止宿したのである。衛尉は、唐書百官志に「衛尉寺卿一人、從三品、少卿二人、從四品、器械文物を掌る」とあるから、今でいへば我が宮内省大官の一員で、調度頭といつたやうなもので、その爵位も、もとより高い。この詩は、李白が公主の別館に滞在する間、雨に降りこめられて、無聊に堪へ兼ね、仍つて、之を賦して、衛尉寺卿の張某に贈つたのである。

【詩意】 公主の別館は、古しへの金張二氏の邸宅に比すべく、ここに滞留して居るのは、至極結構であるが、折から秋の空は、搔き曇つて、晝に成つても晴れず、まことに鬱陶しい。かくて、中天に纏引く煙は、雨色を迷はしめ、果然、蕭颯として雨の斜に降り注ぐのが見えた。そこで、もやもやして、暗く且つ濕れるに閉口し、沈沈として、憂恨の念が自然に催して來た。たださへ清秋の淋しい折から、この雨では、とても遣り切れないので、何を以て吾が心を慰めむかといへば、ただ白酒を酌むより外はない。醉餘の意氣、昂然として、古しへの管仲樂毅を思ひ出で、どうか、一處になつて、教を受けむことを欲すれども、これ等の人人は、死後すでに久しく、形骸も全く朽ちて、灰と成つて仕舞つたから、今さら、仕方がない。そこで、獨酌して、聊か自ら氣を取り直し、奮勵せむと欲すれども、今の世に於ては、經綸の才を貴ばず、誰も自分の眞價を認めて呉れるものが無い。仕方がないから、古しへの馮驩を學び、劍を弾じて、張卿に訴へるので、食に魚なき今の境涯、まことに詰らないから、どうか、幾重にも御引立に預りたいものである。

苦雨思白日。浮雲何由卷。
 稷高和天人。陰陽乃驕蹇。
 秋霖劇倒井。昏霧橫絕巘。

苦雨には白日を思ふ、浮雲、何に由つてか卷かむ。
 稷高、天人を和し、陰陽、乃ち驕蹇。
 秋霖、倒井よりも劇しく、昏霧、絶巘に横ふ。

欲往咫尺塗終成山川限。
咫尺の塗を往かむと欲するも、終に山川の限を成す。
 漂漂奔溜聞浩浩驚波轉。
漂漂として奔溜聞こえ、浩浩として驚波轉す。
 泥沙塞中途牛馬不可辨。
泥沙、中途を塞ぎ、牛馬、辨すべからず。
 飢從漂母食閒綴羽陵簡。
飢ゑて、漂母に従つて食し、閒に羽陵の簡を綴る。
 園家逢秋蔬藜藿不滿眼。
園家、秋蔬に逢ひ、藜藿、眼に満たす。
 蟪蛄結思幽蟋蟀傷福淺。
蟪蛄は思を結ぶこと幽に、蟋蟀は福淺を傷む。
 廚竈無青煙刀机生綠蘚。
廚竈に青煙なく、刀机に綠蘚を生ず。
 投筋解鷓鴣換酒醉北堂。
筋を投じて、鷓鴣を解き、酒に換へて、北堂に醉ふ。
 丹徒布衣者慷慨未可量。
丹徒布衣の者、慷慨未だ量るべからず。
 何時黃金盤一斛薦檳榔。
何時か、黃金の盤、一斛、檳榔を薦めむ。
 功成拂衣去搖曳滄洲旁。
功成らば、衣を拂つて去り、搖曳す滄洲の旁。

【字解】(一) 稷高、高は古しへの契の字、后稷と契との二人。(二) 秋霖、雨三日より以上を霖となす。(三) 漂漂、水の會する貌。(四) 奔溜、溜は行潦、にはたづみ、雨の溢れたる水。(五) 牛馬不可辨、莊子に「秋水時に至り、百川河に溢ぐ、湍流の大、爾

淡清崖の間、牛馬を辨せず」とある、辨は分別する。(六) 漂母、前に見ゆ。(七) 蟪蛄、連補する。(八) 羽陵、穆天子傳に「天子、東遊し雀梁に次し、藜藿を羽陵に曝す」とある。(九) 閒、書解。(一〇) 藜藿、あかざと豆の葉。(一一) 蟪蛄、足長蜘蛛。(一二) 蟋蟀、きりぎりす、前に見ゆ。(一三) 投筋、筋は箸、前に見ゆ。(一四) 鷓鴣、表の名、司馬相如が鷓鴣姿を興して酒を買ひしこと、前に見ゆ。(一五) 丹徒布衣者、南史劉穆之傳に「諸葛長人、異謀あり。穆之、厚く之が備を爲す。所親に謂つて曰く、貧賤なれば常に富貴を思ひ、富貴なれば必ず危懼を隨む、今日、丹徒の布衣たるを思ふも、得べからざるなり」とある。(一六) 檳榔、上文の檳榔に「穆之、家貧、好んで妻の兄の家に住いて食を乞ふ。多く辱めらるるも、以て恥と爲さず。江氏、後に慶會あり。屬して、來ることなからしむ。穆之、猶ほ往き、食畢つて、檳榔を求む。江氏、兄弟、これに戲れて曰く、檳榔は食を消す、君、乃ち嘗て飢う、何ぞ忽ち此を須むむや」と。穆之が丹陽の尹となるに及び、將に妻の兄弟を召さむとす。妻、泣いて稽顙以て謝を致す。穆之曰く、本と想を置さず、憂を致すところなし」と。醉に至るに及び、穆之乃ち廚人をして、金盤を以て、檳榔一斛を貯へ、以て之を進めしむ」とある。(一七) 滄洲、仙土、前に見ゆ。

【詩意】連日の雨に閉口して、早く好天氣に成れば善いかと思つて居るが、浮雲を卷き收める術も無いから、仕方がない。今日聖明の世、后稷と契の如き賢臣が宰輔の位に居て、天人を調和して、至治を布いて居るに拘はらず、陰陽二氣は、勝手に驕り高ぶつて、かくの如き不順の天候を成して居る。秋霖の勢、凄しく、井を倒にしたよりも烈しい程で、暗い霧は、嶮しき峰巒に横はつて居る。そこで、極極近い處へ往かうと思つても、幾重の山川が之が限を爲して居る様で、容易に行くことが出来ない。雨水は、道途に溢れ、漂漂として水音高く、浩浩として、驚波を翻す有様。その押し流した泥沙は、途を塞いで、歩けもせず、對岸に居るものは、牛か馬か區別がつかぬ位に、水はひろび

ろと湛へて居る、この時に當り、われは、玉真公主の別館に寄寓して居るが、丁度、古しへの韓信が漂母の處に寄食して居ると同じである、それから格別の所用もなき儘、かの羽陵の畫書に比すべき畫冊を綴ちて繕つて居る。今しも、農家では秋の菜蔬を採る時分であるが、ここで食膳に供するは、藜藿の類で、それさへ、十分でない。室中には足高蜘蛛が出て来て、物とはなしに、人の愁を牽き、きりぎりすの聲も、門庭の狹きを唧つ如く聞こえる。何にせよ、公主の別館は人の出入も少く、食物さへ碌碌調理せぬから、厨の竈には青煙の上ることなく、俎は用ひずして棄ててあるから、その上に苦を生ずるといふ始末。これでは、どうにも仕方がない。そこで、箸を抛つて食を止め、身に著けて居る鷄鶩裘を解き、これを典して酒を買ひ、北堂に坐して痛飲し、わづかに鬱憤を散じて居る。むかし、劉穆之は、丹徒の布衣であつて、はじめは貧に苦み、随分慷慨もしたが、われも今この通りで、百感胸を塞いで、まことに堪へられない。しかし、穆之が後に富貴に成つて、一斛の檳榔を黄金の盤に盛つて、妻の兄弟に與へ、これ見たかと言はぬばかりの態度は、まことに痛快であるが、われも亦た、いつかは、かういふ風に有りたいものである。かくて、この世に於て、おもふ存分の功業を立てし後は、衣を拂つて去り、超然獨立、かの滄洲の邊に逍遙して、仙を楽しみたい。それにつけても、刻下窮苦の境涯、どうか一片の同情を垂れて戴きたいものである。

贈韋祕書子春

韋祕書子春に贈る

谷口鄭子眞躬耕在巖石。

谷口の鄭子眞、躬耕して巖石に在り。

高名動京師。天下皆藉藉。

高名、京師を動かし、天下皆藉藉。

斯人竟不起。雲臥從所適。

この人、竟に起たず、雲臥、適するところに從ふ。

苟無濟代心。獨善亦何益。

苟くも、濟代の心なくんば、獨善、亦た何の益かあらむ。

惟君家世者。偃息逢休明。

惟だ君の家を世にする者、偃息して休明に逢ふ。

談天信浩蕩。說劍紛縱橫。

天を談じて、信に浩蕩、劍を説いて、紛として縱橫。

謝公不徒然。起來爲蒼生。

謝公徒然たらず、起ち來つて、蒼生の爲にす。

祕書何寂寂。無乃羈豪英。

祕書何ぞ寂寂たる、乃ち豪英を羈するなからむや。

且復歸碧山。安能戀金闕。

且つ復た碧山に歸る、安んぞ能く金闕を戀はむ。

舊宅樵漁地。蓬蒿已應沒。

舊宅樵漁の地、蓬蒿、すでに應に沒すべし。

却願女兒峰。胡顏見雲月。

却つて女兒峰を願み、胡の顔か、雲月を見る。

徒爲風塵苦。一官已白髮。

徒に風塵の爲に苦み、一官すでに白髮。

氣同萬里合。訪我來瓊都。氣同じく萬里合し、我を訪うて瓊都に来る。
 披雲觀青天。捫虱話良圖。雲を披いて青天を觀、虱を捫つて良圖を話す。
 留侯將綺里。出處未云殊。留侯と綺里と、出處未だ殊なりと云はず。
 終與安社稷。功成去五湖。終に與に社稷を安んじ、功成らば五湖に去らむ。

【字解】(一) 谷口鄭子真。高士傳に「鄭樸、字は子真、谷口の人なり。道を修めて靜默、世、その清高に服す。成帝の時、大將軍王鳳、樸を以て之を聘す、遂に屈せず。揚雄、樸に其德を稱して曰く、谷口の鄭子真、巖石の下に耕し、名、京師に振ふ」とある。
 (二) 捫虱。啗虱の意、がまびすしきこと。(三) 低息。臥し息ふ、安居する。(四) 談天。史記に「齊人頌して曰く、天を談するは術」とあつて、要略の註に「劉向別錄に曰く、鄭衍の言ふところは、五德終始、天地廣大、書、天の事を言ふ、故に談天といふ」とある。
 (五) 說劍。莊子に說劍の一篇がある。(六) 謝安。謝安、東山に高臥せしこと、前に見ゆ。(七) 女几。元和郡縣志に「女几山は、河南府福昌縣の西南三十四里に在り」といひ、一統志に「女几山は、河南宜陽縣の西九十里に在り、唐の李賀の集に、杜蘭香は神女上昇、遺几在り、故に名づく」とある。(八) 瓊都。仙京、ここでは道觀をいふ。(九) 披雲觀青天。世説に「衛伯玉、尙書たり。樂廣の中朝の名士と談論するを見、子弟に命じ、これに違らしめて曰く、この人は、人の水鏡なり、これを見れば、雲霧を披いて青天を觀るが若し」とある。(一〇) 捫虱。晉書に「桓温、關に入る、王猛、褐を被つて之に謁し、一面して當世の事を談じ、虱を捫つて言ひ、旁に人なきが若し」とある。(一一) 留侯。綺里。前に見ゆ。(一二) 五湖。吳越春秋に「范蠡、乃ち扁舟に乘じ、三江を出でて五湖に入る、その適くところを知るなし」とある。

【題義】唐書百官志に「秘書省に監一人、少監二人、丞一人、秘書郎三人、校字郎十人、正字二人あり」と見えて居る。唯だ秘書とあるだけでは、省中の何の職か、一寸分らない。或は長官の秘書官かも知れぬ。次に、子春は字らしいが、本名は又分らぬ。この詩は、秘書省に奉職せる章某が、來訪せしに因り、晤談時を移せし後、賦して贈つたのである。篇中、訪我來瓊都の一句あるを見れば、矢張、玉真公主の別館に居た頃の作でもあらうと思はれる。

【詩意】むかし、谷口の人、鄭子真といふ者は、道を修めて靜默を旨とし、巖石の間に隱居して、躬ら耕して生活をして居たが、その高名は、京師を震動し、天下藉藉として之を稱して居た。しかし、子真は、終に起たず、いつまでも山中に居て、白雲に臥し、その從容自適するところに從つて居た。苟くも大丈夫たるものは、當代を救済する志が無くてはならぬので、獨り其身を善くしただけでは、何の益もない。この點から言へば、流石の子真も、あまり貴ぶに足らぬ譯である。これに反して、君は、歴代名門の家に生まれ、安居して、この目出たき昇平の世に遇ひ、天を談じては、浩蕩として際なきが如く、劍を説いては、紛として縱横、變化窮まらざる趣がある。むかし、謝安は、東山に隱れて居たが、これは、唯だ時を待つて居たので、やがて、起ち來つては、蒼生の爲にし、その宿願に負かなかつたので、君も、矢張さういふ大志を懷いて居た。然るに、今は秘書省に奉職して居るが、元來、秘書省は、寂寂として實務と懸け離れた處で、これでは、折角の豪英を無理に羈束するのでは無いかと思はれる。それかといつて、再びむかしの碧山に歸つて仕舞へば、宮闕を戀ひ慕ふた處で、

千里相隔つて、とても及びもないことになるし、おまけに、舊宅は、漁樵に適した地ではあつたが、すでに蓬蒿に没せしなるべく、今歸つた處で、仕方がない。かの仙女が其跡を留めたといふ女兒峰は、その近傍に在るが、顧みて之を望まむとするも、如何なる顔をして、物外の雲月を觀られるか。かくて、君は折角の才藝ありながら、いはば、不遇であつて、徒に浮世の風塵に苦められ、一官を守つて、すでに白髪頭に成つて來たので、まことに、御氣の毒の事である。但し、氣が同じければ、萬里の遠きも、やがて合すといふ位、君はわれと同じ志操を持つて居られることと思ふから、試に、われを訪うて、この瓊都に御出でなさい。かくて、膝を交へて快談すれば、われをして、かの樂廣と同じく、雲を披いて青天を觀るの想を爲さしむべく、又王景略を學び、虱を捫りつつ、然るべき計畫に就いて、いろいろ御話を致しませう。かの張良と綺里季等とは、一寸見ると、全く別の人物の様であるが、張良は、晩年世を謝し、赤松子に従つて、遊んだといふから、高山に隠れて居た彼の綺里季等、即ち四皓と、出處進退、格別異なつて居る譯でもない。われ等の希望するところは、一かどの事業を完成して社稷を安んじ、やがて功成り名立ちし後は、古しへの范蠡の如く、超然高蹈、一葉の扁舟に乗じて、五湖に去らうといふので、君の志も定めてさういふのであらう。

【餘論】蕭本には、起首より胡顔見雲月に至るまでを一首とし、徒爲風塵之苦より、功成去五湖に至るまでを一首とし、韻を叶へる爲に白髪を白鬚に作つてある。しかし、王琦は「この詩、一氣貫注、斷乙する能はず、通じて一首に作るを是となす。故に校して古本に従ふ」といつて居るが、矢張、その方が善いやうである。

贈韋侍御黃裳 二首

韋侍御黃裳に贈る 二首

太華生長松。亭亭凌霜雪。

太華、長松を生じ、亭亭として霜雪を凌ぐ。

天與百尺高。豈爲微颺折。

天は百尺の高きを與ふ、豈に微颺の爲に折れむや。

桃李賣陽豔。路人行且迷。

桃李は陽豔を賣り、路人行 且つ迷ふ。

春光掃地盡。碧葉成黃泥。

春光、地を掃うて盡くれば、碧葉、黃泥と成る。

願君學長松。慎勿作桃李。

願はくは、君、長松を學び、慎んで桃李と作ること勿れ。

受屈不改心。然後知君子。

屈を受けて心を改めず、然る後に君子を知る。

【字解】(一)太華、華山、前に見ゆ。(二)亭亭、高き貌。(三)微颺、颺は回風、こゝでは微風に同じ。

【題義】因話錄に「御史臺は三院、一に曰く臺院、その僚を侍御史といひ、衆、呼んで端公といふ。二に曰く殿院、その僚を殿中侍御史といひ、衆、呼んで侍御といふ。三に曰く察院、その僚を監察御史といひ、衆、呼んで亦た侍御といふ」とある。この詩は、韋黃裳に贈つたのであるが、ただ侍御と

あるだけでは、侍御史か、監察御史か、その邊の區別は分らぬが、篇中に驄馬とあるを見れば、侍御史の方であらう。

【詩意】西嶽華山の上に長松を生じ、亭亭として高く聳え、常に霜雪を凌いで居る。天は、この松に向つて特に百尺の高さを與へたので、一寸位の風には、びくともしない。處が、桃李の花は、二三月、陽豔の春に對して笑を賣るもので、路ゆく人も、歩きながら、豔なる其花の色に迷うて、これを愛賞するが、やがて、九十の春光、地を掃うて盡くれば、その碧色の葉までが、凋落して、黄泥と成つて仕舞ふ。つまり、麗しいには相違ないが、壽命が短くて、まことに脆いものである。願はくは、君は長松を學び、慎んで桃李に成らぬやうにせられたい。長松ならば、如何なる憂き目を見たとともに、決して、心を改めないで、ここが即ち宛然君子たる處であつて、吾吾も亦た此點を學ばねばならぬ。

見君乘驄馬。知上太山道。

君が驄馬に乗るを見て、太山の道に上るを知る。

此地果摧輪。全身以爲寶。

この地、果して輪を摧く、身を全うし以て寶となす。

我如豐年玉。棄置秋田草。

我は豐年の玉の如く、棄置す秋田の草。

但勗氷壺心。無爲嘆衰老。

但だ氷壺の心を勗め、無爲にして衰老を嘆す。

【字解】【一】驄馬。後漢書に「桓典、侍御史に拜す。この時、宦官、權を乘る。典、正を執つて、回避するとこゝろなく、常に驄馬に乗す。京師長傳し、これが語を爲して曰く、行且止、避驄馬御史」とある。【二】太山。一に太行に作る。魏の武帝の北上行に、北上太行山、觀設何後、羊腸既詰屈、車輪爲之摧とあつて、その方が切實であるし、下句の此地果摧輪に緊接する。【三】豐年玉。世説に「世、庾文康を稱して豐年の玉となし、王稚恭を荒年の穀となす」とある。【四】氷壺心。鮑照の詩に清如玉壺氷とあるに本づく。

【詩意】君は今驄馬に乗つて居られるが、これから、太行の山に登るといはれる。しかし、太行山は、車輪をさへ摧くといふ位で、危険を冒すのは、君の爲に憂ふことで、人は其一身を全うするのが第一である。我輩の刻下の境涯は、豐年の玉の如く、世の中が段段奢つて來ると、玉などは幾らでもあつて、何でもないし、まして豐年で、金まはりの善い時には、少しも價がなく、秋田の草の中に棄てられることさへあるが、これを以て自ら足れりとし、唯だ無爲にして、年の寄ることだけを嘆いて居る。しかし、君に向つては、あくまで清白の心を持し、さながら玉壺の氷の如くならむことを望むのである。

【餘論】嚴滄浪は前首を評して「用意古に近し」といひ、後首を評して「懷彼己を通ず、身を寶とし、心を勗む、用意深厚」といひ、乾隆御批には「古道人を照らす、朋友交勉の誼を得たり。勗君青松心、努力保霜雪、立言かくの如し、以て不朽たるべし」とある。元來侍御史は、人を糾彈する役人であるから、その人は、骨鯁剛直にして、宜しく長松の如くなるべく、そして、氷壺の心を持つて

居るべきであるが、あまり峻酷に過ぎて、世の中の危険を犯すやうなことがあつてはならぬといつて、懇に勸告したので、そこが即ち詩人忠厚の本旨である。

贈薛校書

薛校書に贈る

我有吳趨曲。無人知此音。我に吳趨の曲あり、人の此音を知るなし。

姑蘇成蔓草。麋鹿空悲吟。姑蘇は蔓草となり、麋鹿空しく悲吟す。

未誇觀濤作。空鬱釣鼈心。未だ觀濤の作に誇らず、空しく釣鼈の心を鬱す。

舉手謝東海。虛行歸故林。手を舉げて東海に謝し、虚行、故林に歸る。

【字解】(一) 吳趨曲 古今註に「吳趨曲は、吳人以て其地を歌ふなり」とあり、陸機詩に四坐鼓清聽、聽我歌吳趨とある。劉良の註に「趨は歩なり。この曲、吳人その土風を歌ふなり」とある。吳趨は、即ち吳地の手ぶりといふこと。(二) 姑蘇 漢書伍被傳に「子胥、吳王を諫む。吳王用ひず、乃ち曰く、臣、今麋鹿の姑蘇の臺に遊ぶを見む」とある。(三) 觀濤 枚乘の七發に「將に八月の望を以て、諸侯遠方交遊兄弟と、竝に往いて、濤を廣陵の曲江に觀むとす」とある。(四) 釣鼈 前に見ゆ。

【題義】唐書百官志に「弘文館に校書郎二人あり、集賢殿書院に校書四人あり、秘書省に校書郎十人あり、著作局に校書郎二人あり、崇文館に校書郎二人あり、司經局に校書四人あり、皆九品」とある。この詩は、校書郎薛某に贈つたのであるが、唯だ校書とあるだけでは、どこの省の校書郎か分らぬ。

【詩意】われに吳趨曲があるが、その音を知つて居る人は無い。むかし、吳王夫差が榮華を誇つた姑蘇臺も、その國亡びし後は、唯だ草が繁つて居るばかりで、そこへ遊びに来る麋鹿は、悲しげな聲を出して啼いて居るので、徒に懷古の想を起さしめる。廣陵の潮は、天下の壯觀であると聞いて居るが、まだ之を觀ざる故、誇るに足るべき觀濤の作ともなく、六鼈を釣り上げやうといふやうな、壯心をも空しく鬱屈せしめる。そこで、手を舉げて東海に挨拶し、虚空を歩いて、これから、しばらく故山へ歸らうと思ふので、暇乞の代りに、この詩を君に呈するのである。

贈何七判官昌浩

何七判官昌浩に贈る

有時忽惆悵。匡坐至夜分。時あつて忽ち惆悵、匡坐、夜分に至る。

平明空嘯咤。思欲解世紛。平明空しく嘯咤、世紛を解かむと欲するを思ふ。

心隨長風去。吹散萬里雲。心は長風に隨つて去り、吹き散す萬里の雲。

羞作濟南生。九十誦古文。羞づ濟南生となり、九十、古文を誦するを。

不然拂劍起。沙漠收奇勳。然らざれば、劍を拂うて起ち、沙漠に奇勳を收めむ。

老死阡陌間。何因揚清芬。
 阡陌の間に老死すれば、何に因つてか、清芬を揚げむ。
 夫子今管樂。英才冠三軍。
 夫子、今の管樂、英才、三軍に冠たり。
 終與同出處。豈將沮溺羣。
 終に與に出處を同じくす、豈に沮溺と羣せむや。

【字解】(一) 匡坐 正坐に同じ。(二) 夜分 分は半、夜半に同じ。(三) 天明 夜明け。(四) 濟南生 漢書に「伏生は、濟南の人なり、故秦の博士たり。孝文の時、能く尚書を治むるものを求む、天下有るなし。伏生が之を治むるを聞きて、召さむと欲す。伏生、年九十餘、老いて行く能はず。ここに於て、太常使掌故臧繡に詔し、往いて之を受けしむ」とある。(五) 清芬 美名、前に見ゆ。(六) 管樂 管仲と樂毅。(七) 沮溺 長沮・桀溺の二人、耦耕し、孔子、子路をして津を問はしめ、因つて、慨然として「鳥獸は與に羣を同じくすべからず、吾、斯人と與にするに非ずして、誰と與にかせむ」といひしこと、論語に見ゆ。

【題義】この詩は、自己の抱負を述べて、何昌浩といふ人に贈り、君も定めて同志の人であらうから、今後、出處を同じうして、互に提携しやうでは無いかといふ意を述べたのである。何七の七は排行、判官は官名、昌浩は其本名である。

【詩意】われは、時として、忽然物足らぬやうな、詰まらないやうな氣がして堪まらず、正坐して思に沈み、夜半に及ぶことがある。かくて、夜明けになると、浩然として長嘯し、一肌ぬいで世事紛紜の難局を解決し、天晴の功名を立てむと思ひ、心は萬里の雲を吹き散らすところの長風に随つて、はるかに天外に飛び行くやうな想がするが、遺憾ながら、不幸にして、然るべき時機に際會しない。かの濟南の伏生の如く、區區として一經を攻め、年九十に成つても、古文を背誦するといふやうなことは、わが爲すを屑しとせぬところで、それよりも、劍を拂つて起ち、遠く塞外に従軍し、沙漠の邊に於て、奇勳を收め、一擧して封侯を得たいと思つて居る。兎に角、尋常阡陌の間に老死するのは、平凡人の事で、そんなことでは、芳しき美名を百世の後に傳へることは出来ない。貴下は、今の世の管仲・樂毅とも稱すべく、英才は三軍に冠たるものであるが、願はくは、君と出處進退を同じうしたいので、かの長沮・桀溺の如き隱逸者流と羣することは、到底爲したくはないことである。

讀諸葛武侯傳書懷贈長安崔少府叔封昆季

諸葛武侯傳を讀み、懷を書して長安の崔少府叔封昆季に贈る

漢道昔云季。羣雄方戰爭。
 漢道、むかし云に季、羣雄方に戰爭。
 霸圖各未立。割據資豪英。
 霸圖各未だ立たず、割據、豪英に資す。
 赤伏起頽運。臥龍得孔明。
 赤伏、頽運を起し、臥龍、孔明を得たり。
 當其南陽時。隴畝躬自耕。
 その南陽の時に當つて、隴畝、躬自ら耕す。
 魚水三顧合。風雲四海生。
 魚水、三顧して合し、風雲、四海に生ず。

武侯立岷蜀。壯志吞咸京。
 何人先見許。但有崔州平。
 余亦草間人。頗懷拯物情。
 晚途值子玉。華髮同衰榮。
 託意在經濟。結交爲弟兄。
 母令管與鮑。千載獨知名。

武侯、岷蜀に立ち、壯志、咸京を呑む。
 何人を先づ許さる、但だ崔州平あるのみ。
 余も亦た草間の人、頗る懐く物を拯ぶの情。
 晩途、子玉に値ひ、華髮、衰榮を同じうす。
 意を託するは經濟に在り、交を結んで、弟兄となる。
 管と鮑とをして、千載ひとり名を知らしむる母かれ。

【字解】(一)季。末に同じ。(二)赤伏。後漢書に「光武、先に長安に在りし時、同舍生張華、關中より赤伏符を奉じて曰く、劉秀、兵を發して不道を捕へ、四夷雲集、龍、野に闢ふ、四七の際、火を主となす」とある。劉秀は光武の姓名で、この赤伏符の豫言は、やがて的中した。(三)臥龍、南陽、魚水。蜀志に「諸葛亮、字は孔明、瑯琊陽都の人なり。躬づから、龍に耕し、好んで梁父吟を爲す。身の長八尺。毎に自ら管仲樂毅に比す。時人、これを許すなきなり、惟だ博陵の崔州平、潁川の徐元直、亮と友とし善し、謂うて信に然りと爲す。時に、先主、新豐に屯す。徐庶、先主に謂つて曰く、諸葛孔明は臥龍なり、將軍堂に之を見むことを願ふか。先主曰く、君、與に俱に來れ。庶曰く、この人、就いて見るべし、屈し致すべからざるなり。將軍宜しく駕を枉げて之を顧るべしと。これに因つて、先主遂に亮に詣り、凡そ三たび往いて、乃ち見る。先主、ここに於て亮と情好日に密なり。關羽・張飛等悦ばず。先主、これを解して曰く、孤の孔明あるは、猶ほ魚の水あるがごときなり。願はくは、諸君復た言ふ勿れと。羽、飛乃ち止む」とある。(四)岷蜀。岷は岷江、蜀の中央を流れてゐる。(五)咸京。長安、漢の舊都。(六)子玉。後漢書に「崔瑗、字は子玉、早くして孤、銳志學を好み、盡く其父の業を得へ、扶風の馬融、南陽の張衡と特に相友とし好し」とある、少府と同姓なるが故に借用す。(七)華髮。白髮に同じ。(八)管與鮑。史記に「管仲、少時、かつて鮑叔牙と遊ぶ。鮑叔、その賢を知る。管仲貧困、かつて鮑叔を欺く。鮑叔、終に善く之を遇し、以て管と爲さず。すでにして、鮑叔は、齊の公子小白に事へ、管仲は公子糾に事ふ。小白が立つて桓公となるに及び、公子糾死し、管仲囚へらる。鮑叔、遂に管仲を進め、身を以て之に下るとある。

【題義】諸葛武侯傳とは、別に一部の書あるのではなく、陳壽の三國志の中の本傳を指したのであらう。長安は縣名で、唐書地理志に「京兆府に長安縣あり」とある。無論、長安の都の近傍である。昆季は兄弟。これは、李白が諸葛亮の傳を讀みたるに因り、その感懷を寫して、當時長安縣の縣令たりし崔叔封の兄弟に寄せたのである。

【詩意】むかし、漢道方に衰へ、その運も次第に末に成つて來た時、羣雄は戰爭を事として居たが、各、霸圖を立てむとして、まだ思ふ様に行かず、諸方に割據して、専ら豪英の士に依つて、その勢を張つて居た。この時、劉備は、赤伏符の祥を以て帝業を創めし後漢と同宗である處から、頽運を挽回せむとし、臥龍の稱ある諸葛孔明を得て、専ら之を謀主として居た。その孔明が南陽に引籠つて居た頃は、龍臥の間に躬耕して居たのであるが、劉備は、三たび之を草廬に顧みて、魚水の遇合を爲し、四海の風雲は、これより其模様を改めるやうに成つた。かくて、孔明は、岷江沿岸の地たる巴蜀一帯を平定して、始めて、帝基を定め、やがて、漢の舊都たる長安を克復せむとする壯志を懷いて居た。孔明は、かかる大人物であるが、その初は、誰も其才を許すものなく、唯だ崔州平のみが之を知つて

贈 讀諸葛武侯傳書懷贈長安崔少府叔封昆季

居た。われ李白は、草莽の處士で、羣物を救済せむとする志望を懐いて居るに拘はらず、兎角不遇で、世に容れられなかつたが、晩年、はじめて崔子玉一輩の少府兄弟と相知り、白髪頭になるまでも、榮枯盛衰を同じうせむと誓ひ、ともに意を國家の經濟に託し、互に相提携せむとする處から、交を結んで、弟兄同様に極めて親密に成つた。かくなる上は、互に助け合つて推薦し、古しへの管仲・鮑叔をして、千載の下、ひとり、其名を知らしむることなく、彼等にも勝りたる深交を全うしたいものである。

贈郭將軍

郭將軍に贈る

將軍少年出武威

將軍、少年、武威を出で、

入掌銀臺護紫微

入つて銀臺を掌つて、紫微を護す。

平明拂劍朝天去

平明、劍を拂うて、天に朝して去り、

薄暮垂鞭醉酒歸

薄暮、鞭を垂れて、酒に酔うて歸る。

愛子臨風吹玉笛

愛子、風に臨んで玉笛を吹き、

美人向月舞羅衣

美人、月に向つて羅衣を舞はしむ。

【字解】(一) 武威 唐時、涼州、亦た之を武威郡といひ、隴右道に隸して居た。(二) 銀臺 大明宮園に、紫宸殿側に右銀臺門、左銀臺門がある。(三) 紫微 天子居るところ、天に紫微宮あるが故に、之に象る。

【一】 管仲、管仲と諸葛亮。【二】 閉關日。【三】 春暉 春の日。

嘯昔雄豪如夢裏

嘯昔、雄豪、夢裏の如し、

相逢且欲醉春暉

相逢ふ、且つ春暉に酔はむと欲す。

【題義】これは、郭將軍に贈つたのであるが、將軍の名字閱歴等は、一切分らない。

【詩意】將軍は、少年の時、武威より來つて朝に出仕し、やがて、銀臺門を掌つて、紫微を護衛することになつた。かくて、夜あけの頃、劍を拂うて、宮闕に入朝し、夕ぐれになると、鞭を垂れ、酒に酔ひ、しづかに馬を歩ませて歸つて來る。それから、家に著くと、愛子は、風に臨んで玉笛を吹き、美人は羅衣を着けて月下に舞ひ、一家團樂して、歌舞の興を恣にして居る。將軍も、むかしは、雄豪を以て一世に傲つて居たが、それは、最早夢と消え、今では、閑職に居て、相變らず御奉公を致して居れる。そこで、いつか相逢うて、照照たる春の日影の中に、一處に酒を飲んで酣醉したいものである。

【餘論】この詩の如きは、極めて平淺で、格別の妙味もない。一本には、終の二句を今日相逢俱失路、何年霸上弄春暉に作つてある。

駕去溫泉宮後贈楊山人

駕、溫泉宮を去つて後、楊山人に贈る

少年落魄楚漢間

少年落魄す、楚漢の間、

贈 贈郭將軍、駕去溫泉宮後贈楊山人

【字解】(一) 落魄 落拓に同じ、不遇、世に用ひられずして零落する。

(二) 管葛 管仲と諸葛亮。(三) 閉關

風塵蕭瑟多苦顏。

風塵蕭瑟、苦顏多し。

自言管葛竟誰許。

自ら言ふ、管葛竟に誰にか許す。

長吁莫錯還閉關。

長吁、錯るなく、還た關を閉づ。

一朝君王垂拂拭。

一朝、君王、拂拭を垂る。

剖心輸丹雪胸臆。

心を剖き、丹を輸して、胸臆を雪ぐ。

忽蒙白日廻景光。

忽ち白日の景光を廻らすを蒙り、

直上青雲生羽翼。

直に青雲に上つて羽翼を生ず。

幸陪鸞車出鴻都。

幸に鸞車に陪して、鴻都を出で、

身騎飛龍天馬駒。

身は騎す飛龍天馬の駒。

王公大人借顏色。

王公大人、顔色を借し、

金章紫綬來相趨。

金章紫綬、來つて相趨る。

當時結交何紛紛。

當時、交を結ぶ何ぞ紛紛。

片言道合唯有君。

片言道合す、唯だ君あるのみ。

待吾盡節報明主。

待て吾が節を盡して明主に報じ、

然後相攜臥白雲。

然る後、相攜へて白雲に臥するを。

門を鎖す。【三】拂拭、刀を拂ひ拭ふこと。【五】剖心輸丹、赤心を致す。

【六】鴻都、門の名。【七】天馬駒、

翰林志に「唐制、學士、はじめて院

に入れば、中庭の馬一匹を賜ひ、こ

れを長借馬といふ」とあり。漁隱叢

話に「唐の學士、例として飛龍殿の

馬を借る」とある。【八】金章紫綬、

銅印と紫の綬。

【題義】溫泉宮は、即ち驪山の華清宮で、唐書に云ふ「京兆府昭應縣に宮あり、驪山の下に在り、貞

觀十八年、置き、咸亨二年、はじめて溫泉宮と名づけ、天寶六載、更めて華清宮といひ、湯井を治め

て池となし、山を環つて宮室を治め、又羅城を築いて百司及び十宅を置く」とあつて、玄宗は、數ば

其地に行幸せられた。楊山人は、名字不詳、どういふ人か分らないが、驪山の近傍に隠れて居た者で

でもあらう。李白は、玄宗に召し出され、翰林に供奉することとなつたから、驪山の行幸に陪從した

ので、やがて、車駕、溫泉宮を去りし後、この詩を賦して、山人に贈つたのである。

【詩意】われは、少年の頃、古しへの廳食其が楚漢争鬪の間に落魄して居たと同じく、兎角不遇で、

落ちぶれて居たから、蕭瑟たる風塵の底に燻つて、苦み惱んだ顔をして居た。自分では、管仲諸葛亮

に比すべき才幹があると思つて居るが、誰も、さう認めて呉れなかつたから、嘆息を禁じ得ず、やが

て時を過たず、幽居に歸り、門を閉ぢて、高臥して居た。然る處、天運循環して、たとへば、長く

匣底に藏つて置いた劍を拂拭すると同じく、天子から特に拜謁を仰せ出されたので、赤心を披いて、

胸臆に蓄へてある事どもを残らず開陳すると、いたく御意に協つて、白日の景光を廻すが如く、取り

敢へず翰林に供奉することとなり、直に羽翼を生じて、青雲に飛び上つた。かくて、車駕に隨從して、鴻都門を出で、温泉宮に御供することとなり、飛龍の厩に飼つてある名馬を拜借して之に跨り、しづしづと練り出した。すると、王公大人といはれる者どもも、顔を和らげて、下にも置かず、鄭重に取り扱つて呉れるし、印綬を佩びたる貴顯の人人も、御機嫌伺ひとして、走つて此方へ遣つて来る。その時、交を結んだものは、紛紛として頗る多かつたが、一寸ばかり話をして、各主持するところの道が相合したのは、唯だ楊山人だけであつて、道義の交を結ぶに足るものである。されば、吾が忠節を盡し、一かどの功業を立てて、天子の知遇に報いし後は、仕を辭して世外の閒人となり、君と相攜へて白雲に起臥する積りであるから、どうか氣長に待つて居て貰ひたい。

温泉侍從歸逢故人

温泉に侍從し歸つて故人に逢ふ

漢帝長楊苑。誇胡羽獵歸。

漢帝の長楊苑。胡に誇つて羽獵して歸る。

子雲叨侍從。獻賦有光輝。

子雲、叨りに侍從、賦を獻じて光輝あり。

激賞搖天筆。承恩賜御衣。

激賞、天筆を搖かし、恩を承けて御衣を賜ふ。

逢君奏明主。他日共翻飛。

君に逢うて明主に奏し、他日共に翻飛せむ。

【字解】(一) 長楊苑 揚雄の長楊賦の序に「上、將に大に胡人に誇るに、禽獸多きを以てせむとし、右扶風に命じ、民を發して南山に入り、西は褒斜より、東は弘農に至り、南は漢中を驅り、羅網置架を張り、豪猪・虎豹・豺獾・狐兔・麋鹿を捕へ、載するに控車を以てし、長楊射熊館に輸し、網を以て周賦となし、禽獸を其中に縱ち、胡人をして、手もて之を搏ち、親ら其獲を取らしめ、上、親ら臨み觀る。この時、農民收斂するを得ず。雄、從つて射熊館に至り、還つて長楊賦を上る」とある。

【題義】 雍錄に「漢世の侍從と謂ふは、その職掌、君に近づくを以てなり。行幸には隨從し、在宮には陪侍し、故に總て凡最を撮して侍從を以て之に名づく」とある。これは、前首と同時の作で、李白が翰林供奉として、温泉宮の行幸に陪從して、やがて歸京せしとき、舊知の人に逢つたから、賦して示したのである。

【詩意】 むかし、漢の成帝は、胡人に誇るに、禽獸の多きを以てせむとし、仍つて、長楊苑に於て、羽獵を催され、その時、揚子雲は、辱くも、その行に陪從し、歸後、長楊の賦を獻じて、大に面目を施したといふことで、この度、自分が温泉宮の行幸に侍從したのも、丁度さういふ風であつて、その事柄が、極めて善く似て居る。かくて、侍從中、數ば詩賦を獻じた處が、毎每天子の歡感に預り、態態御筆を以て其旨を注記せられ、やがて、恩賞を蒙つて、御衣を頂戴し、そして、今やつと都へ歸つた處である。かくて、君に逢つた上は、君の事も天子に奏上し、然るべき地位を賜はる様に、一肌ぬいで大に斡旋し、他日ともに青雲の上に翻飛するやうに致さうと思つて居る。

贈裴十四

裴十四に贈る

朝見裴叔則朗如行玉山。

朝に裴叔則を見る、朗として玉山を行くが如し。

黃河落天走東海。

黃河、天より落ちて、東海に走る。

萬里寫入胸懷間。

萬里寫いで入る胸懷の間。

身騎白龍不敢度。

身は白龍に騎して、敢て度らず、

金高南山買君願。

金は南山より高く、君の願るを買ふ。

徘徊六合無相知。

六合に徘徊して、相知なし、

飄若浮雲且西去。

飄として、浮雲の且く西に去るが若し。

【字解】裴叔則、世説に「裴令公、簡容儀あり、冠冕ハ脱し、粗服亂頭、皆好し。時人、以て玉人と爲す。見るもの曰く、裴叔則を見れば、玉山の上を行くが如く、光、人を映照す」とある。これは、裴楷、字は叔則といふ人である。【三】寫、寫に同じ。【四】寫、寫に同じ。

【題義】この詩は、裴十四に贈つたのであるが、その人の名字閱歷等は、一切分らぬ。

【詩意】むかし、裴叔則といふ人があつたが、朝に其人に對すれば、玉山の上を行くやうで、何處となく、朗かな光が人を照らすと稱せられて居た。今、裴十四といふ人は、極めて豪放磊落の人で、われ

と自然冥契するところあるが故に、これを見るとき、矢張、かの裴叔則に於ける如く、わが心を朗照するを覺える。君の豪放磊落なることは、黃河が天より落ちるやうな勢で、萬里の長きに亘つて、東海に走るのを、おのが胸懷の間に注ぎ入れるやうに思はれる。君は、白龍に跨つて、何處へ往かれるか、矢張、東海の方かと思へば、さうでもなく、しばらくすると、敢て進まれない。それは六合の間を今まで徘徊したが、一人も、己の心を知るものなく、何處へ往つたとて、仕方が無いと思ひ諦めたからである。しかし、君は、實に役に立つ人物であるから、地方の節度使などは、どうかして、幕中に引き入れたいといふので、南山よりも高く、黄金を積んで、頻りに招くが、一向、それには目も呉れず、飄として、浮雲の如く、これから、西の方へ往かうとして居る。それが、非常に我輩の氣に入つた處である。

【餘論】この詩の後半に於て、身騎の句は徘徊六合の句に、金高南山の句は飄若浮雲の句に接續して居る。これは、互文の法で、平板を避ける一手段である。吳昌祺は、これを評して「生龍活虎の如きあり、世人の駕馭すべきところに非ず、天、實に之を授く、豈に人力ならむや」といつて居る。

贈崔侍御

崔侍御に贈る

黃河三尺鯉本在孟津居。

黃河三尺の鯉、本と孟津の居に在り、

贈 贈裴十四・贈崔侍御

點額不成龍。歸來伴凡魚。額を點じて龍と成らず、歸り來つて、凡魚を伴ふ。

故人東海客。一見借吹噓。故人東海の客、一見して、吹噓を借る。

風濤濼相因。更欲凌崑墟。風濤、僅し相因らば、更に崑墟を凌がむと欲す。

【字解】【一】三尺鯉。水經注に「晉雅に云ふ、鯉は鮪なり、鯉穴を出でて、三月なれば、上龍門を度る、度るを得れば龍となる。否らざれば、額を點じて還る」とあり、白氏六帖に「大鯉魚、龍門に登り、化して龍となる、登らざるものは、額を點じ、鮪を暴す」とあり、太平廣記に「龍門山は、河東の界に在り、禹鑿の山、斷えて、門の如きこと、一里餘、黄河、中より流れ下り、兩岸、車馬を避ぜず、暮春の際ごとに、黄鯉魚あり、流に逆つて上り、上るを得るものは、便ち化して龍となる」とある。【二】孟津。水經注に「魏土地記に云ふ、梁山の北に龍門山あり、大禹鑿通するところの孟津河口、廣さ八十步、巖際の鑄跡、遺功尙ほ存す」とあり、尙書正義に「孟津、孟は是れ地名、津は是れ津處、孟地に在つて津を置く、これを孟津といふ」とある。【三】吹噓。吹き上げる、取り持つ、世話をする。【四】崑墟。山海經に「海内崑崙の墟は、西北帝の都、崑崙の墟に在り、方八百里、高さ萬仞とあり、初學記に「楚國先賢傳に、神龍、朝には崑崙の墟を發し、暮には孟諸に宿し、雲漢の表に超騰し、四瀆の裏に宛轉す」とある。

【題義】侍御は前に見えて居る。この詩は、侍御史崔某に贈つて、汲引の惠を垂れむことを懇囑したのである。

【詩意】三尺の鯉魚は、本と孟津に居り、やがて、龍門を上つて、黄河を溯らうとしたが、不幸にして、上られなかつた故に、龍に化せず、むなしく、額を點じて歸り來り、止むを得ず、凡魚を伴うて、元の處に住んで居る。われは、丁度この鯉の如く、折角の才學あれども、青雲の上に身を致すこと

と能はず、蓬蒿の下に引込んで大に困まつて居る。崔侍御は、東海の人で、わが舊知であるが、どうか、一見して力を添へ、一つ取り持つて貰ひたい。かくて風濤の勢を以て助けて呉れたならば、遠く黄河の源流にまで溯り、彼の仙境たる崑崙の墟をも凌ぎたいと思つて居る。唯だ、この龍門が升沈生死の分れ目であつて、偏に君の御助力を望む次第である。

【餘論】繆本には、結末に、何當赤車使、再往召相如の二句があるが、これは、無い方が善いやうである。

述德兼陳情上哥舒大夫

德を述べ兼ねて情を陳じ、哥舒大夫に上る

天爲國家孕英才。天は、國家の爲に英才を孕み、

森森矛戟擁靈臺。森森矛戟、靈臺を擁す。

浩蕩深謀噴江海。浩蕩深謀、江海を噴き、

縱橫逸氣走風雷。縱橫逸氣、風雷を走らす。

丈夫立身有如此。丈夫身を立つる、此の如きあり、

贈 述德兼陳情上哥舒大夫

【字解】【一】森森矛戟。晉書に「要橋、かつて飯會を目し、武庫の森森たるを觀るが如く、但だ矛戟の前に在るを見るのみ」とある。【二】靈臺。心を指す。【三】披靡。ひらき靡く。【四】碧青。漢書の本傳に「天子使者をして、大將軍の印を持し、軍中に即いて、車騎將軍に拜せしむ。青、大將軍となり、諸將、皆兵を以て大將軍に屬す」とある。【五】白起。史記の本傳に「白起は鄢人なり、善く

一呼三軍皆披靡。一呼すれば、三軍皆披靡す。

衛青謾作大將軍。衛青、謾に大將軍となる、

白起眞成一豎子。白起は眞成、一豎子のみ。

兵を用ふ、秦の昭王に事ふ」とあり、平原君傳に「毛遂曰く、白起は小豎子のみ、數萬の衆を率ぬ、師を興し、以て楚と戦ひ、一戦して郢都を擧げ、再戰して夷陵を燒き、三戰して王の先人を辱かしむ」とある。

【題義】哥舒大夫は、即ち哥舒翰で、唐書の本傳に「哥舒翰、その先は、蓋し突騎施酋長哥舒部の裔。能く左氏春秋漢書を讀み、大義に通じ、財を疏んじ、施子多し、故に、士、心を歸す。大斗軍副使となり、左衛郎將に遷る。吐蕃、邊に盜し、翰と苦拔海に遇ふ。吐蕃、その軍を枝つて三となし、行いて山差地より下る。翰、半段槍を持して迎へ撃ち、向ふところ、輒ち披靡す。名、軍中を蓋ふ。擢んで右武衛將軍、副隴右節度を授けられ、河源軍使となる。翰、かつて虜を逐ひ、馬、驚いて河に陥る。吐蕃の三將、翰を刺さむと欲す。翰大呼す。皆矛を擁して、敢て動かす。救兵至り、追うて之を殺す。鴻臚卿に拜せられ、隴右節度副大使となり、年を踰えて、神威軍を青海の上に築く。吐蕃、攻めて之を破るや、更に龍駒島に築く。翰、その川原の畜牧に宜しきを相し、罪人二千を誦して之を戍らしむ。これに由つて、吐蕃、敢て青海に近づかず。天寶八載、翰に詔し、朔方河東羣牧の兵十萬を以て、吐蕃の石堡城を攻めしむ、數日克たす。その將高秀巖・張守瑜を擯して、將に之を斬らむとす。秀巖、三日の期を請ひ、期の如くして下す。遂に赤嶺を以て西塞となし、屯田を開き、軍實を備ふ。特進を

加へられ、賜賚彌よ渥し。十一載、開府儀同三司を加へ、これに久しうして、涼國公に封せられ、河西節度使を兼ね、西平郡王に進封す」とある。大夫は、胡三省の通鑑註に「唐の中世以前、率ね將帥を呼んで大夫となす、白居易の詩に謂はゆる武官稱大夫とは、是れなり」とある。この詩は、哥舒翰に贈り、先づ其功德を頌し、次に自己の情を陳べて、矢張汲引を依頼したものである。哥舒翰は、後に安祿山の兵を潼關に防いで敗れ、遂に賊に降つたので、その晩年には、すつかり味噌を付けて仕舞つたが、その初吐蕃、即ち西藏を征服した頃の威望は、大したものので、絶代の名將と稱せられ、李白のみならず、杜甫も之に詩を贈り、高適も、亦たその幕中に居たのである。

【詩意】天は國家を救済せむが爲に、絶代の英才を孕み、ここに哥舒大夫は、この世に出現したので、その胸中には、矛戟が森森として貯へられて居る。その深謀は、浩蕩として、江海を噴き出し、逸氣は縦横にして、風雷を走らすばかり。大夫一たび仕官し、やがて立身して此の如きに至つたのも、尤も至極な事で、大夫が陣に臨んで一呼すれば、三軍盡く披靡する位、かくてこそ、西吐蕃を服し、大に國威を振つたのである。むかし、衛青は、格別の才能もないのに、浪りに大將軍の重職に登り、白起は、頻りに楚を破つたが、もと一箇の小豎子に過ぎない。哥舒大夫は、もとより、この二人の比ではなく、まことに、天晴な武將である。

【餘論】劉世教は「按ずるに、この詩、述徳は之あり、しかも、陳情の詞なし。疑ふらくは、闕文あり

らむ。胡震亨以爲へらく、大帥に上る、只だこの數言、亦たただ潦草、杜の長律、體を得たりとなすに如かずと。非なり」といつたが、なる程と頷かれるので、どうも、これだけでは、意味がまとまつて居らぬ。

雪讒詩贈友人

讒を雪ぐの詩、友人に贈る

嗟予沈迷、猖獗已久。
五十知非、古人常有。
立言補過、庶存不朽。
包荒匿瑕、蓄此煩醜。
月出致譏、貽愧皓首。
感悟遂晚、事往日遷。
白璧何辜、青蠅屢前。
羣輕折軸、下沈黃泉。

嗟す、予が沈迷、猖獗すでに久し。
五十、非を知る、古人常に有り。
言を立て、過を補ひ、庶はくは不朽に存せむ。
荒を包み、瑕を匿し、この煩醜を蓄ふ。
月出、譏を致し、愧を皓首に貽す。
感悟遂に晩く、事往いて、日遷る。
白璧何の辜か、青蠅屢は前む。
羣輕、軸を折き、下、黄泉に沈む。

衆毛飛骨、上凌青天。
萋斐暗成、貝錦粲然。
泥沙聚埃、珠玉不鮮。
洪猷爍山、發自纖煙。
滄波蕩日、起于微涓。
交亂四國、播于八埏。
拾塵掇蜂、疑聖猜賢。
哀哉悲夫、誰察予之貞堅。
彼人之猖狂、不如鵠之彊彊。
彼婦人之淫昏、不如鶉之奔奔。
坦蕩君子、無悅簧言。
擢髮續罪、罪乃孔多。
傾海流惡、惡無以過。

衆毛、骨を飛ばし、上、青天を凌ぐ。
萋斐、暗に成り、貝錦粲然たり。
泥沙、埃を聚め、珠玉鮮ならず。
洪猷の山を爍くは、纖煙より發す。
滄波の日を蕩するは、微涓より起る。
交も四國を亂して、八埏に播く。
塵を拾ひ、蜂を掇ひ、聖を疑ひ、賢を猜む。
哀しいかな、悲しいかな、誰か予の貞堅を察せむ。
彼の人の猖狂は、鵠の彊彊たるに如かず。
彼の婦人の淫昏は、鶉の奔奔たるに如かず。
坦蕩たる君子は、簧言を悦ぶなかれ。
髮を擢いて罪を續ふも、罪は乃ち孔だ多し。
海を傾けて惡を流す、惡以て過ぐるはなし。

人生實難。逢此織羅。積毀銷金。沈憂作歌。天未喪文。其如予何。姐已滅紂。褒女惑周。天維蕩覆。職此之由。漢祖呂氏。食其在傍。秦皇太后。毒亦淫荒。蟪蝼作昏。終掩太陽。萬乘尙爾。匹夫何傷。辭殫意窮。心切理直。如或談妄。昊天是殛。子野善聽。離婁至明。神靡遁響。鬼無逃形。

人生實に難し、この織羅に逢ふ。積毀、金を銷し、沈憂、歌を作る。天、未だ文を喪はさず、其れ予を如何。姐己は紂を滅し、褒女は周を惑はしむ。天維蕩覆、職として此に之れ由る。漢祖呂氏、食其傍に在り。秦皇の太后、毒、亦た淫荒。蟪蝼、昏を作り、遂に太陽を掩ふ。萬乘、尙ほ爾り、匹夫何ぞ傷まむ。辭殫くし、意窮まり、心切に理直。或は談妄の如く、昊天是れ殛す。子野は善く聽き、離婁は至明。神に遁響なく、鬼に逃形なし。

不我遐棄。庶昭忠誠。

我を遐棄せず、庶はくは忠誠を昭かにせむ。

【字解】【一】沈迷。羅。邛運の陳伯之に與ふる書に「沈迷羅、以て此に至る」とあるに本づく、つまりぬことに迷ひ、勝手に暴れ廻る。【二】五十知非。淮南子に「蘧伯玉、年五十にして、四十九年の非を知る」とある。【三】立言。左傳に「太上は徳を立つるあり、その次は功を立つるあり、その次は言を立つるあり、久しと雖も廢せず、此を之れ不朽といふ」とある。【四】補過。左傳に「能く過を補ふものは君子なり」とある。【五】包荒。易に包荒用三過河とあつて、王朝の註に「能く荒穢を包含し、過河を受納するものなり」とある。【六】匪。左傳に「瑣瑣、如くなる美玉でも、或は瑕を藏して持つて居るといふ意。【七】月出。詩經の篇名、毛萋の詩傳に「月出は、好色を刺るなり、位に在つて徳を好まずして、美色を悦ぶ」とある。【八】皓首。白髮頭。【九】青蠅。埤雅に「青蠅の糞、尤も能く物を敗る、玉と雖も、猶ほ免れず」とある。【一〇】翠。折軸。衆毛飛骨。漢書に「翠、折軸、羽翮、飛肉」とあつて、顏師古の註に「輕物を積載し、物多く、車軸をして毀折せしむ。而して、鳥の能く飛翔する所以は、羽翮、折軸の故を以てなり」とある。【一一】妻妾暗成。貝錦。樂然。詩の小雅に「妻妾成、成は貝錦、彼謂人者、亦已太甚とあつて、毛傳に「妻妾は、文章相錯るなり、貝錦は、錦文なり」といひ、説人が巧に言を構へ、恰も女工が采色を集めて、錦文を成すが如くするといふ意。【一二】微。涓。小流。【一三】交。亂。四。國。詩の小雅の句。【一四】八。變。八方。【一五】拾。塵。呂氏春秋に「孔子、陳蔡の間に窮し、七日かつて粒せず。藜藿。藜同、米を索め得て、之を饘し、幾んど熟す。孔子、同が其藜中を攪んで、之を飯するを望み見る。少頃あつて熟し、孔子に謂して食を進む。孔子起つて曰く、今夢に先君を見る、藜を食ふ、故に饘れ。同曰く、不可なり、さきに、始れ飛んで藜中に入る、食を棄つるは不祥なり、同、攪んで之を飯す。孔子曰く、信するところの者は目、目猶ほ信すべからず。恃むところの者は心、心猶ほ恃むべからず」とある。【一六】撥。蜂。琴操に「尹吉甫は周の上卿なり、子伯奇あり、伯奇の母死す、更に後妻を娶る。伯奇を吉甫に隨して曰く、妾の美色あるを見て、然かく欲心ありと。乃ち毒蜂を取つて、衣領に縋らしむ。伯奇前んで之を持つ。ここに於て、吉甫、大に怒り、伯奇を野に放つ。宜王出遊、伯奇の歌に感ず。吉甫、乃ち伯奇を収めて、後妻を射殺す」とある。以上二つの故事は、

陸機の詩にも用ひられ、擬、蜂感、天道、拾、塵、三、孔、顧、とある。【一七】鶴之張、鶴之奔、詩の國風に見え、鄭箋に「奔奔張張は、その居に常匹あつて、飛べば相隨ふの貌をいふ」とある。【一八】坦蕩、宜廣の貌。【一九】黃言、巧に言語を爲し、虛辭を結構し、遠に相符合すること、笙中の簧、聲相應和するが如きなをいふ。【二〇】擗髮、擗、史記に「須賈曰く、賈の髮を擗き、以て賈の罪を擗ふも、尙ほ未だ足らずとある。擗は賊に通ず。【二一】孔多、甚だ多し。【二二】織羅、羅織に同じ、張ひて彈狀を構成すること。【二三】積毀銷金、漢書に「衆口鑠金、積毀銷骨」とあるに本づく。【二四】沈憂、深い憂。【二五】天未喪文、其如子何、論語に「天の未だ斯文を喪ぼさざる、匡人其れ子な如何」とあるに本づく。【二六】姐己滅封、史記の殷本紀に「封、酒を好んで、淫樂、婦人を嬖し、姐己を愛し、姐己の言、是れ從ふ。周の武王、諸侯を率ゐて封を伐つ。封の兵敗走す、入つて、夷蕘に登り、その寶玉の衣を衣、火に赴いて死す。周の武王、遂に封の頭を斬り、之を白旗に懸け、姐己を殺す」とある。【二七】褒姒、周本紀に「幽王、褒姒を嬖受す。褒姒、子伯服を生む。幽王、竟に申后及び太子を廢し、褒姒を以て后となし、伯服を太子となす。褒姒、笑を好まず。幽王、その笑を欲し、萬方すれども、故らに笑はず。幽王、烽火大鼓を作り、寇の至るあれば、烽火を擧ぐ。諸侯悉く至る、しかも、寇なし、褒姒、乃ち大に笑ふ。幽王、これを悦び、爲に數ば烽火を擧ぐ、その後、信ぜず、諸侯亦た至らず。申后、繒を西夷大裘に與へて、幽王を攻む。幽王、烽火を擧げて兵を徵す、兵至るなし。遂に幽王を驪山の下に殺し、褒姒を虜にし、盡く周の賂を取つて去る」とある。【二八】天維、維は綱。【二九】職此之由、職は主としての義。【三〇】漢祖呂氏、食其左傍、史記の呂后紀に「呂太后、制を稱す、辟陽侯審食其を以て左丞相となし、事を治めず、宮中を監せしむること、郎中令の如し。食其、故に太后に幸せらるるを得、常に事を用ふ、公卿皆因つて事を決す」とある。【三一】秦皇太后、毒亦淫荒、說苑に「秦の始皇帝の太后、譴ます、郎嫪毐を幸し、封じて以て長信侯となす。嫪毐、事を專にし、浸く益す驕り、侍中左右貴臣と俱に博して酒を飲み、酔うて爭言して鬪ふや、瞋目して大に叱して曰く、吾は乃ち皇帝の假父なり、寡人の子、何ぞ敢て乃ち我と亢すると。與に鬪ふところのもの、走り行いて皇帝に白す。皇帝大に怒る。毒、詐を懼れ、因つて、亂を作し、咸陽宮に戰ふ。毒敗る。始皇、乃ち毒の四肢を取つて、これを車裂し、その兩弟を取リ、殺して之を撲殺し、皇太后を取つて、これを襄陽宮に遷す」とある。【三二】鑿鑿、虹、孔穎達の禮記正義に「虹は是れ陰陽交會の

儀、純陰純陽なれば虹見えす。もし雲薄くして日を漏らし、日照らして雨滴れば虹生ず」とある。【三三】吳天、毛萇詩傳に「元氣廣大、すなはち昊天と稱す」とある。【三四】子野、師曠の字、善く音曲を曉る。【三五】離婁、古しへの明目の者。【三六】遐棄、遠ざけ棄てる。

【題義】この詩は、李白の平生疎放の行爲が累を爲して、人から色色悪く言はれたとき、賦して自ら解し、仍つて、友人に贈つたのである。

【詩意】ああ、予は、世の中の詰まらぬ事どもに迷つて、それに打ち込み、おもふが儘に暴ばれ廻つて、随分、不仕鱈な事をして、すでに久しく年を経た。しかし、五十にして四十九年の非を知るといふことは、古人も常に有るところで、予も亦た其通り、ここに、すつかり昨日の非を悟つて仕舞つた。かくて及ばずながら、言を立て、又過を補ひ、以て名を不朽に傳へむことを希うた次第で、すべて、荒穢を包含し、瑕疵を藏匿するといふことは、有り勝ちであつて、如何なる物でも、この見苦しき缺點を蓄へて居る。予は、好色の故を以て讒を致し、白髪頭に成つても、辱を貽したが、その非を悟つたことは、すでに遅く、その事は、すでに過ぎ去つて、年月は頻りに移つたので、それが、まことに残念である。しかし、白壁は、何の罪もなきに、青蠅は、屢ば飛び來つて、その上に糞をひりつけて、汚らしいものにして仕舞ふので、小人の讒をなすことは、大抵この様なもので、はては、白を變じて黒となさしめる。それから、如何に軽いものでも、澤山集まれば、その重量も増して、はては、

車軸を折いて、その車を黄泉の深きに沈めし、多くの毛が聚まつて羽となれば、骨を備へた鳥の體をして、青天を凌いで飛翔せしめるので、讒言も、度重なること、ひどい結果を生せしめる。その上、小人の讒言は、言葉が巧であつて、恰も文章相錯つて、貝錦の文を成すが如く、又泥沙が、聚まつて塵埃となると、珠玉が、其中に交つて居ても、はつきりと分らぬやうに成つて仕舞ふ。かくて、盛な火燄が山を焼くのも、もとは細い煙から起るのであるし、渺渺たる大海の波が日を搖盪するのも、小さい流の聚まつたものに外ならぬ譯である。讒言の結果として、最後には、交も四鄰の國に大騷亂を引き起さしめ、はては、八方に廣がるといふ位、顔回が飯を炊く時、ごみを拾つて口に入れたといふので、孔子の聖なるも、これを疑ひ、自分に匿して、つまみ食をしたかと思つたし、尹伯奇は、繼母の計略に乗せられ、その襟に止まつて居た毒蜂を打つた爲に、その父に疑はれたことがある。哀しいかな、悲しいかな、誰も子の節義を守つて心正しきことを察して呉れるものが無い。かの小人の猖狂なる、婦人の淫昏なる、ともに鶴の疆疆、鶉の奔奔として、常に其匹耦を伴うて、飛べば相隨ふといふには及ばないので、苟くも、物の分つたものは、小人や婦女の言ふことに耳を假すものはない。心寛厚なる君子は、簧の如き小人輩の巧言を喜んでではならぬ。かの讒言を事とする小人の罪たるや、實に非常なもので、その髪の毛を抜いて贖ふとも、その罪の多いことは、到底贖ひ切れないし、海水を傾けてその惡を洗ふとも、その惡は、此上もない位で、とても、洗ひ盡せない。かかる小人の羅織

するところとなつて、有りもせぬ罪を構成されては、どうにも、かうにも仕方がないので、人生、ここに至れば、どういふ風に處置したら善いか、實以て六つかしい。惡口も、積もり積れば、やがて、金をも熔かすべく、ここに、讒に遭ひ、深き憂に沈みつつ、乃ち此歌を作るのである。しかし、天の未だ斯文を喪はざるや、區區の小人、其れ子を如何にすべき。予は、すでに、天の使命を荷うて、この世に生まれて來たものであるから、かかる手合は、どうすることも出来ない筈である。むかし、妲己は紂を迷はし、その爲に、紂は淫虐を事としたから、遂に周の武王に滅ぼされて仕舞つたし、褒姒は、幽王を惑はし、幽王は、烽火を以て戲となし、後に申侯が犬戎を率ゐて攻め入つた時、烽火を擧げたが、諸侯の救兵至らず、やがて殺されて仕舞つたので、帝室の綱紀の敗れ覆へるのは、主として、かかる婦女子の所爲である。それから、漢の先祖の呂后が政を攝せし時は、審食其といふものが、その傍に居て嬖幸せられ、秦の始皇の母后には、嫪毐といふものが附いて居て、淫荒を事とした。かくて陰陽交會する處から、虹が出て、遂に太陽を掩ふと一般。かういふ婦女や小人に掛つては、萬乗の國と雖も、争亂や滅亡を免れないので、匹夫に於ては猶更の事、今さら之を傷むにも及ばぬ。わが胸臆を抒べ、賦して此に至れば、言葉も盡き、意も窮まり、心愈よ切にして、理愈よ直、萬一本當の事ではなく、勝手に作り事したり、自ら其非を飾るやうなことをしたならば、昊天が承知せず、やがて、手ひどき目に遇はせられるであらう。かの師曠は、耳が善くて、音聲を聞き分け、離婁は、極め

て目の善い人で、秋毫の末を百歩の外に察したといふ位、君とても、これに劣らぬ聰明の人であるから、必ず子の衷情を識別して呉れるであらう。まして、鬼神の前には、通響なく、透形なく、凡そ聲あり形あるものは、鬼神の耳目を遮ることは出来ぬもので、昭昭として、人間の事を察して居られるから、われを遠ざけ棄てず、庶はくは、一片の忠誠の情を照覽されたいものである。

【餘論】この詩は、雪讒を以て題にしてあるから、多分、楊貴妃や高力士の讒に因り、玄宗に疎んせられ、やがて放逐された、その時の作だらうと思はれる。但し、月出致讒といふからには、何か品行上の事に就いて讒せられたものらしい。必ずしも好色に限つた譯でもないが、その疎放狂簡に就いて言つたものであらう。さればこそ、婦女と小人との兩者を並舉して、言言極めて痛切であるので、断じて、その他の場合ではあるまいと思はれる。

贈參寥子

參寥子に贈る

白鶴飛天書。南荆訪高士。

白鶴、天書を飛ばし、南荆に高士を訪ふ。

五雲在峴山。果得參寥子。

五雲、峴山に在り、果して參寥子を得たり。

翫辭辭故國。昂藏入君門。

翫辭、故國を辭し、昂藏、君の門に入る。

天子分玉帛。百官接話言。

天子、玉帛を分ち、百官、話言に接す。

毫墨時灑落。探玄有奇作。

毫墨、時に灑落、玄を探つて、奇作あり。

著論窮天人。千春祕麟閣。

著論、天人を窮め、千春、麟閣に秘す。

長揖不受官。拂衣歸林巒。

長揖して、官を受けず、衣を拂うて、林巒に歸る。

余亦去金馬。藤蘿同所攀。

余も亦た金馬を去り、藤蘿、攀ぶるところを同じうす。

相思在何處。桂樹青雲端。

相思何の處にか在る、桂樹青雲の端。

【字解】【一】南荆、楚地を指す。【二】五雲、五色の雲。【三】峴山、前に見ゆ、襄陽に在る。【四】翫辭、高元仲直の賦。【五】昂藏、意氣軒昂の貌。【六】玉帛、幣物。【七】灑落、脫俗の貌。【八】窮天人、世説に「何平叔、老子を註して、初めて成る。王輔嗣に譲り、王註精奇なるを見、乃ち神服して曰く、斯人の若きは、與に天人の際を論ずべし」と。因つて、註するところを以て道徳二論となす」とある。【九】千春、千年に同じ。【一〇】麟閣、前に見ゆ。漢の蕭何が造つて、秘書を藏し、賢才を處らしめた。【一一】金馬、門の名、前に見ゆ。【一二】桂樹、招隱士の桂樹叢生兮山之阿とあるを暗用す。【一三】青雲、ここでは仙界の端。

【題義】王琦の解に「參寥子は、當時の逸士、その姓名、考ふるなし。蓋し、莊子の説を取り、以て號と爲せるなり。莊子に、玄冥、これを參寥に聞く、參寥、これを疑始に聞くとあり。崔云ふ、皆古人の姓名、或は之を寓するのみと。李云ふ、參は高なり、高遯寥曠名づくべからざるなり」とある。

【詩意】白鶴が天宮から賜はつた書を帯びて飛んで行くから、その跡を慕うて、楚地に高士を尋ねむ

とし、五雲たなびく峴山に至つて、參寥子といふ人に遇つた。われは、高亢倬直を以て世に容れられず、仍つて長安を出たので、ここに、意氣昂然として、君の門に入つたのである。君は、當世の大人物で、天子は、玉帛を幣物として、態態招致され、百官は、談話を交へ、頻りに優遇した。それから、筆を揮へば、字體灑落で、さすがに俗を離れて居るし、又道家の玄理を探つて、著述を試み、その議論も奇抜にして、天人の際を窮むべく、長しへに麟閣に藏せられて居る位。しかも、長揖して、官を受けず、衣を拂つて、林巒に歸臥されたとのことである。予も亦た金馬門に待詔して居たが、そこを去つて、江湖に放浪し、同じく藤蘿を攀ちて、世外に隱遁する積りなので、かの桂樹叢生する青雲の仙界を常に心に思つて居るのである。

【餘論】蕭士資は「李白の本傳に曰く、白、懸に山に歸るを求む、帝、金を賜うて放ち還すと。この詩を作るは、必ず此時ならむ」といつて居るが、極めて事理に協つて居る。

贈饒陽張司戶燧

饒陽の張司戶燧に贈る

朝飲蒼梧泉。夕棲碧海煙。

朝に蒼梧の泉を飲み、暮に碧海の煙に棲む。

寧知鸞鳳意。遠託椅桐前。

寧ろ知らや、鸞鳳の意、遠く椅桐の前に託するを。

慕蘭豈曩古。攀嵒是當年。

蘭を慕ふ、豈に曩古ならむや、嵒を攀づる、是れ當年。

愧非黃石老。安識子房賢。

愧づ黃石の老に非ず、安んぞ子房の賢を識らむ。

功業嗟落日。容華棄徂川。

功業、落日を嗟し、容華、徂川に棄つ。

一語已道意。三山期著鞭。

一語、すでに意を道ひ、三山、鞭を著くるを期す。

蹉跎人間世。寥落壺中天。

蹉跎たり人間の世、寥落たり壺中の天。

獨見遊物祖。探玄窮化先。

獨見、物の祖に遊び、玄を探つて、化の先を窮む。

何當共攜手。相與排冥筌。

何ぞ當に共に手を攜へ、相與に冥筌を排すべき。

【字解】(一)蒼梧、前に見ゆ。(二)椅桐、梓實桐皮を椅といふ、あづきの屬。(三)慕蘭、史記に「司馬相如、少時、その親、これを名づけて犬子といふ。相如、すでに學び、蘭相如の人となり慕ひ、名を相如と更む」とある。(四)攀嵒、顏延年の詩に「交、呂氏孤軒、攀嵒亦風舉」とある。嵒は嵒崖。(五)黃石老、子房、前に見ゆ。(六)徂川、流れ行く川。(七)三山、前に見ゆ。(八)壺中天、後漢書に「費長房は、汝南の人、かつて市樓たり。市中に老翁あり、藥を賣り、一壺を肆頭に懸け、市罷むに及び、輒ち跳つて壺中に入る。市人、これを見るなし、唯だ長房、樓上に於て之を觀て、異とす。因つて、往いて再拜し、酒助を來す。翁、長房の其神を意ふを知るや、これに謂つて曰く、子、明日、更めて來るべし」と。長房、且日、復た翁に詣る。翁、乃ち與に俱に壺中に入る、唯だ見る、玉堂殿、旨酒甘肴、その中に盈衍するを。ともに、飲み畢つて出づ。翁約して人と之を言ふを聽るさず。後、乃ち樓上に就いて長房を候して曰く、我は神仙の人、過を以て責めらる、今畢る、當に去るべし」とある。(九)物祖、莊子に「萬物の祖に浮游し、物を物として、物に物とせられず」とあり、文子に「虛無恬愉は、萬物の祖なり」とある。(十)探玄、前に見ゆ。

【一】化先、物化の前。(二)排冥筌、李善の文選註に「筌は魚を捕ふるの器。言ふは、魚の筌に在る、猶ほ人の塵俗に處るが如し」とある。

とし、今すてに辨して之を去る、超えて塵埃の外に在り」とある。

【題義】唐時の深州は、亦た饒陽郡といひ、河北道に屬し、上州に係つて居た。それから、上州の佐には司戸參軍事が二人あつて、從七品下である。この詩は、饒陽の司戸參軍たりし張翥といふ人に贈つたのである。

【詩意】かの鸞鳳は、大空を翔け廻つて、朝には蒼梧の泉を飲み、夕には碧海の煙に棲むのが本志であるのに、區區として、梧桐の前に託して居るのは、如何なる意に因るか、誰も之を測り知るものはない。君は近ごろ蘭相如の人物を慕ひ、又嵇康の眞似をしやうと思つて居るが、その本来の才幹は、張子房の賢に亞ぐ位。しかし、黃石公に非ざれば、これを識別することが出来ず、相變らず、風塵の底に燻つて居るので、功業未だ成らざるに、落日西に傾き、容華は次第に凋零して、行く川の流一たび去つて返らざるが如くである。そこで、一語、その志を述べられたが、やがて、仙を學び、海中の三神山に向つて、鞭を著けたいといふことである。げにや、人間の世に於ては、兎角蹉跎し易く、壺中の天地は、寥落無邊である。かくて、獨特の見解を以て、虛無恬淡を旨とせる萬物の本源に遊び、道家の玄理を探つて、物化の先を窮めやうとして居る。われも亦た同じ志を持つて居るから、どうかして、ともに手を攜へ、魚が筌を排して逸し去るが如く、塵埃の外に超出したいものである。

贈清漳明府姪聿

清漳明府姪聿に贈る

我李百萬葉、柯條布中州。

我が李、百萬葉、柯條、中州に布く。

天開青雲器、日爲蒼生憂。

天は青雲の器を開き、日に蒼生の爲に憂ふ。

小邑且割雞、大刀佇烹牛。

小邑、且つ雞を割き、大刀、佇んで牛を烹る。

雷聲動四境、惠與清漳流。

雷聲、四境を動かし、惠は清漳と流る。

絃歌詠唐堯、脫落隱簪組。

絃歌、唐堯を詠じ、脫落、簪組に隱る。

心和得天眞、風俗猶太古。

心和して天眞を得、風俗、猶ほ太古。

牛羊散阡陌、夜寢不扃戶。

牛羊、阡陌に散じ、夜、寢ぬるに戸を扃さず。

問此何以然、賢人宰吾土。

問ふ、此は何を以て然るか、賢人、吾が土に宰たりと。

舉邑樹桃李、垂陰又流芬。

舉邑、桃李を樹え、陰を垂れて、亦た芬を流す。

河堤繞綠水、桑柘連青雲。

河堤、綠水を繞り、桑柘、青雲に連る。

趙女不冶容、提籠晝成羣。

趙女は冶容ならず、籠を提げて、晝、羣を成す。

繰絲鳴機杼、百里聲相聞。

絲を繰つて機杼を鳴らし、百里、聲相聞こゆ。

訟息鳥下階。高臥披道帙。

訟、息んで、鳥、階に下り、高臥、道帙を披く。

蒲鞭掛簷枝。示恥無撲扶。

蒲鞭は、簷枝に掛け、恥を示して、撲扶なし。

琴清月當戶。人寂風入室。

琴清くして、月、戸に當り、人寂として、風、室に入る。

長嘯無一言。陶然上皇逸。

長嘯、一言なく、陶然たり、上皇の逸。

白玉壺氷水。壺中見底清。

白玉壺の氷水、壺中に底の清きを見る。

清光洞毫髮。皎潔照羣情。

清光、毫髮を洞し、皎潔、羣情を照らす。

趙北美嘉政。燕南播高名。

趙北、嘉政を美とし、燕南、高名を播く。

過客覽行謠。因之誦德聲。

過客、行謠を覽、これに因つて德聲を誦す。

【字解】(一) 我李。唐は老子を以て祖とし、李白も、嘗て皆帝室の胄と稱して居たから、かく云つたのである。(二) 柯條。枝分派別の義。(三) 青雲器。青雲に上り大官に任ずべき器量。(四) 割雞。史記に「子游、武城の宰となる。孔子、過きて鼓歌の聲を聞き、莞爾として笑つて曰く、雞を割くに焉んぞ牛刀を用ひむや」とある。(五) 清漳。漳水に清漳、濁漳の二源があつて、清漳は上黨沾縣の西北少山の大風谷から出る。(六) 唐堯。昔唐の琴賦に雅規三唐堯、穆猷二微子とある。(七) 管組。組は鏡の屬。(八) 太古。唐虞以上をいふ。(九) 周。とぞす。(一〇) 治容。易に治容謙淫とある。(一一) 道帙。帙は書衣、道家の仙書。(一二) 蒲鞭。後漢書に「劉寬、南陽太守に遷る、吏人過れば、但だ蒲鞭を用ひて之を罰し、辱を示すのみ、絶えて苦を加へず」とあり、南史に「崔景真、平昌太守となり、嘉政あり、嘗に一蒲鞭を懸け、しかも、未だ嘗て用ひず」とある。(一三) 撲扶。撲は答撃する。(一四) 上皇。伏羲は三皇の最も先なるものなるが故に云ふ。(一五) 白玉壺氷水。鮑照の詩に清如三玉壺氷とある。(一六) 行謠。謠は徒歌にして、章曲なきものをいふ。

【題義】王琦の解に「唐時、清漳縣は河北道の洛州に隸す、南、漳水に濱す、因つて以て名と爲す。寶退録に、明府は、漢人以て太守を稱し、唐人以て縣令を稱す」とある。この詩は、李白の姪に當る清漳縣令李聿といふ人に贈つたので、謂はゆる、無爲にして治めるといふことを誇張して寫し出し、苟くも、牧民の職に在るものは、淳朴を旨とし、是非とも、かくの如くせねばならぬといふことを極力縷述したのである。

【詩意】名にしおふ我が李氏は、百萬葉といふ様に、柯條が分れて、支那全土、到る處に繁榮して居る。その中に、我が姪の李聿は、天晴、青雲に上るべき大器量を天から授けられ、日に蒼生の事を憂ひて居る。かくて、今こそ、河北の片田舎に縣令をして居て、如何にも、雞を割くに牛刀を用ふる嫌なきにしもあらずであるが、その雞を割く大刀は、やがて牛を料理して烹る用にも供せられるので、つまり、小邑が治まる上は、これを大にして、天下に施すことも出来る譯である。かくて、雷名は、四境に轟き渡り、その恩恵は、清漳の流と共に盡きない。清漳縣の善く治まつて居る有様は、むかし、康衢の民が唐堯を謳歌したるが如く、そして、李聿その人は、管組の役人の中に隠者となつた心持で、専ら無爲の治を布いて居る。それでこそ心が和いで、天真を得るから、民間の風俗は、太古の如く、

牛羊は、その生を遂げて、阡陌の間に散在し、夜、寝るにも、戸を閉さない。そこで、どういふ譯で、かくも善く治まつたかといつて、試に人民に問ふと、吾が土には、賢人が居られるからだといつて居る。現に、村中を擧つて、桃李を樹ゑ、いづれも、處得顔に陰を成して垂れ、その間に限りなく香ばしき匂を濃はして居る。又澄める河水を繞る隄の上には、桑柘が青青と繁つて雲に連り、そして趙女は、格別綺羅をも飾らず、籠を抱いて桑の葉を摘みに出かける。さて蠶時が済むと、今度は絲を繰り、機杼の聲は百里の間に響いて、少しも絶えない。無論、縣中には、訴訟沙汰が無く、法廷には、時時鳥が下つて来る。明府は役所に出て居ても、全く用が無くて閑散であるから、道書などを披いて、讀み耽つて居る。それから、蒲鞭は、唯だ軒先に掛けてあるだけで、人民は、既に恥を知つて居るから、これを笞つ必要もない。明府の住居の様を言へば、琴聲清くして、月は戸を窺ひ、人語寂として、風は自由に空中に吹き入り、その時しも、明府は、長嘯して一言なく、宛然義皇以上の人の如き趣がある。白玉壺は、實に綺麗であるのに、それに氷のやうな水を盛れば、愈よ綺麗で、底までも透き通る様に見える、その清光は、人の毫髪を洞し、その皎潔は、羣情を照らす様な想を爲さしめる。それで、趙の北、燕の南、清漳の川の流れて居る地域に於て、かくの如き美政を施し、高名を天下に播かれる次第であるから、この土地を過ぐるものは、皆面のあたり、その實況を見、行、其徳を誦ひ、その事實に因つて、徳聲を頌するので、なんと素張らしいものではないか。

【餘論】乾隆御批には「天開青雲器、日爲蒼生憂、范仲淹一流の人物に似たり、心和得三天真、以下、循良の實、藹然として親むべし、民收たるもの、直に當に之を坐右に書すべし」とある。

贈臨洛縣令皓弟

臨洛縣令皓弟に贈る

陶令去彭澤。茫然太古心。

陶令、彭澤を去り、茫然たり、太古の心。

大音自成曲。但奏無絃琴。

大音自ら曲を成し、但だ奏す無絃琴。

釣水路非遠。連鼉意何深。

水に釣る、路遠きに非ず、鼉を連ぬる、意何ぞ深き。

終期龍伯國。與爾相招尋。

終に期す龍伯の國、爾と相招いて尋ねむ。

【字解】【一】彭澤、晉書に「陶潛、彭澤の令となる、素より前賞、私に上官に事へず。郡督郵を遣はして至る。縣吏曰く、應に東帶してこれを見るべし」と。潛、嘆じて曰く、我豈に能く五斗米の爲に、腰を折つて、鄉里の小人に事へむや」と。即日印を解いて去り、乃ち歸去來を賦す」とある。【二】大音、老子に「大音希聲」とある。【三】無絃琴、晉書の上文の續きに「性、音を解せず、しかも、素琴一張を蓄ふ、絃微共ばらず、朋酒の會ごとに、撫して、これに和して曰く、但だ琴中の趣を知る、何ぞ絃上の聲を勞せむや」とある。【四】龍伯國、その地の人が一釣して六鼉を釣り上げしこと、前に見ゆ。

【題義】唐時の臨洛縣は、河北道の洛州に隸して居たので、北、洛水に濱するが故に、名としたのである。原註には「時に詔へられて官を停む」とある。すると、この詩は、族弟臨洛縣令李皓に贈つて、

聊か慰諭の意を表したのである。

【詩意】むかし、陶淵明は、彭澤の縣令であつたが、一朝感ずるところあつて、その職を辭し、心は浮世を離れ、茫然として、太古と冥契した。その無絃琴を奏したのは、即ち琴中の趣を得たもので、大音は希聲といふ主意にも協つて、自然に曲を成して居る。君は今官を停められ、矢張、淵明と同じやうな心持である。そればかりか、やがて海への路を遠しとせず、一舉して六龍を釣り上げやうと心に期して居るから、龍伯國の人人は、丁度善い仲間だといつて、はるかに、招き寄せることであらう。

【餘論】詔へられて官を停められたのは、あまり、目出たいことでも無いが、この際、陶淵明が彭澤の令を辭した様な高操を懐いて居れば、そんな事にくよくよする必要は無いので、更に進んでは、六龍を釣るやうな、大きな心意氣を持つて欲しいといふのが、究極の趣意である。

贈郭季鷹

郭季鷹に贈る

河東郭有道、於世若浮雲。

河東の郭有道、世に於ては浮雲の若し。

盛德無我位、清光獨映君。

盛德、我が位なく、清光獨り君に映す。

恥將雞竝食、長與鳳爲羣。

雞と竝び食するを恥ぢ、長く鳳と羣を爲す。

一擊九千仞、相期凌紫氣。

一擊九千仞、相期して紫氣を凌がむ。

【字解】(一) 河東郭有道、後漢書に「郭太、字は林宗、太原界休の人なり。司徒王瓊、辟し、太常超典、有道に擧ぐ、ともに離せず。家に卒す、同志の者、ともに石に刻して碑を立つ、蔡邕、文を爲る、すでにして盧植に聞つて曰く、吾、碑銘を爲ること多し、皆、意徳あり、唯だ郭有道は魏色なきのみ」とある。(二) 恥將雞竝食、楚辭に「將與雞爭食乎」とある。將は與に同じ。(三) 九千仞、春秋後語に「宋玉曰く、鳳凰は上に擊つこと九千仞、竊冥の上に翱翔す」とある。(四) 凌紫氣、劉楨の詩に「鳳凰集三南岳、徘徊孤竹根、予心有不厭、奮翅凌紫氣」とある。

【題義】郭季鷹は、閱歴詳ならざれども、高操、一世に著しき人と思はれる。

【詩意】河東に生まれた君は、さながら古しへの同姓たりし郭有道の如き人物であつて、浮世の功名富貴を浮雲と同一視して居る。元來、盛徳に協ふ様な位地とはなく、その清光は、ひとり君に映じて居る。されば、君は鳳凰とともに羣を爲すべく、雞などと食を争ふは、もとより、恥とするところである。抑も、鳳凰は、一たび羽ばたけば、九千仞の高きに上り、天上の紫氣を凌ぐといふが、君が世外に超出せむとする本志も、亦た斯の如くである。

鄴中贈王大勸入高鳳石門山幽居

鄴中にて、王大勸の高鳳石門山の幽居に入るに贈る

一身竟無託、遠與孤蓬征。一身、竟に託するなく、遠く孤蓬と征く。

贈 贈郭季鷹・鄴中贈王大勸入高鳳石門山幽居

千里失所依。復將落葉并。千里、依るところを失ひ、復た落葉と并す。
 中途偶良朋。問我將何行。中途、良朋に偶ふ、我に問ふ、將に何にか行かむとする。
 欲獻濟時策。此心誰見明。濟時の策を獻せむと欲するも、此心、誰か明にせられむ。
 君王制六合。海塞無交兵。君王、六合を制し、海塞、兵を交ふるなし。
 壯士伏草間。沈憂亂縱橫。壯士は草間に伏し、沈憂、亂れて縱橫。
 飄飄不得意。昨發南都城。飄飄として意を得ず、昨、南都城を發す。
 紫燕櫪上嘶。青萍匣中鳴。紫燕は櫪上に嘶き、青萍は匣中に鳴る。
 投軀寄天下。長嘯尋豪英。軀を投じて、天下に寄せ、長嘯、豪英を尋ぬ。
 恥學瑯琊人。龍蟠事躬耕。恥づ、瑯琊の人を學んで、龍蟠、躬耕を事とするを。
 富貴吾自取。建功及春榮。富貴は、吾、自ら取る、功を建てて、春榮に及ぶ。
 我願執爾手。爾方達我情。我が願は、爾の手を執り、爾方に我が情を達す。
 相知同一己。豈唯弟與兄。相知、同一のみ、豈に唯だ弟と兄とのみならむや。
 抱子弄白雲。琴歌發清聲。子を抱いて白雲を弄し、琴歌、清聲を發す。

臨別意難盡。各希存令名。別に臨んで、意盡し難し、各、令名を存せむことを希ふ。

【字解】(一) 孤蓬征。鮑照の蕪城賦に孤蓬自征とあり、呂向の註に「孤蓬は草なり、根なくして風に飄つて飄轉するもの」とある。(二) 海塞。海は國の邊境、邊塞といふに同じ。(三) 南都。後漢の光武帝は、南陽を別都として南都と稱した。(四) 紫燕。良馬の名。(五) 青萍。劍の名。(六) 瑯琊人。後漢紀に「瑯琊郡の人、諸葛亮、字は孔明、躬耕から隱居に耕し、好んで漢交吟を爲す」とある。(七) 龍蟠。習鑿齒の通鑑論に「諸葛武侯、江南に龍蟠し、管樂を好むに託し、匡漢の望あり」とある。

【題義】鄴中は即ち鄴郡、唐時は河北道に屬し、又相州といつた。王大のは排行、一に同じ、勸は其名であらう。高鳳石門山幽居は、王琦の解に「後漢書の高鳳傳、鳳は南陽葉の人、後、西唐山中に教授す。註に曰く、山は、今の唐州湖陽縣に在りと、石門山の事を言はず。庾信、高鳳の贊を作り、石門雲度、銅梁雨來云云とあり。後人、註するもの、亦た未だ其地の何處に在るかを詳にせず。豈に石門山は即ち西唐山の異名なるか」とある。この詩は、李白が鄴郡に於て王勸といふものに遇ひ、その高鳳幽居の遺跡たる石門山に入らむとするを聞いて、賦して贈つたのである。

【詩意】わが一身は、寄託するところなく、さながら、孤蓬の飄轉するが如く、遠く飛び散り、又千里依るところなく、落葉と一般。そこで、その途中に於て、この鄴郡まで、さまよつて來たのである。すると、この地に於て、良友に遇ひ、われに向つて、何處へ往くかと問うて呉れた。われ之に答へて云ふ、濟時の大策を朝廷に獻じたいと思ふが、この區區の赤心を明かにして呉れる人がない。今しも、

君王は六合を制馭し、邊塞には兵を交ふることなく、至極太平の様に見えて居るが、自分のやうな壯士は草間に伏し、時弊漸く盛ならむとするを見て、深き憂は縦横に亂れる位である。かくて、不得意の境涯に居るに堪へず、飄飄然として、昨日、南陽の故城を發して、ここまで來たのである。わが刻下の有様は、才あるも用ひられず、志あるも未だ遂げず、たとへば、紫燕の名馬が槽檻の中に嘶き、青萍の寶劍が拂拭されずして、匣中に悲吟するが如くである。そこで、韁を投じて、天下を歴めぐり、長嘯して、同志の豪英を尋ねむとし、かの瑯琊の人なる諸葛亮が、臥龍を以て自ら居り、南陽に躬耕して居た其真似をするのは、わが恥づるところである。やがて富貴を取り功を建てて、陽春に萬物が生育する様な目出たき時節に逢つたならば、願はくは、汝の手を執つて、舊情を述ぶべきが故に、汝亦た之を歡迎して、わが情思の届くやうにして貰ひたい。元來、互に相知れるは、心が全く同一であるからで、その親密なことは、兄弟以上である。そこで、汝を抱いて、ともに石門山の白雲に臥し、琴に和して歌を唱へつつ、清聲を發するであらう。わが希望するところは、かくの如く、つまり、功成り名遂げて後、汝と共に物外の地に逍遙しやうといふので、ここに別に臨んで、心に思ふところは、なかなか述べ盡し難く、唯だ御互に身を慎んで、折角の名譽を落さぬやうに致したいものである。

【餘論】蕭士贇は「この詩、其れ祿山將に反せむとするの際に作れるか。祿山の將に反せむとするに當り、上下、皆その狀を知る。ひとり、明皇のみ、これを然りとせず、太白も亦た言はむと欲して敢

てせず、聊か詩に因つて、以て其憂國の情を發舒するか。太白平生の任俠、亦た斯世に志ある、この詩に於て想ひ見るべし」といつたが、さすがに、見るところある確説である。

贈華州王司士 華州の王司士に贈る

淮水不絶波瀾高 淮水絶えず、波瀾高し。

盛徳未泯生英髦 盛徳、未だ泯びずして、英髦を生ず。

知君先負廟堂器 知る、君が先づ廟堂の器を負ふを。

今日還須贈寶刀 今日還た須らく寶刀を贈るべし。

ある。【一】英髦、爾雅に「髦、選なり、俊なり」とあり、郭璞の註に「俊士の選なり、士中の俊は毛中の髦の如きなり」とあり。郭璞の疏に「毛中の長毫を髦といふ」とある。【二】贈寶刀、晉書王祥傳に「呂虔、佩刀あり、工、これを相す、以爲へらく、必ず三公に登り、この刀を服すべし」と。虔、祥に謂つて曰く、苟くも其人に非ざれば、刀、或は吾を爲さむ。卿、公輔の量あり、故に以て相與へむ」とある。

【題義】唐時の華州は、又これを華陰郡といひ、關内道に屬し、上州に係る、上州の佐には、司士參軍事一人あつて、從七品下に屬して居た。この詩は、華州の司士參軍事王某に贈つて、その人物を美したのである。

【字解】【一】淮水不絶、晉書王

祥傳に「はじめ、導、淮を渡り、郭項をして之を蓋せしむ。卦成る、項曰く、吉、利ならざるなし、淮水絶ゆれば、王氏滅せむ。その後、子孫繁衍せむと。竟に項の言の如し」と

【詩意】むかし、郭璞は、王導の爲に卜して、淮水にして絶えざる限りは、王氏は、絶滅しないといつたが、現に淮水は流絶えずして、波瀾さへ高く揚がり、先代の名だたる人人の盛徳は、未だ混びずして、なほ儼存し、ここに、君の如き士中の俊を産出した。君は、やがて三公の位に登るべき廟堂の器を負うた人であるから、われは、むかしの呂虔の王祥に於けるに倣ひ、寶刀を解いて、君に贈らうとするのである。

【餘論】前半後半、各一故事を用ひ、一は王導、一は王祥、ともに、同姓に係り、王某に贈るには、極めて切實である。

贈盧徵君昆弟

盧徵君の昆弟に贈る

明主訪賢逸。雲泉今已空。

明主、賢逸を訪ひ、雲泉、今すでに空し。

二慮竟不起。萬乘高其風。

二慮、竟に起たず、萬乘、その風を高しとす。

河上喜相得。壺中趣每同。

河上、相得るを喜び、壺中、趣、毎に同じ。

滄洲即此地。觀化遊無窮。

滄洲は即ち此地、化を觀て無窮に遊ぶ。

木落海水清。鼉背觀方蓬。

木落ちて海水清く、鼉背に方蓬を觀る。

與君弄倒影。攜手凌星虹。

君と倒影を弄し、手を攜へて星虹を凌がむ。

【字解】(一) 雲泉 雲生じ泉湧く處、即ち山中。(二) 河上 神仙傳に「河上公は、その姓字を知るなし、漢の文帝の時、公、草を結び、鹿を河の濱に爲る。帝、老子經を讀み、頗る之を好めども、數事を解せず、時人能く之を道ふなし。時、昔、河上公が老子經の義を解すと稱するを聞き、乃ち決せざるところの事を齎らして、以て問はしむ。公曰く、道は尊く、徳は貴し、遂に問ふべきに非ざるなり」と。帝、即ち其處に幸し、躬づから之を問ふ。帝曰く、普天の下、王土に非ざるはなく、率土の濱、王臣に非ざるはなし。子、道ありと雖も、猶ほ朕の民なりと。公、即ち掌を撫して坐罷すれば、冉冉として虚空中に在り、地を去ること數丈、僂して答へて曰く、子、上、天に至らず、中、人に累せず、下、地に居らず、何の臣民か之れあらむと。帝、車を下つて稽首す。公、乃ち素書二卷を授け、帝に與へて曰く、子、この經を註して以來、一千二百餘年、凡そ三人に傳ふ、子を連れて四と。言畢つて、在るところを失ふ」とある。(三) 壺中 費長房が出逢つた老仙の事、前に見ゆ。(四) 鼉背、方蓬、倒影、星虹、亦た前に見ゆ。

【題義】徵君とは、天子に辟されたことある人で、後漢書に「黃憲、はじめ孝廉に擧げられ、又公府に辟さる。友人、その仕を勸む。憲、亦た之を拒まず、しばらく、京師に到つて還り、竟に就くところなし、年四十八にして終る、天下號して徵君といふ」とあつて、後世徵君の稱は、ここに、始まつたのである。蕭士贇は「按するに、盧徵君、名は鴻、字は顯然、唐書に傳あり、云ふ、その先は范陽の人、博學善く籍を書す、嵩山に處す、玄宗開元の初、禮を備へて徵すこと再、至らず、五年再び詔し、徵して東都に至らしめ、謁見して諫議大夫に拜せらる、固辭す、制して山に還るを許し、隱居の服を賜ひ、草堂を官營す、卒するに及びて、帝、萬錢を賜ふ、鴻居るところの宅、自ら寧極と號す」

といつたが、王琦は之を駁して「蕭註、以へらく、盧徵君は、即ち是れ盧鴻と。唐書及び他書載するところの鴻の事を考ふるに、すべて、その弟あつて同じく隠れたることを言はず、恐らくは、この盧は、又是れ一人」といつたが、或は、さうであるかも知れぬ。この詩は、盧徵君兄弟に贈つて、その高操を美したのである。

【詩意】方今の士、明主は上に在まして、隱逸の賢者を訪求せられ、大抵もう召し出されて、今や山中も空しく、さういふ人も残つて居ない位、ここに、盧氏兄弟は、數ば徵されたが、竟に起たず、萬乘の天子も、その高風を稱賞せられた。徵君は、むかしの河上公と相得て、定めて喜ぶべく、又仙人が壺中に別世界を幻出する其趣と毎毎同一である。徵君は、其山を以て滄洲と看做し、靜に宇宙の物化を觀て、心を無窮の大道に遊ばしめる。かくて、晩秋の頃、木の葉が落ち盡し、鼈背に在る方壺蓬萊が目あたり見ゆる時分に、われも、君を訪ひ、ともに、日影中に浮べる倒影を弄し、手を攜へて、天空を飛行し、かの星虹を凌いで、瑤闕に朝したいと思つて居る。

贈新平少年

新平の少年に贈る

韓信在淮陰。少年相欺凌。

韓信は淮陰に在り、少年相欺凌す。

屈體若無骨。壯心有所憑。

體を屈して、骨なきが若く、壯心憑るところあり。

一遭龍顏君。嘯咤從此興。

一たび、龍顏の君に遭ひ、嘯咤これより興る。

千金答漂母。萬古共嗟稱。

千金、漂母に答へ、萬古、ともに嗟稱す。

而我竟何爲。寒苦坐相仍。

而かも、我、竟に何すれぞ、寒苦、坐に相仍る。

長風入短袂。兩手如懷冰。

長風、短袂に入り、兩手、氷を懷くが如し。

故友不相恤。新交寧見矜。

故友、相恤まず、新交、むしろ矜まれむや。

摧殘檻中虎。羈縶韉上鷹。

摧殘す檻中の虎、羈縶す韉中の鷹。

何時騰風雲。搏擊申所能。

何れの時か、風雲を騰げ、搏擊、能くするところを申べむ。

【字解】【一】韓信、淮陰の少年に辱められ、股下より出でしこと、前に見ゆ。【二】龍顏君、漢書に「高祖、人と爲り、隆準にして龍顏」とある。【三】漂母、韓信に飯せしこと、前に見ゆ。【四】矜、憐む。【五】韉上、韉は、皮を以て手を蔽うて、鷹を臂にするなり、邪語、ゆかけ。

【題義】新平は郡名、即ち邢州、一本には新豐に作つてある。この詩は、少年に贈るのであるから、極めて、豪放の語をなし、そして、おのが不遇を嘲つ意も、自然その中に見えて居る。

【詩意】韓信が初め淮陰に在つて、市井の少年輩の爲に壓倒されたり、凌辱されたりした時分には、わざと、その英氣を隠し、おのが體を屈して、殆んど骨なしの軟弱漢の如く見えたが、胸中には、壯心

依然として、自ら恃むところあるに因つて、此の如くしたのである。果せるかな、一たび龍顔の君たる漢の高祖に遇ひ、それより、風雲を嘯咤して、大英雄たる眞面目を發揮した。そこで、千金を以て一飯の恩ある漂母に報いたが、まことに、美事として、萬世の下、なほ嗟稱するところである。韓信は、さういふ風で、お前も、やがて、さう成るであらうが、自分は、そんな譯には行かず、唯だ寒苦の爲に攻められ、寒い時分にも、短い袖の著物一枚引ッかけて居るばかりで、長風は自由に吹き入り、どんなに手を入れても、氷を懐いて居るやうである。かくて舊交ある人でも、一向かまつて呉れず、新交の者は、猶更それを憐まうともせず。虎が檻中に拘へられて、元氣衰へ、鷹が弓懸に縛られて、身體の自由を得ぬと同じであつて、風雲に際會するは、何時とも分らず、どうして他の獸だの鳥だのを撃つて、虎もしくは鷹の本能を發揮することが出来やうか、それも六つかしいことで、我ながら、情ない境涯である。

【餘論】嚴滄浪は「太白の詩、匠心多し。口を衝いて、推蔽に由らざるに似たり。能く推蔽者をして之を見て、醜とせしむ、これ何を以ての故ぞ」といひ、鍾惺は「屈體の二句、老杜嚴僕射の詩、開口取將相、小心事友生」と、竝に英俠の本色、屈伸の妙を寫し出すを見るべし」といつた。

贈崔侍御

崔侍御に贈る

長劍一杯酒。男兒方寸心。
洛陽因劇孟。託宿話胸襟。
但仰山嶽秀。不知江海深。
長安復攜手。再顧重千金。
君乃翰軒佐。予叨翰墨林。
高風摧秀木。虛彈落驚禽。
不取回舟興。而來命駕尋。
扶搖應借力。桃李願成陰。
笑吐張儀舌。愁爲莊舄吟。
誰憐明月夜。腸斷聽秋砧。

長劍一杯の酒、男兒方寸の心。
洛陽、劇孟に因り、託宿して胸襟を話す。
但だ山嶽の秀を仰いで、江海の深きを知らず。
長安復た手を攜へ、再顧、千金より重し。
君は乃ち翰軒の佐、予は翰墨の林を叨りにす。
高風、秀木を摧き、虚彈、驚禽を落す。
回舟の興を取らず、而來、駕を命じて尋ぬ。
扶搖、應に力を借るべし、桃李、願はくは陰を成さむ。
笑うて、張儀の舌を吐き、愁へて莊舄の吟を爲す。
誰か憐まむ、明月の夜、腸断えて、秋砧を聴くを。

【字解】【一】劇孟、前に見ゆ、漢書に「洛陽の人なり。周人は商賈を以て資となし、劇孟は俠を以て顯はる」とある。【二】翰軒、風俗通に「周秦、常に歳の八月を以て翰軒の使を遣し、異代の方言を求め、還り奏して、これを籍とし、歸室に藏す」とある。李白は崔公澤吟詩序を作り、中佐憲東の語あるを見れば、崔、かつて事を以て使副となつたのである。翰は輕き車。【三】高風摧秀木、李康の運命論に「木、林に秀づれば、風、必ず之を摧く」とある。【四】虚彈落驚禽、隋の宣明の句。【五】回舟、王子猷、雪

後、戴安道を訪ひ、門前より舟を同せしこと、前に見ゆ。【五】命駕、世説に「魯康、呂安と善し、一たび相思ふ毎に、千里駕を命ず」とある。【六】扶搖、莊子に「扶搖に擲つて上ること九万里」とある。扶搖は鷲の字。【七】桃李、張儀舌、ともに前に見ゆ。【八】莊舄吟、史記に「越人莊舄、楚に事へて執珪たり、暫くあつて病む。楚王曰く、舄は故と越の鄙人なり、今、楚に事へて、執珪官貴、亦た越を思ふや否や。中謝曰く、凡そ人の故を思ふ、その病に在るなり。彼、越を思へば越聲、越を思はざれば楚聲」と。人をして往いて之を聽かしむれば、猶ほ尙ほ越聲なり」とある。

【題義】これは、崔侍御に贈り、主として、自己の感懐を述べたのである。崔侍御の名字閔歷等は、不詳である。

【詩意】長劍に仗り、一杯の酒を傾けて、男兒が方寸の心を披くは、豪俠の徒の爲すことで、われとても、亦たさうである。むかし、洛陽に於て、劇孟に比すべき君に遇ひ、その家に留宿して、胸襟を語り明かした。君の風骨を仰げば、山岳の秀でたるが如く、その交情は、江海さへ深いといへぬ位。その後、長安に於て、復た相逢うて手を攜へ、再會の嬉しきは、千金も物かはと思はれた。兎角する内に、君は輜軒の副使となつて外に出で、予は叨りに翰林に待詔として、都に居り、一朝隔絶して仕舞つた。しかも、予は、兎角、當世に容れられず、秀でたる木が高風に摧かるる如く、數は物に怯えた鳥が、から玉でも射落されると同じく、衆人の妬を受け、脅迫して朝廷を逐ひ出されて仕舞つた。予が都を出でしは興盡きし儘、友にも遇はず、直に舟を還したといふやうな風流の意味ではなく、放逐同様の憂き目に遇つたので、君を思へば、矢も楯もたまらず、千里の遠きも、駕を命じて、直に尋ね

て參つたやうな次第である。抑も、大鵬とても、扶搖の風を借らなければ、翼を動かすことが出来ず、桃李も、春の日の照照たるに遇うて生長しなければ、陰を成すことは出来ない。そこで、予は、君に向つて、扶搖の風を借し、又桃李をして陰を成させよと懇囑するのである。むかし、張儀は、この舌が残つて居れば、それで澤山だといつたが、予も亦た其通りで、表面に於ては、相變らず、快げに談笑して居るものの、莊舄は、病中に故郷を思うて、越聲を爲したといふが、予は流寓の身の上であるから、矢張、故郷を思はぬことはない。中にも、明月の夜に、秋の砧の聲を聞き、流浪の身につまされて、心腸を斷つ其愁苦に對して、誰か同情を寄せて呉れるか。願はくは、君、予が輜軻不遇を憐み、舊交を思ひ出でて、是非、一臂の力を借して貰ひたい。

【餘論】王琦の解に「笑吐三張儀舌」は、談笑の美に喩へ、愁爲三莊舄吟は家を思ふの切なるに喩ふといひ、簡にして盡くして居る。

走筆贈獨孤駙馬

筆を走らして獨孤駙馬に贈る

都尉朝天躍馬歸、都尉、天に朝し、馬を躍らして歸る。
香風吹人花亂飛、香風、人を吹いて花亂飛す。
銀鞍紫鞵照雲日、銀鞍紫鞵、雲日を照らし、

【字解】(一) 朝天、皇宮に入朝する。(二) 紫鞵、鞍は馬勒、即ちくつわ。(三) 左顧右盼、傍若無人の貌。(四) 金門、金馬門、前に見ゆ。

左顧右眄生光輝。左顧右眄、光輝を生ず。

是時僕在金門裏。この時、僕は金門の裏に在り、

待詔公車謁天子。公車に待詔して、天子に謁す。

長揖蒙垂國士恩。長揖、國士の恩を垂るるを蒙り、

壯心剖出酬知己。壯心剖出して、知己に酬ゆ。

一別蹉跎朝市間。一別蹉跎たり、朝市の間

青雲之交不可攀。青雲の交、攀つべからず。

儻其公子重廻顧。もし其れ、公子重ねて廻顧すれば、

何必侯嬴長抱關。何必、侯嬴長く關を抱かむ。

【題義】唐書に「玄宗の女、信成公主、獨孤明に下嫁す」とある。それから、初學記に「駙馬都尉は、漢武置くなり、御馬を掌る。兩漢を歴て、多く宗室及び外戚、諸公の子孫を之に任す。魏の何晏に至り、主婿を以て、駙馬都尉に拜せらる。其の後、杜預、晉の宣帝の女、高珪公に尙して、駙馬都尉に拜せられ、王濟、晉の文帝の女、常山公主に尙して、駙馬都尉に拜せらる。後代、晉魏以て恆となす

【一】待詔 漢書張劭の註に「諸の才技を以て徵召する、未だ正官あらず、故に待詔といふ」とある、即ち候補の義。【二】公車 漢書顏師古の註に「公車令、衛尉に屬す、上書するもの詣るところなり」とある、上奏者の控所。【三】國士恩 戰國策に「豫讓曰く、智伯は國士を以て臣を遇す、臣、故に國士を以て之に報ゆ」とある。【四】青雲之交 仕官して交直上、互に推薦すること。【五】公子 信陵君を指す。【六】侯嬴 夷門の監者で、信陵君に禮せられて、その上客となりしこと、前に見ゆ。

に因つて、公主に向する毎に、駙馬都尉に拜す」とあり、通典に「唐の駙馬都尉、從五品の下、皆主に向するもの、之と爲る。開元三年八月、駙馬都尉從五品階に敕し、宜しく、令式に依るべし、仍つて、紫金魚袋を借す。天寶以前は、悉く儀容美麗なる者を以て選に充つ」とある。この詩は、李白が駙馬都尉の獨孤明といふ人に贈つて、おのが境遇を訴へたのである。

【詩意】駙馬都尉たる君は、天闕に朝したる後、馬を躍らして、得意に退出して、しづしづと家に歸る。その時しも、香風は、人を吹いて、花片が亂れ飛ぶ。その銀鞍や紫金の鞵は、長閑けき春の雲日に輝きわたり、左右に顧眄して、傍に人なきが若く、光輝燦然として、人の耳目を驚かすばかりであつた。その時、予は金馬門に居り、公車に待詔となり、やがて、天子に拜謁するを得、長揖して、國士を以て待遇される程の厚意を蒙つたが、それに就いては、君の御推薦もあつたことと思ひ、壯心を剖いて、知己に報いむことを期して居た。しかし、その後、一別せし後、この身は、朝市の間に蹉跎し、志業遂に達せず、青雲の交も、最早尋ねることが出来なくなつた。しかし、君にして、重ねて恩顧を垂れ、世話を下さるならば、予は、必ずしも、落魄せずに濟むので、丁度、むかし、信陵君が兩度も引き立て呉れたばかりに、侯嬴は、その上客とり、夷門で門番をせずとも善くなつたやうに成るであらう。それに就けても、予が刻下の境涯に對して、一片の同情を垂れて頂きたいものである。【餘論】詩意を考ふるに、この詩は、李白の放逐直後の事に係るだらうと思はれる。

贈嵩山焦鍊師并序

嵩山の焦鍊師に贈る并に序

嵩山有神人焦鍊師者。不知何許婦人也。又云生於齊梁時。其年貌可稱五六十。常胎息絕穀。居少室廬。遊行若飛。倏忽萬里。世或傳其入東海。登蓬萊。竟莫能測其往也。余訪道少室。盡登三十六峰。聞風有寄。灑翰遙贈。

【訓讀】嵩山に神人焦鍊師といふ者あり。何許の婦人なるを知らざるなり。又云ふ、齊梁の時に生まると。その年貌、五六十と稱すべく、常に胎息して穀を絶ち、少室の廬に居り、遊行飛ぶが若く、倏忽萬里。世、或はその東海に入り、蓬萊に登るを傳ふ、竟に能く其往くを測る莫きなり。余、道を少室に訪ひ、盡く三十六峰に登り、風を聞いて寄するあり、翰を灑いで、遙に贈る。

【字解】(一) 神人 神仙に同じ。(二) 鍊師 孔帖に「道士修行、徳高く、思精なるもの、これを鍊師といふ」とある。(三) 胎息絶穀 漢武内傳に「王眞、字は叔眞、上黨の人、氣を用ちて之を吞むことを習ひ、名づけて胎息といひ、舌を下臍に啞いで之を咽むことを習ひ、名づけて胎食といふ。眞、之を行ひ穀を斷つこと二百餘日、肉色光美、力、數人に並ぶ」とあり。抱朴子に「胎息を得るもの、能く口鼻を以て嘘吸せず、胎胎の中に在るが如くなれば、道成る」とある。(四) 少室 嵩山の巔きて、中に三十六峰あること、前に見ゆ。

【題義】嵩山に焦鍊師と名づくる神仙があつて、どこで生まれた婦人とも分らない、又齊梁の時代に生まれたともいふ。その年貌を観ると、五六十歳と稱すべく、平生、胎息を爲し、又穀物を絶ち、少室山中の草廬に居り、遊行すれば、その疾きこと、さながら飛ぶが如く、忽ちの間に、萬里を行つて仕舞ふ。世間では、或は傳へて、東海に入つて、蓬萊山に登つたこともあるといひ、竟にその往くところを測ることが出来ない。予は、神仙の道を少室山中に尋ねむとし、盡く三十六峰に登つた。その時、焦鍊師の高風を傳聞せしに因り、これに詩を寄せむとし、紙に書きつけて、遙に贈つた。

二室凌青天。三花含紫煙。

二室、青天を凌ぎ、三花、紫煙を含む。

中有蓬海客。宛疑麻姑仙。

中に蓬海の客あり、宛として、麻姑の仙かと疑ふ。

道在喧莫染。跡高想已綿。

道在り、喧、染むなし、跡高く、想、すでに綿たり。

時餐金鷲藥。屢讀青苔篇。

時に金鷲の藥を餐し、屢は青苔の篇を讀む。

八極恣游憩。九垓長周旋。

八極、遊憩を恣にし、九垓、長く周旋す。

下瓢酌潁水。舞鶴來伊川。

瓢を下して、潁水を酌み、鶴を舞はして、伊川に來る。

還歸東山上。獨拂秋霞眠。

還た歸る東山の上、獨り秋霞を拂うて眠る。

蘿月挂朝鏡。松風鳴夜絃。
 蘿月、朝鏡を掛け、松風、夜絃を鳴らす。
 潜光隱嵩嶽。鍊魄棲雲幄。
 光を潜めて、嵩嶽に隠れ、魄を鍊つて、雲幄に棲む。
 霓裳何飄飄。鳳吹轉綿邈。
 霓裳、何ぞ飄飄たる、鳳吹、轉た綿邈。
 願同西王母。下顧東方朔。
 願はくは、西王母に同じく、下に東方朔を顧みむ。
 紫書儻可傳。銘骨誓相學。
 紫書もし傳ふべくんば、骨に銘じて誓つて相學ばむ。

【字解】【一】二室。初學記に「嵩高山は五岳の中岳なり」といひ、巖冠之の西征記に「この山、東を大室といひ、西を少室といひ、相去ること十七里。嵩は其總名なり。これを室といふは、この下、各石室あり、少室高さ八百六十丈、上方十里。太室と相峙し、但だ小なるのみ」とある。【二】三花。述異記に「少室山に、貝多樹あり、衆木と異なり、一年に三たび花を放つ。その花、白色香美。俗云ふ、漢世、野人、子を將て此に種う」とある。【三】蓬海。蓬萊海上。【四】麻姑。前に見ゆ。【五】金鸞。桂樹をいふ。【六】青書。陳子昂の潘尊師碑頌に遺述「真人昇玄子授以寶書青書篇」とある。【七】八極。淮南子に「八極の外、乃ち八極あり」と見ゆ。【八】九垓。初學記に「九天の外、次に九垓あり」と見ゆ、垓は階の義。【九】下。許由の故事を暗用す。【一〇】颯水。少室より流れ出づ。【一一】伊川。伊水ともいふ、颯水の一源。【一二】鍊魄。紫雲書等に其法を載せてあるが、くだくだしいから、此では省略する。【一三】雷。雷は帳。【一四】鳳吹。笙をいふ。【一五】西王母。東方朔。博物志に「漢の武帝、名山大澤を祭祀し、以て神仙の道を求む、時に西王母、使を遣し、白鹿に乗じ、帝に宮に来るべきを告ぐ、乃ち九華殿に供帳して、以て之を待つ。七月七日、夜漏七刻、王母、紫雲車に乗じて、殿の西南に至り、東に面して向ふ。頭上には、七種の青氣を戴き、懸壺として盤の如し。時に、東方朔、ひそかに殿の南廂、朱鳥閣中より母を窺ふ。母、これを顧み、帝に謂つて曰く、この窺ふ小兒、かつて、三たび來つて、吾が桃を齧む」と。帝、乃ち大に之を怪む、これに因つて、世人、方朔は神仙といふなり」とある。【一六】紫書。仙書。

【詩意】大室少室の二山は、巍峨として青天に聳え、一年に三たび花を開く貝多樹は、紫煙を含んで居る。この間に住む鍊師は、蓬萊から來た客であつて、宛として、麻姑の仙かと疑はれる。鍊師の道は儼然として存し、浮世の塵囂も、これを汚すことなく、その跡高くして、玄想が絶えない。時あつては、桂花の葉を食ひ、數ば青苔の様な色の紙に書かれた仙家の秘訣に讀み耽り、八極の表に遊憩を志にし、九垓の上に立つて、長しへに周旋する。瓢を下しては、颯川の流を酌み、鶴を舞はしては、伊川の邊に來り、やがて、東山に歸れば、ひとり秋霞を拂つて、そこに靜に眠つて居る。朝に蘿に挂れる殘月は、皎然して鏡の如く、夜吹きすさぶ松風は、瑟瑟として、絃を掻き鳴らすやうである。鍊師は、光を潜めて嵩山の中に隠れ、鍊魄の術を修して、雲の帳の中に起臥して居る。その著下ろしたる霓裳は、ひらひらと飄り、吹き出す笙聲は、細く長く響く。かくて、鍊師は、西王母と相伴ひ、漢殿に下つて、東方朔を顧みむことを期して居られることと思ふ。予も亦た神仙の道に志あるもので、もし幸にして、仙家の紫書を傳へて下さるならば、骨に銘じ、一心になつて、道術を研究したいと思ふ。鍊師に於ても、願はくは、微衷を憐んで、教示して下さいらば、まことに有難い仕合である。

口號贈楊徵君

口號、楊徵君に贈る

陶令辭彭澤。梁鴻入會稽。陶令、彭澤を辭し、梁鴻、會稽に入る。

贈 口號贈楊徵君

我尋高士傳。君與古人齊。

我高士傳を尋ぬ、君は古人と齊し。

雲臥留丹壑。天書降紫泥。

雲臥、丹壑に留まり、天書、紫泥を降す。

不知楊伯起。早晚向關西。

知らず、楊伯起、早晚、關西に向ふ。

【字解】(一) 陶令、陶潛、前に見ゆ。(二) 梁鴻、前に見ゆ。(三) 高士傳、隋書に「高士傳六卷、皇甫謐撰」とあり、又「高士傳二卷、虞翻撰」とあり、唐書に「高士傳二卷、皇甫謐撰」とあり。(四) 雲臥、紫泥、ともに前に見ゆ。(五) 楊伯起、後漢書に「楊震、字は伯起、弘農華陰の人、少にして學を好み、歐陽の尚書を太常相都に受け、明經博覽、窮究せざるなし、諸儒これが語を爲して曰く、關西孔子楊伯起」とある。(六) 早晚、何時に同じ。

【題義】王琦の解に「詩題に口號あるは、梁の簡文帝の和衛尉新渝侯巡城口號に始まり、庾肩吾、王筠、ともに此作あり、唐に至つて、遂に之を相襲用す、即ち口占の義。蕭本には、口號贈微君鴻に作り、而して註して云ふ、前の贈微君の題註に見ゆと。蓋し以て即ち盧鴻となす、未だ是非を詳にせず」とある。乾隆御批にも盧鴻と斷言して居る、盧鴻ならば唐書に其傳もあつて、大した人である。しかし、繆本には陽微君に作り、王琦本には楊微君としてある、要するに、いづれが正しいか、不明である。それから、原註には「この公、時に徵さる」とある。この詩は、楊某が徵されて上京するに就いて、口占して贈つたのである。

【詩意】むかし、陶淵明は、五斗米の爲に腰を屈するを屑しとせず、彭澤の令を辭して、田園に歸り、梁鴻は、富貴功名を欲せず、會稽の山水の極めて麗しい處に隱居して居た。われは、高士傳を尋ぬるに、終生、その志を高尙にしたのは、この二人に止めを刺すやうに思つて居たが、今君の如き人があつて、陶潛梁鴻にも愧ぢない。君は、これまで、西山に隱れ、白雲に臥して丹壑に留まるといふ考であつたが、屢ば紫泥を以て封じたる勅書を降されて、頻りに召し出されたので、最早斷りを爲し切れずして、愈よ山を出られるやうに成つた。むかし、楊震は、關西の孔子とさへ稱せられて居たが、君が一たび長安に入つたならば、その聲價は決して、これに遜るまい。それに就けても、何時出かけられるのか、成るべく早く發程されたが善からうと思はれる。

【餘論】嚴滄浪は「頭を將て尾となし、亦た復た首なく、尾なし、その格、甚だ異、もし以て犯と爲さば、必ず詩を知るものに非ず」といひ、范德機は「律詩、必ず須らく規矩を守るべし。試に看よ。此等の五言、何ぞ其れ嚴なるや。今人虛實輕重、且つ審にせず、惡くにか律あらむ」といひ、乾隆御批には「格調高明、盧鴻屢ば徵さるれども起たず。故に、白の詩、爾か云ふ。末句、その當に召に應すべきを言ひ、伯起を以て之に期す、位置殊に高し」といつて居る。

上李邕

李邕に上る

大鵬一日同風起。

大鵬、一日風と同じく起ち、

【字解】(一) 大鵬、莊子に「鵬の南冥に徙るや、水擊つ、こと三千里、

扶搖直上九萬里。扶搖直に上る九萬里。

假令風歇時下來。たとひ、風歇んで、時に下り來るとも、

猶能簸却滄溟水。猶ほ能く簸却す滄溟の水。

時人見我恆殊調。時人、我が恆に調を殊にするを見、

見余大言皆冷笑。余が大言を見て皆冷笑す。

宣父猶能畏後生。宣父、猶ほ能く後生を畏る、

丈夫未可輕年少。丈夫、未だ年少を輕んずべからず。

【題義】舊唐書に「李邕は、廣陵江都の人、少にして、名を知らる。開元中、陳州刺史となる。十三年、玄宗、車駕東封して廻るや、邕、汴州に於て謁見し、累りに詞賦を獻じ、甚だ上の旨に稱ふ。これに由つて、頗る自ら矜衒す。張説、中書令となり、甚だ之を惡む。俄にして、陳州鹽汗の事發す。貶せられて、欽州遵化尉となり、累りに、括、淄、滑三州の刺史に轉じ、京師に上計す。邕、もとより美名を負うて、頻りに貶斥せらる。皆以へらく、邕、文を能くし、士を養ひ、賈生信陵の流と。執事、忌勝、剝落して外に在り、人間もとより聲稱あり。後進、京洛の阡陌を識らざるに、聚觀して、以て古人となす。或は傳ふ、眉目異ありと。衣冠風を望み、門巷を尋訪し、又中使臨問、その新文を索む、

扶搖に擡つて上るもの九萬里」とある。【三】扶搖 前に見ゆ、上行の風。【四】大言 莊子に「大言炎炎」とある。【五】宣父 唐書禮樂志に「貞觀十一年、詔して、孔子を尊んで宣父となす」とある。【六】長後生 論語に「後生畏るべし」とある。

復た人に陰せられ、竟に進むを得ず。天寶の初、汲郡、北海の二太守となる。かつて、左驍騎衛兵曹柳勣に馬一匹を與ふ。勣の獄に下るに及び、吉温、勣をして、邕の議及び休咎厚く相賂遣せしことを引かしむ、詞狀連引、敕して、郡に就いて之を決殺す。時に年七十餘」とある。蓋し、李邕は、骨鯁の性、誤つて累を爲し、延いて、末路の慘禍にも及んだ譯であるが、杜甫が李邕求識面といへるが如く、當時の大先輩、文界の保護者を以て目せられて居たので、この詩は、李白が其人に上つて、おのが抱負を述べたのである。

【詩意】大鵬は、一日、風と共に起ち、扶搖に擡つて、九萬里の高きに上り、たとひ、風が止んだ爲に、下つて來ても、垂天の雲の如き其翼を以て、大海の水を簸ひ起すのである。われも、これと同じく、進退出處、ともに世を驚かさむことを期して居る。然るに、世人は、變り者だといひ、予が大言を聞く毎に、唯だ冷笑を以て迎へるに過ぎぬ。こは、洵に間違つた話で、孔子でさへも、後世畏るべしといはれた位、苟くも、丈夫たる上は年少だからといつて、輕んじては成るまいが、貴下は、果して、予を如何に見られるか。

【餘論】蕭士資は「この篇、太白の作に非ざるに似たり」といつたが、その意象の淺薄なることは、斷じて争はれぬ。

贈張公洲革處士

張公洲の革處士に贈る

列子居鄭圃。不將衆庶分。

列子は鄭圃に居り、衆庶と分たす。

革侯遁南浦。常恐楚人聞。

革侯は南浦に遁れ、常に楚人の聞かむことを恐る。

抱甕灌秋蔬。心閑遊天雲。

甕を抱いて、秋蔬に灌し、心は閑なり、天に遊ぶの雲。

每將瓜田叟。耕種漢水濱。

毎に、瓜田の叟と、耕種す漢水の濱。

時登張公洲。入獸不亂羣。

時に張公洲に登り、獸に入るも、羣を亂さず。

井無桔槔事。門絕刺繡文。

井に桔槔の事なく、門には刺繡の文を絶つ。

長揖二千石。遠辭百里君。

二千石に長揖し、遠く百里の君に辭す。

斯爲眞隱者。吾黨慕清芬。

これを眞の隱者と爲す、吾が黨、清芬を慕ふ。

【字解】(一) 列子 列子に「子列子、鄭圃に居ること四十年、人、識るものなし、國君卿大夫、これを視る、猶ほ衆庶のごときなり」とある。(二) 革侯 侯は尊稱、君といふに同じ。(三) 南浦 張公洲は城の南に在るが故に云ふ。(四) 桔槔 莊子に「子貢、

南、楚に遊んで晉に反らむとし、漢陰を過ぎ、一丈人の方に將に圃畦を爲らむとすを見る。隱を鑿つて井に入り、甕を抱いて出で、灌ぐこと掎撥然たり、力を用ふること甚だ多くして、功を見ること寡し。子貢曰く、「ここに槓あり、一日に百畦を浸す。力を用ふる甚だ寡くして、功を見ること多し。夫子欲せざるかと。圃を爲るもの、仰いで之を視て曰く、奈何。曰く、木を鑿つて機となし、後

重く前輕し。水を挈ぐるごと、抽くが如し。數ばなること、過か決ぐが如し、その名を機と爲すと。圃を爲るもの笑つて曰く、吾、これを吾が師に聞く、機あるものは、必ず機事あり、機事あるものは、必ず機心あり、機心中に存すれば、純白備はらず、純白備はらざれば、神生定まらず、神生定まらざるものは、道の載せざるところなりと。吾知らざるに非ず、産ちて爲さざるなり」とある。機は即ち桔槔、はれ釣瓶。(五) 刺繡文 史記に「文を刺繡するは、市門に倚るに如かず」とある。(六) 二千石 太守。(七) 百里君 縣令をいふ。

【題義】楊齊賢は「張公洲は、上元縣に在り」といひ、王琦は「景定建康志、張公洲は城の西南五里に在り、周圍三里。湖廣通志、張公洲は、武昌府城の南二十里に在り、晉の隱士張公、圃に灌する處、因つて名づく」と。これ二張公洲あり、詩中に楚人といひ、漢水といふところを觀れば、これ武昌の張公洲を謂うて、上元に在るものに非ず」といつた。この詩は、建康城南の張公洲に住める處士革某に贈つたものである。革某の名字閱歷等は、例の通り分らぬ。

【詩意】むかし、列禦寇が鄭の圃に居た時、その徳高くして、能く俗と混同したから、丸で衆庶と區別がないやうであつた。今革君は南浦に隱遁し、楚人の聞き知らむことを恐れて居る。そこで、甕を抱いて、秋、菜畑に水を灌ぎ、心閑にして、天上を遊び廻る雲の如く、毎毎瓜を種うる老人と一處になつて、漢水の濱に耕種して居る。それから、時時、張公洲に登り、獸中に入るも、獸までが能く狎れて、羣を亂さない。その平生、機心を生せしめるといふので、井には、はね釣瓶を用ひず、又模機を刺繡し、金まうけをしやうといふので、市門に倚るといふやうなことは、決して、遣らない。かく

て、太守にも長揖し、縣令にも告別して、ひとり洲上に住んで居る。これこそ眞の隱者といふべきで、吾吾が、その芳ばしき名譽を慕ふ所以である。

李太白集 卷九

秋日鍊藥院鑷白髮贈元六兄林宗

秋日鍊藥院に白髮を鑷し元六兄林宗に贈る

木落識歲秋。瓶氷知天寒。木落ちて、歳の秋たるを識り、瓶氷つて、天の寒きを知る。

桂枝日已綠。拂雪凌雲端。桂枝日に已に綠に、雪を拂うて雲端を凌ぐ。

弱齡接光景。矯翼攀鴻鸞。弱齡、光景に接し、矯翼、鴻鸞を攀づ。

投分三十載。榮枯同所歎。投分三十載、榮枯、所歎を同じうす。

長吁望青雲。鑷白坐相看。長吁、青雲を望み、白を鑷して坐して相看る。

秋顔入曉鏡。壯髮凋危冠。秋顔、曉鏡に入り、壯髮、危冠を凋む。

窮與鮑生買。饑從漂母餐。窮して鮑生と買し、饑ゑ漂母に従つて餐す。

時來極天人。道在豈吟嘆。時來つて、天人を極め、道在り、豈に吟嘆せむや。

樂毅方適趙。蘇秦初說韓。樂毅、方に趙に適き、蘇秦、初めて韓に説く。

卷舒固在我。何事空摧殘。卷舒固より我に在り、何事ぞ空しく摧殘。

【字解】 一 木落風秋。この二句は淮南子の「一葉の落つるを見て、歳の將に暮れむとすることを知り、瓶中の水を觀て、天下

の寒を知る」に本づく。二 窮節 壯年。三 光景 風采に同じ。四 投分 分は分限、自己の分限を其人に投ずる、つまり其

逆の交を結ぶといふこと、潘岳の詩にも、投分寄三石女とあり、阮瑀が魏武の爲に劉備に與ふる書にも「情を披き、帯を解き、分に投じ

て意を寄す」とある。五 危冠 高い冠。六 窮與隨生買 史記に「管仲曰く、吾、始め困むとき、かつて鮑叔と買し、財利を分

つに、多く自ら與ふ。鮑叔、我を以て食れりと爲さず、我が貧なるを知ればなり」とある。七 饋從深母養 韓信の事、前に見ゆ。

八 樂毅方適趙 史記に「燕の昭王、齊を伐つる事を問ふ。樂毅對へて曰く、齊は霸國の餘業なり、地大に、人衆し、未だ獨り攻め

易からざるなり。王、必ず之を伐たむと欲すれば、趙及び楚魏と與にするに如くはなし」と。ここに於て、樂毅をして、趙の惠文王に

約せしめ、別に楚趙を連れしめ、趙をして、秦に囑はすに齊を伐つるの利を以てせしむ。諸侯、齊の滑王の驕暴を害とし、皆争つて合從し、

燕とともに齊を伐つ。燕の昭王、悉く兵を起し、樂毅をして上將軍たらしむ。趙の惠文王、相國の印を以て、樂毅に授く。樂毅、こ

こに於て、併せて趙楚韓魏燕の兵を護し、以て齊を伐ち、之を濟西に破る」とある。九 蘇秦初說韓 史記の蘇秦列傳に「その六

國を遊説するや、先づ燕の文侯に説き、二に趙の肅侯に説き、三に韓の宣惠王に説き、四に魏の襄王に説き、五に齊の宣王に説き、

六に楚の威王に説く」とある。樂毅蘇秦の事、ここでは功業未だ成就せざるの意に用ふ。

【題義】 鍊藥院といふのは、道觀の名であつて、その字の示す通り、道士輩が此處で長生延命の藥を

鍊るのである。その縁起等は、一切分らぬが、要するに、格別廣大な道院でもなく、又後には亡びて

仕舞つたものと見える。それから、元六兄林宗は、元林宗、排行は六に當る人で、矢張鍊藥院の道士

であらうと思はれるが、その閱歷等は、一切分らないので、これも大した人では無からう。そこで、この詩は、秋日、鍊藥院に於て、李白が白髮を鏡で抜き取りながら、その感懷を敘して、其處に居る道士の元林宗といふ人に贈つたのである。

【詩意】 木の葉がばらばらと落つるを見れば、今年も、すでに半を過ぎて、秋に成つたといふことが分るし、瓶中の水の氷れるを見れば、天、愈よ寒くして、すでに冬に成りかかつたといふことが知れる。今しも、世は秋の末で、追追寒い時節と成つた。秋の末といへば、人の死境に近いと同一で、何人も、此に對して、感慨を起さぬものは無からう。唯だ我が元林宗の如く道術に達した人は、桂枝が四時縁に茂り、積れる雪を拂つて雲端を凌ぐが如くである。人も、此域に到達しなければ、到底駄目なので、時節の變遷につれて、身體にまで申し分が出て來るやうでは、全く御話にも成らぬ。おのれも、年の若い時分から、仙道に志し、元六兄の風采に接し、始終その人に遇つて居たので、たとへば、翼を矯げて鴻鸞を攀づるが如く、元六兄の後から付いて參つて、その人と同一なる仙家の境涯に到達したいといふ願望を起した。かくて、一たび莫逆の交を結んでより、三十歳の久しい間に榮えるも、衰へるも、君と共にし、決して渝るまいと互に堅く誓つた。元六兄が超然獨立、桂枝の日に綠なるが如きに反し、自分は、さう行かないのを見ると、元と仙分に厚薄の別があるので、長吁して、天上の青雲を望み、おのが身を其處に致し得ざることを嘆嗟し、新に頭上に霜を置きたる白髮を

鑄で抜きながら、ここに元六兄に對坐して居るのである。げにや鏡は曉に寒くして、秋に衰へたる我が顔を寫し、高い冠の下には、潤みかかった髪の毛を藏して居るので、形容の枯槁するを見れば、我ながら、感慨に堪へぬ次第である。ここに、人間の事を考へると、かの管仲の如きも、貧しき時は、鮑叔牙と共に行商をして居たといふし、韓信の如きも、餓ゑた時には、漂母の贈つた一飯にどうやら腹を脹らしたといふ話。しかし、時、一たび至れば、管仲は、齊の桓公を輔けて、天晴霸業を成し、諸侯を九合し、天下を一匡し、韓信は、漢の高祖を扶けて、四百年の帝業を成就した。この二人は、幸にして、時が來た爲に、天人の際を極めて、自由自在に、その志ざすところを伸ばすことが出來たので、苟くも、道、ここに在り、つまり、今の境涯が必然的の過程であるとすれば、如何に窮迫したとて、決して深く吟嘆するには及ばぬことである。それから、樂毅は、燕の昭王の命を奉じ、趙に往つて之を説き、遂に諸侯の兵を聯合して、齊を討つたといふし、蘇秦は、合従の謀を實施する爲に、最初に、韓に往いて遊説し、韓王をして、秦に反抗せしめた。樂毅が趙に往つたのも、蘇秦が韓に説いたのも、彼等の志を遂げる上から云ふと、丁度、功業の手始であつた。おのれも、志ざすところの功業は、まだ實現せぬが、まさしく、端緒には就いて居るので、今しも道行の最中に居るのである。されば、之を放つて六合に彌り、之を巻いて密に退藏すといふ如き卷舒は、すべて、我が一心に在るので、我が一心が、この時、撓んで仕舞へば、それ切りで、何にも成らぬが、屈伸を

の宜しきを得、その時に随つて、道を施して行くならば、物の見事に、目的が遂げられるに相違ない。ここに、蕭颯たる秋の氣に感じて、白髪を鋪しつつ、無限の愁嘆を起したものの、考へて見れば、如何に難儀をしたとて、目的さへ確かりして居るならば、自ら挫けて落膽するにも及ばぬ譯である。【餘論】この詩の妙は、自奮して、愁嘆を掃ひ去るといふ其一邊に在るので、流石に、豪傑の天資が明かに窺はれる。乾隆御批に「懷抱を實境に寫し、縱逸を苦調に約す、即ち此以て、上、鮑謝に軼すべし。起句、これを淮南子に本づく、語意奇古」とある。

書情贈蔡舍人雄

情を書し蔡舍人雄に贈る

嘗高謝太傅。攜妓東山門。 かつて高しとす謝太傅、妓を攜ふ東山の門。

楚舞醉碧雲。吳歌斷清猿。 楚舞、碧雲に酔ひ、吳歌、清猿を斷つ。

暫因蒼生起。談笑安黎元。 暫く蒼生に因つて起り、談笑して黎元を安んず。

余亦愛此人。丹霄冀飛翻。 余も亦た此人を愛し、丹霄、飛翻を冀ふ。

遭逢聖明主。敢進興亡言。 聖明の主に遭逢し、敢て興亡の言を進めむや。

白璧竟何辜。青蠅遂成冤。 白璧、竟に何の辜ぞ、青蠅、遂に冤を成す。

一朝去京國。十載客梁園。
 一朝、京國を去り、十載、梁園に客たり。
 猛犬吠九關。殺人憤精魂。
 猛犬、九關に吠え、人を殺して、精魂を憤る。
 皇穹雪冤枉。白日開昏氛。
 皇穹、冤枉を雪ぎ、白日、昏氛を開く。
 太階得夔龍。桃李滿中原。
 太階、夔龍を得、桃李、中原に滿つ。
 倒海索明月。凌山採芳蓀。
 海を倒にして、明月を索め、山を凌いで、芳蓀を採る。
 媿無橫草功。虛負雨露恩。
 媿づ横草の功なくして、虚しく雨露の恩に負くを。
 跡謝雲臺閣。心隨天馬轅。
 跡は雲臺の閣に謝し、心は天馬の轅に隨ふ。
 夫子王佐才。而今復誰論。
 夫子、王佐の才、而今復た誰と論せむ。
 曾鷺振六翮。不日思騰鶩。
 曾鷺、六翮を振ひ、日ならずして騰鶩を思ふ。
 我縱五湖棹。烟濤恣崩奔。
 我、五湖に棹を縱ち、烟濤恣に崩奔。
 夢釣子陵湍。英風緬猶存。
 夢に子陵の湍に釣れば、英風緬として猶ほ存す。
 徒希客星隱。弱植不足援。
 徒に、客星の隱を希ひ、弱植援くに足らず。
 千里一迴首。萬里一長歌。
 千里、一たび首を廻らし、萬里一長歌。

黃鶴不復來。清風奈愁何。
 黃鶴、復た來らず、清風、愁を奈何。
 舟浮瀟湘月。山倒洞庭波。
 舟は、瀟湘の月に浮び、山は洞庭の波を倒す。
 投汨笑古人。臨濠得天和。
 汨に投じて、古人を笑ひ、濠に臨んで、天和を得たり。
 閑時田畝中。搔背牧鷄鵝。
 閑時、田畝の中、背を搔いて、鷄鵝を牧す。
 別離解相訪。應在武陵多。
 別離解く相訪はば、應に武陵に在ること多かるべし。

【字解】 【一】謝太傅 即ち謝安、世説に「謝安、東山に在つて妓を畜ふ、簡文曰く、安石、必ず出でむ、すでに人と樂を同じうす、人と樂を同じうせざるを得ず」とあつて、劉孝標の註に、宋の明帝の文章志に曰く、安、心を事外に縱にし、常節を疎略にし、毎に女妓を畜へ、搆持游肆」とある。 【二】暫因蒼生起 剛すでに數ば前に見ゆ。 【三】黎元 百姓に同じ。 【四】丹霄 大空に同じ。 【五】興亡言 興の字は安危の安の如く、唯だ添へたので、ここでは國を危うする様な邪説。 【六】白壁 青蠅 陳子昂の詩に青蠅一相點、白壁遂成宛とあるに本づく。 【七】梁園 梁地を指す。唐の汴州、後の開封府で、その地に漢の梁王の園があつた。李白は、天寶年中、梁に遊ぶこと、最も久しく、因つて毎に梁園といつて居たのである。 【八】猛犬 宋玉の九辯に「猛犬狺狺而迎吠、關梁閉而不通」とある。 【九】皇穹 皇天に同じ。 【一〇】昏氛 妖氛に同じ。 【一一】太階 即ち泰階、三台の相位を指す。 【一二】夔龍 堯の時の名臣。 【一三】橫草功 漢書終軍傳、軍無橫草之功の註に「言ふは、草中を行き、草をして偃臥せしむ」とある。即ち草がらを踏み開いて進行すること。 【一四】雲臺 玉海の五行志に「雲臺は、周家の造るところ、圖書・術籍・珍玩・寶性の藏するところ」とあるし、高誘の淮南子註に「臺高くして雲に際す、故に雲臺といふ」とある。この二句は、身、江湖に在るも、心、鶴園に在るといふと同義。 【一五】王佐才 帝王の輔佐、即ち宰相と爲るに足るの才器。 【一六】曾鷺 高風に同じ。 【一七】六翮 翮は鳥の勁羽、左右各六

あるが故に云ふ。【二〇】五湖棟 范蠡が吳亡びし後越王を辭し、輕舟に乗じて、五湖に浮びしこと、國語等に見ゆ。【二〇】子陵 嚴子陵の釣せし川瀬、後漢書の註に引ける顧野王之輿地志に「桐廬縣南、嚴子陵漁釣の處あり。今山邊に石あり、上平かにして、十人を坐せしむべし、水に臨む、名づけて嚴陵の釣壇と爲す」とある。【二一】編 遠く、はるか。【二二】客星 嚴子陵、光武と聞じく疑れ、客星御座を犯せしこと、前に見ゆ。【二三】窮植 志行薄弱にして樹立せざること。【二四】瀟湘、洞庭 皆前に見ゆ。【二五】湘 汨羅の略、屈原が石を擲いて自ら投ぜし處。【二六】臨濠 莊子に「莊子、惠子と濠梁の上に遊ぶ、莊子曰く、鯉魚出でて遊び、從容たり、これ魚樂むなり」とあり、通典に「濠州鍾離縣に濠水あり、即ち莊惠魚を觀るの處」とある。【二七】天和 莊子に「若し汝の形を正し、汝の視を一にすれば、天和將に至らむとす」とあるし、淮南子に「交、天和に被り、地德に食ふ」とある。【二八】武陵 即ち桃源。

【題義】この詩は、心に思ふことを述べて、中書舍人の蔡雄といふ人に贈つたのである。蔡雄は、如何なる人か、その人物閱歴等は、丸で分らないが、詩中に夫子王佐才とあるを見れば、相當の材器を備へた人であつたと見える。

【詩意】予は、かつて、古しへの謝安の人物を高しとし、偏に之を欽慕して居た。かの謝安は、妓を攜へて、東山の幽居に高臥し、その妓の楚舞する様は、天上の碧雲を醉はしむるに足るべく、その呉歌の妙なるは、清猿の聲明ぶと一般、かくて、歌舞を以て、歲月を送つて居たのだが、やがて、蒼生の爲に起ち、しばらく、廟堂の上に居て、宰相の重きに任じ、談笑して、百姓を安んじ、見事に、時局の艱難を救済したので、予は、謝安の出處進退を甚だ偉いとして居る。かくて、平生、この人を愛慕し、いつかは、自分も大空の上に向つて、飛揚を試み、心ゆくばかりの仕事をして見たいと思つて

居た處が、その願が叶つて、幸にも、聖明の人主に遭遇して、翰林に待詔することと成つた。もとより、自分は、國を亡ぼす様な邪説を進めたこともないが、特別の眷顧を受けた處から、遂に羣小に妬まれて、讒言せられ、見事なる無統の白壁も、青蠅に糞をひりかけられ、あたらし、けちを付けられ、無實の冤罪を蒙つて、一朝、長安の都を去ることとなり、取り敢へず、古しへの梁地に赴き、やがて、滯留して、十年の久しきに及んだ。おもへば、九重の君門には、猛犬が番をして居て、如何なる者でも、寄せ付けず、その精魂を怒らし、ひどく、氣が立つて居て、人さへ見れば、噛み殺すといふ程であるから、自分は、平生君の事を忘れぬが、如何にしても、宮門に近づくことが出来ないから、致方がない。幸にして、皇天が自分の境涯を憐み、冤罪を雪いで呉れたならば、白日高く上つて満目の妖氛を開くやうな想もするであらうが、さういふことは、何時實現するか、實はあての無いことであるから、甚だ心細い始末である。それから、夔龍にも比すべき天晴の名臣が、相位に登つたならば、門下の桃李が中原に満ち、人才は、各、その處を得るに相違なく、そのみならず、海を倒に翻しては、明月の影を尋ね、山を凌いで分け入つては、芳草を采ると同じく、野に遺賢なきやうに成ること疑なく、さうすれば、一旦放逐された自分も、どうやら復活することが出来やうが、これとても、現今の狀態では、殆んど望の無いことである。顧みれば、自分が君の傍に奉仕して居る間、草を踏み分けて、路を尋ねると云ふ様な特別の功績もなく、唯だ偏頗なく行き互る雨露の恩恵を受けたに過ぎず、もと

より、自分の材能は取るにも足らぬものであるが、中心の誠だけは、決して他人に劣らぬ積りなので、一たび、跡を雲臺の高閣から遠ざけても、心は、天馬の牽く轅に随つて、君の御傍を忘れず、片時たりとも、君の御身の上を忘れたことは無い。ここに、我が蔡夫子が天晴王佐の才略を備へて居られることは、今さら言ふまでもなく、かつて、天上の風に向つて、六翮を振つた位であるから、遠からずして、心ゆくばかり飛び上ることを得べく、今こそ、舍人の位に居るが、やがては、屹と宰相に成られるであらう。その時は、自分の刻下の境遇に同情を寄せて、随分骨を折つて貰ひたいものである。前述の如く、自分は、久しく梁地に居たが、頃ろ、彼の范蠡の跡を留めたる五湖に向つて棹を移し、煙れる霧の崩れかかるをも意とせず、扁舟の興を撞にして居る。かくて、夢に嚴子陵が綸を垂れたといふ桐廬の川瀬に臨んで釣し、その英風、千歳の下に儼存するを感じた。しかし、子陵は、客星となつて隠れむことを希望し、光武の如き聖明の人主を以て、志行薄弱、援くるに足らぬものと見切つて仕舞つたのは、如何なる故か、聊か腑に落ちぬ話である。かくて、自分は、天地の空濶なる間に立つて、或は首を廻らして都の方を顧み、或は長歌して胸中の鬱憤を散せむとし、しかも、仙人の乗れる黄鶴一たび去つて復た來らざると同じく、子陵と相見ること能はざるに至りては、江上の清風に對して、愈よ愁を添ふるばかりである。それから、愈よ南方に向つて長途の旅を続け、或は月夜瀟湘に舟を浮べ、或は洞庭湖中の波、さながら山を倒すが如きを望み、或は汨羅に投じて死せし古しへの屈原

の餘りに心狭きを笑ひ、或は濛濛に臨んで、魚の樂むを觀て、我が心の落ち付いた果は、謂はゆる天和を得た。そこで、處處流浪した後で、今は田畝の中に隠れて、閑寂を樂み、垢ついた衣を着て背を振きつつ、雞や鵝を伺つて、心のどかに暮らして居る。かくの如き現況を、君は如何に見られるか。かくて、愈よ世に用ひられぬとならば、仕方が無いから、古しへの仙人の跡を尋ねるだけで、君にして、別離の後、われを訪はむとならば、かの古しへの桃源の地たる武陵に御出でに成つたならば、御目に懸ることも出来やう。

【餘論】この詩は、聊か錯綜したやうに見えるが、實は、段落整然として居るので、はじめに、謝安を擔ぎ出して、自己が往日の升沈に及び、次に、嚴子陵を借ひ來りて、自己が刻下の游跡に及び、その間に、蔡舍人を點出し、そして、汲引の恵を垂れむことを囑望して居る。全體を通じて、卑下謙讓に過ぎぬ處が、即ち自己の地位を保つ所以である。

憶襄陽舊遊贈馬少府巨

襄陽の舊遊を憶ひ馬少府巨に贈る

昔爲大堤客。曾上山公樓。 　　ひかし、大堤の客となり、かつて上る、山公の樓。

開牕碧嶂滿。拂鏡滄江流。 　　牕を開けば、碧嶂滿ち、鏡を拂うて、滄江流る。

高冠佩雄劍、長揖韓荆州。
 此地別夫子、今來思舊遊。
 朱顏君未老、白髮我先秋。
 壯志恐蹉跎、功名若雲浮。
 歸心結遠夢、落日懸春愁。
 空思羊叔子、墮淚峴山頭。

【字解】(一) 大堤、襄陽城外に在る。(二) 山公樓、晉の山簡は襄陽の太守となつて居たので、山公樓は、その遺跡であるが今は其所在を失つた。(三) 碧峴、峴は山の高峻なるもの、増韻には「山峰屏障の如きもの」とある。(四) 韓荆州、名は朝宗、開元中、荆州の刺史となつて居た。李白は、之に謁見した時、長揖して拜を爲さなかつた。(五) 空思羊叔子、墮淚峴山頭、叔子は、羊祜の字。荆州圖記に「羊叔子、都荊南と嘗て峴山に登り、嘆じて曰く、宇宙あつてより、便ち此山あり。由来、賢達、ここに登つて遠望す、我と爾との如きもの多し。皆濯滅して聞こゆるなし。これを念へば、人をして悲傷せしむ。荆南曰く、公の徳、四海に冠たり、道、前哲に嗣ぐ、令同令望、必ず此山と俱に傳へむ。荆南輩の若きは、當に公の語の如くなるべきのみ、と。後、參佐、爲に碑を立てて、道、故の望處に著く。百姓行いて碑を望む毎に、悲感せざるなし。杜預、名づけて、墮淚の碑となす」とある。

【題義】この詩は、某處で馬巨といふ人に遇つた故に、彼が襄陽たる緣故に因り、其地に於ける舊遊を懐うて、この詩を贈つたのである。馬巨その人は、例の如く、よくは分らない。

【詩意】むかし、大堤の客となつて、君と共に、山公の樓に登つたことがある。窓を開けば、碧山相連つて眼中に入り、その前には、漢江の水が流れて居て、その澄み渡つて居ることは、さながら鏡を拭うた様である。この時に當り、われは、高冠を戴き、雄劍を佩び、かの一代の賢豪たる刺史の韓荆州に長揖し、その幕下で、君と遊んだのであるが、その後、君と別れ、そして、料らずも、ここに再會したるに因つて、舊遊を思ひ出した譯である。別後、すでに數年、君はなほ若若しく、朱顏未だ老いざるに拘はらず、われは、白髪すでに秋に入り、見らるる如き老人と成り果てて仕舞つた。かくて、折角の壯心も、次第に蹉跎して、衰へるやうに成り、功名富貴は、浮雲の如く、容易に手に取ることが出来ないといふことも分つたので、徒に故郷に歸りたいと思ふにつけて、遠夢を結び、又落日に對して、春愁を懸けるやうな次第である。むかし、晉の羊祜は、客と共に、峴山に登つて、歲月の人を相俟たざることを嘆息したが、自分も、今その通りで、頭を回らして、はるかに、彼の墮淚碑の事を思ふばかりである。

【餘論】乾隆御批に「落日懸春愁、自是是れ千古の舊句」とあるが、五字の中に、無限の暗愁を含み、そして、この句が前後の關鍵と成つて居るのである。

對雪獻從兄虞城宰

雪に對し、從兄虞城宰に獻す

對雪獻從兄虞城宰

昨夜梁園裏。弟寒兄不知。昨夜梁園の裏、弟は寒くして、兄は知らず。
庭前看玉樹。腸斷憶連枝。庭前に玉樹を看る、腸は断えて連枝を憶ふ。

【字解】【一】梁園。イでに前に見ゆ。【二】玉樹。雪中の樹。【三】連枝。蘇武の時に況我連枝樹、與子同三身とあるに本づく。兄弟の情に用ふ。

【題義】この詩は、自己の苦況を訴へたのである。自分は、清貧の地位に居るのに、從兄は、虞城の宰ともいはれる地方官に成つて、可なり得意である。そこで、雪が降つて非常に寒いにつけて、どうか、少し救つて貰ひたいといふ意味を述べたのである。

【詩意】この梁園には、自分も居れば、又お前さんも居る。しかし、昨夜、梁園の雪に臥した弟の寒さ加減を、恐らくは御存じはあるまい。曉に見れば、庭上の樹木は、雪の爲に、形を變へて、玉樹と化した。その玉樹を見るにつけて、自分は、連枝、即ち骨肉を憶ふの情に耐へぬ。それと同じく、お前さんも、必ず私の事を思つて、少しは何とかして下さるであらう。

【餘論】劉辰翁の評語に「その詩、首の二語、小夫賤隸、誰か道ふ能はざらむ。しかも、學士大夫、或は之を愧づ。古今甚深密義、往往淺易に於て之を得たり、藹然惻然、以て感動すべし」とあるが、いかにも尤もな事である。

訪道安陵遇蓋寰爲余造真籙臨別留贈

道を安陵に訪ひ、蓋寰に遇ふ、余が爲に真籙を造る、別に臨み留贈す

清水見白石。仙人識青童。清水、白石を見、仙人、青童を識る。

安陵蓋夫子。十歲與天通。安陵の蓋夫子、十歲、天と通す。

懸河與微言。談論安可窮。懸河と微言と、談論安んぞ窮むべけむや。

能令二千石。撫背驚神聰。能く二千石をして、背を撫して、神聰に驚かしむ。

揮毫贈新詩。高價掩山東。毫を揮つて、新詩を贈り、高價、山東を掩ふ。

至今平原客。感激慕清風。今に至つて、平原の客、感激して、清風を慕ふ。

學道北海仙。傳書藥珠宮。道を學ぶ北海の仙、書を傳ふ藥珠宮。

丹田了玉闕。白日思雲空。丹田、玉闕を了し、白日、雲空を思ふ。

爲我草真籙。天人慙妙工。我が爲に真籙を草し、天人、妙工に慙づ。

七元洞豁落。八角輝星虹。七元、豁落洞たり、八角、星虹を輝く。

三災蕩瓊璣。蛟龍翼微躬。三災、瓊璣を蕩し、蛟龍、微躬を翼く。

舉手謝天地。虛無齊始終。手を擧げて、天地に謝し、虛無、始終を齊しくす。
 黃金滿高堂。答荷難克充。黃金、高堂に滿つるも、答荷、克く充たし難し。
 下笑世上士。沈魂北羅鄴。下に笑ふ世上の士、魂を沈む北の羅鄴。
 昔日萬乘墳。今成一科蓬。昔日、萬乘の墳、今は一科の蓬と成る。
 贈言若可重。寶此輕華嵩。贈言若し重んずべくんば、此を寶として、華嵩を輕んせむ。

【字解】(一) 清水見白石。古語歌行に「清且勿盼、水清石自見」とあるに本づく。(二) 青童。即ち仙童、太平廣記に「漢の元壽二年八月己酉、南岳真人、赤君、西城王君、及び諸青童、並に王母に従つて茅盈の室に降る」とある。(三) 懸河。雄辯をいふ、晉書に「郭象、清言を能くす、太尉王衍、毎に云ふ、象の語を聽けば、懸河瀉水の注いで竭きざるが如し」とある。(四) 微言。漢書に「むかし、仲尼没して微言絶つ」とあり、顏師古の註に「精微要妙の言」とある。(五) 平原客。平原郡中の賓客。(六) 北海仙。北海の高天師如費を指す、李白は、齊州に於て、高天師から道録を授かつたが、それは、蓋寰が書いたのであつた。(七) 藥珠宮。上清、即ち天上に在る宮闈の名。(八) 丹田。脾下三寸の處を云ふ。(九) 玉關。腎中の白氣、上、肺と連る。(一〇) 七元。雷發七蔵に引ける太微黃書に「上經青真小童、これを名づけて、雷發七元といふ」とある、即ち有り難い道經の一種で、それに色色の名がある。(一一) 八角。隋書に「道經の者云ふ、元始天尊既くところの經、亦た元一の氣を稟け、自然にして、造爲するところに非ず、亦た天尊と常在不滅、天地變れざれば、龜んで傳ふるなし、劫運もし開かば、その文自ら見はる、凡そ八字、道體の奧を盡す、これを天書といふ、字方一丈、八角を垂れ、光輝照耀、心を驚かし、目を眩す、諸の天仙と雖も、省視する能はず」とある。(一二) 三災。禮儀經に「天地、三災の變あり、一は火災の變、二は水災の變、三は風災の變」とあり、又法苑珠林に「二十小劫の中間に、小三災あり、次第に輪轉す、一に疾疫の災、二に刀兵の災、三に飢饉の災」とある。(一三) 瑤瑤。北極星、この句は、斗神覆護、三災、害

を爲すこと能はずといふ意。(一四) 北羅鄴。漢語に「羅鄴山は、北方突地に在り、山の高さ二千六百里、周圍三萬里、その山下に洞天あり、山の中に在り、周圍一萬五千里、その上、その下、並に鬼神の宮室あり。山上に六洞あり、洞中に六宮あり、輒ち周圍千里、これを六天鬼神の宮と爲すなり」とあり、その註に「これ應に是れ北羅鬼王、罪人を決斷する住處なるべし。白帖に、羅鄴山の洞、周一萬五千里、名づけて北帝死生の天といふ、皆鬼神の治むるところ、考諸の府なり」とある。(一五) 一科。一むら。(一六) 華嵩。華山と嵩山と、ともに五岳に列したる名山。

【題義】安陵は、唐の時、河北道德州平原郡に屬して居た縣名である。真錄とは、隋書に「道經の者云ふ、その道を受くるの法、はじめに、五千文錄を受け、次に三洞錄を受け、次に洞支錄を受け、次に上清錄を受く。錄は皆素書、諸天曹官屬佐吏の名を紀すること、多少あり。又諸符あり、その間に錯在す。文章詭怪、世の識受せざるところの者。必ず先づ潔齋し、然る後に、金環一、并に諸幣幣を齋らし、以て師に見ゆ。師、その贊を受け、錄を以て之に授く。仍つて、その金環を刮き、各、その半を持し、云うて以て約を爲す、弟子錄を得、緘して之を佩ふ」とある。して見れば、御守札の様なもので、修行するにつれて、段段に尊いものを授けられるのである。李白は、安陵縣の道觀で、北海の高天師に従つて道術の修行をして、道録を授かつた時、兼ねて相知れる蓋寰といふ人が、矢張、道を學ぶが爲に、同じ觀に居て、その人が天師に命せられて、道録を書いて呉れた。そこで、李白は、別に臨み、この詩を蓋寰に贈つて、謝意を表したのである。

【詩意】水清ければ、白石が自然と見えると同じく、尊き仙人の間に立ち交つて居ればこそ、青童も

知れるのである。わが蓋夫子は、元と安陵の産に係り、年わづかに十歳にして、その神妙、天と通ずるを疑ふばかり、懸河の雄辯を以て、道の蘊奥を得たる玄妙の言辭を述べ、その談論は、決して窮り盡くることなく、二千石の刺史輩をして、背を撫でて、その聰慧に驚き、後世畏るべしといつて、舌を捲かした位。かくて、刺史は、筆を揮つて新詩を贈り、その天稟の非凡なることを世間に吹聴したから、聲價、一朝にして高く、忽ち山東の地を蔽ふ位。今に至るまで、平原郡中の幕客どもは、感激して、その高風を欽慕して居る。かくて、君は、次第に成長し、やがて、當時名高き北海の高天師に就いて、愈よ道術を修行することとなり、天上の藥宮に比すべき莊嚴なる道觀の中に於て、仙書を傳授せられたるに因り、天晴、道術の奥妙を極め、臍下三寸の丹田に白氣を藏し、白日の中に雲の棚引く大空を望んで、身を軽くして飛昇せむと思つて居る。それ程まで、道に達したる君が、我が爲に、眞録を書いて呉れたのは、まことに、有り難いことで、その筆の神妙なることは、天仙でさへも愧ぢ入る程で、崑崙七元とさへ稱する上經を寫し、その文字は、八閏から、星や虹の様な光芒を放つて居る。この眞録を身に付けて居れば、如何なる場合にも、御守りとなつて、災難を逃れるので、たとへば、北斗の星が擁護して、この世を破滅せしむる三災と雖も、害を爲すこと能はざると同じく、又蛟龍が此身を守つて居ると同様の效力を持つて居る。かくて、手を舉げて天地に謝し、行く行く、虛無の中に驅り入つて、無始無終なる宇宙の本體と同化する事も出来る。今次、君の恩惠は、まこと

に譬へやうもない位で、黄金を堂に滿たして贈つた處で、到底、十分に報いることは出来ない。願ひれば、世上の賤士は、道を修むることを知らないばかりに、一たび死すれば、その魂を北方なる羅酆の山に沈めて、地獄の呵責を受けねばならず、現に昔日萬乗の尊位に居た帝王でさへも、その墓は、決して長く存せず、今は一むらの蓬となつて、その跡は、全く荒廢して仕舞ふ。これを思ふにつけても、道術の玄妙も分かり、眞録を書いて呉れた君の御厚意も、斷じて、徒爾ならざるものである。そこで、古人贈言の義に倣ひ、この詩を賦して、君に差し上げる次第であるが、幸にして取るに足るべくんば、かの華嵩よりも重く、わが衷心の誠も、これで御分かりに成ることであらう。

【餘論】この詩は、内容が既に淺薄であるだけに、文字上に於ては、聊か技工を施した處があつても、格別の物ではなく、李白の作として、むしろ下位に居るものであらう。但だ前半の記述に因つて、蓋寰の夙慧を敍し、その人をして、九鼎大呂より重からしめたのは、その惠に報いる爲に、特に意を用ひたもので、先づ體を得たものとしても善からうと思はれる。

贈崔郎中宗之

崔郎中宗之に贈る

胡雁拂海翼。翱翔鳴素秋。
驚雲辭沙朔。飄蕩迷河洲。

胡雁、海を拂ふの翼、翱翔して、素秋に鳴く。
雲を驚かして沙朔を辭し、飄蕩、河洲に迷ふ。

有如飛蓬人。去逐萬里遊。飛蓬の如きの人あり、去つて逐ふ萬里の遊。
登高望浮雲。彷彿如舊邱。高きに登つて、浮雲を望めば、彷彿として、舊邱の如し。

日從海傍沒。水向天邊流。日は海傍より沒し、水は天邊に向つて流る。

長嘯倚孤劍。目極心悠悠。長嘯、孤劍に倚り、目極まつて心悠悠。

歲晏歸去來。富貴安可求。歲晏く、歸去來、富貴、安んぞ求むべけむや。

仲尼七十說。歷聘莫見收。仲尼、七十にして説くも、歷聘、收めらるるなし。

魯連逃千金。珪組豈可酬。魯連、千金を逃れ、珪組、豈に酬ゆべけむや。

時哉苟不會。草木爲我儔。時なる哉、苟くも會せず、草木我が儔たり。

希君同攜手。長往南山幽。希はくは、君、同じく手を攜へ、長く往かむ南山の幽なるに。

【字解】【一】素秋、梁の元帝書に「秋を素秋といふ」とある。素は白、秋は西に當つて、その色白きが故に云ふ。【二】沙朔、朔方沙漠の地。【三】飛蓬、よもぎの穂の風に散じて遠くに飛ぶこと、商子に「飛蓬、颶風に遇うて千里を行く」とある。【四】舊邱、舊里、即ち故郷。【五】歲晏、晏は晩、歳の盡きかゝること。【六】仲尼七十説、淮南子に「孔子、王道を行はむと欲し、東西南北、七十まで説くも、偶するところなし」とあり、論衡に「孔子、世に容れられず、周流遊説、七十餘國、未だ嘗て安きを得ず」とある。【七】魯連逃千金、すでに前に見ゆ。【八】珪組、珪は圭に同じ、有位者が證驗として持つもの。組は印の紐。つまり、印

綬といふに同じ。左思の詩に「晉葛仲連、談笑却秦軍、功成恥受賞、高節卓不羣、臨組不背綬、對珪寧肯分」とあるに本づく。

【題義】崔祐甫の齊昭公崔府君集の序に「公の嗣子宗之、學、古訓に通じ、詞は典冊に高く、才氣聲華、時に邁えて獨歩す、開元中に仕へて起居郎となり、再び尚書禮部員外郎となり、本司郎中に遷る。時文國禮、十年三たび入り、右司郎中に終る、年位充たず、海内嘆息す」とある、唐書には「崔宗之は、乃ち宰相日用の子、齊國公を襲封す。學を好んで、寬博、風檢あり、李白杜甫と文を以て相知る」とある。崔宗之は、李白と共に飲中八仙の中に列した人で、杜甫の歌に「宗之瀟洒美少年、舉觴白眼望青天、皎如玉樹臨風前」とある通り、もとより、李白の飲み仲間、且つ親友である處から、ある時、李白は、自己の不遇を述べて、その同情を促したのである。

【詩意】北方の胡地より飛び來る雁は、海を拂ふ様な翼を振ひ、天半に翔つて、涼しき秋に乗じて鳴き叫び、その聲に雲を驚かしつつ、やがて、朔方の沙漠を去つて南に向ひ、黄河の洲に下つて、處定めぬ身を啣ちつつ、知らぬ行衛に迷つて居る。かくの如く、淋しい折から、われは飛蓬の颶風を逐うて、遠く飛び去るが如く、去つて萬里の遊を試みて居る。かくて、高い山などに登つて、浮雲の棚引く空の果を望めば、あたりの有様は、彷彿として、わが故郷の如くである。しかし、日は西海より地平線下に沒し、水は天邊に向つて流れ、まことに、だだッ広い景色で、故郷は何處とも分らない。そこで、孤劍に倚つて長嘯し、目を極めて遠望すると、心悠悠として、郷愁は涯なき程である。自分は、す

でに老境に近づいたから、むしろ、故郷へ歸る方が善いので、富貴などは如何にして求められやう、到底望まないことである。むかし、孔子は七十に成るまで、諸侯に遊説し、随分招聘もされたが、遂に收用されることもなく、魯連は、高節を負うて、天晴な大功を立てても、印綬を受けることを屑しとしなかつた。幸にして、好き機会に遇へば、起つて、心ゆくばかりの大功も立てられるか、さうでなければ、草木と同じく朽ちはつるばかり、その位なら、然るべき處に隠れ住んだ方が善い。希はくは、君と同じく手を攜へて、幽邃なる南山に跡を收め、一たび去つて歸ることも無いやうにしたいものである。

【餘論】この詩は、李白の出世間的願望を述べ、崔宗之に向つて同行を勧めたので、これに因つて、宗之の人物も臆測することが出来る。

贈崔諮議

崔諮議に贈る

騏驎本天馬。素非伏櫪駒。

騏驎、本と天馬、素より伏櫪の駒に非ず。

長嘶向清風。倏忽凌九區。

長嘶して、清風に向ひ、倏忽、九區を凌ぐ。

何言西北至。却走東南隅。

何ぞ言はむ、西北より至り、却つて、東南の隅に走らむとは。

世道有翻覆。前期難豫圖。

世道に翻覆あり、前期豫め圖り難し。

希君一剪拂。猶可聘中衢。

希はくは、君、一たび剪拂せよ、猶ほ中衢を聘すべし。

【字解】(一) 騏驎 駿馬の名、種天子傳に「八駿に赤騏驎あり」と見えて居る。(二) 伏櫪 櫪は櫪の踏板。(三) 倏忽 疾急の貌。(四) 西北至 漢の武帝の時、麗は名馬を大宛から取つたので、即ち中央亞細亞の東境である。史記にも「はじめ、天子、書馬を發して云ふ、神馬、當に西北より來るべし」とあるし、庚肩吾の詩に「渥水出、駿駒、湘川實塵、來從西北道、去逐東南隅」とある。(五) 中衢 中道に同じ。

【題義】唐書百官志に「王府の官に諮議參軍事一人あり、正五品の上、評議議事を掌る」とあつて、今でいへば、皇族の家の事務官と見える。この詩は、諮議參軍の崔某に贈つて、その助力を乞うたのである。

【詩意】騏驎は、本と天馬であつて、槽櫪の間に伏在する尋常の馬の比ではない。そこで、清風に向つて、一たび長嘶すれば、倏忽の間に、この世界を驅け通す位、何も西北から來て、東南に走ると限つたものでない。われも、亦た天馬を以て自ら擬して居るが、如何せむ、世間の事は、翻覆して定まらず、前途は洵に豫期し難く、そこで、今や志と違つて閉口して居る。希はくは、君、わが爲に、途中の障礙物を拂ひ除いて下さい。さうすれば、聊か倦み疲れて居るものの、再び勢を鼓して、大道の真中を勢よく驅け通すことが出来るであらう。

【餘論】全篇が譬喩で、六義の謂はゆる比の體である。もとより、有りふれた落想ではあるが、なほ李白その人の志操人物が、此中に於て瞥見される。

贈昇州王使臣忠臣

昇州の王使臣忠臣に贈る

六代帝王國、三吳佳麗城。六代帝王の國、三吳佳麗の城。

賢人當重寄、天子借高名。賢人、重寄に當り、天子、高名を借す。

巨海一邊靜、長江萬里清。巨海、一邊靜に、長江、萬里清し。

應須救趙策、未肯棄侯嬴。應に趙を救ふの策を須ふべし、未だ肯て侯嬴を棄てず。

【字解】「六代帝王國」昇州は今の南京地方で、吳晉宋齊梁陳の都した處、東、海に極まり、西、長江を帯びて居る。【三吳】

胡三省の通鑑註に「漢、吳郡を置く。吳、吳郡を分つて吳興郡を置く。晉、又吳興、丹陽を分つて吳郡を置く。これを三吳と爲す。顧道元曰く、世、吳郡、吳興、會稽を謂つて三吳と爲す。杜佑曰く、晉宋の間、吳郡、吳興、丹陽を以て三吳と爲す」とある。【三佳麗城】謝朓の詩に江南佳麗地とあるに本づく。【重寄】重大なる寄託。【救趙策、侯嬴】ともに前に見ゆ。

【題義】昇州は、唐書地理志に「江南道昇州江寧郡、至德二載、潤州の江寧縣を以て置く。上元二年廢す」とあり、太平寰宇記に「安祿山の亂、肅宗、金陵は古しへより雄據の地、時に艱難に遭ひ、縣、これを統ぶべからざるを以て、因つて、昇州を置き、仍つて節制を加へ、實は鎮撫に資す。時方に艱

弊、力、興造し難し、舊縣字に因つて、以て州城と爲す。祿山平後、復た州を廢し、舊に依つて縣と爲す」とある。それから、詩中に賢人當重寄とあるを見れば、王忠臣といふ人は、節度使とも云ひさうな大官に居て、昇州の地を鎮撫して居たので、李白は、この詩を贈つて、その功績を稱揚し、且つ其擢用を依頼したのである。

【詩意】昇州の地は、むかし、吳・晉・宋・齊・梁・陳、六代の間の首都となり、三吳の中でも、風物殊に佳麗なる處である。ここに、我が王使君は、一方の重寄に當りて、この地を鎮撫することとなり、特に天子より節度使といふ様な高職の名義をさへ貸し與へられた。かくて、王使者の綏撫の力に因つて、江南一邊は、大海にも波を揚げぬやうに成り、萬里の長江も、水色澄み渡つて、ここでは全く騒亂を知らぬ位である。今しも、江北の地を眺めると、安祿山の亂、未だ收まらず、隨處に戰塵を捲いて居る位。王使君は、たとひ、自分の領分でなくとも、坐して中原の多難を見るに忍びず、やがて、信陵君が魏兵を以て趙を救つたと同じ様な策略を運らされることであらうが、その時は、侯嬴に比すべき、この李白を見棄てずに、參謀官として、必ず登用して下さることであらう。

【餘論】乾隆御批に「五六の語の如きは、乃ち重寄に負かざるが爲にす、末に侯嬴を以て自ら比し、意を救趙に寓す、蓋し天寶初亂の後に在るなり」とある。それから、この詩は、五言律であるが、まことに一氣呵成で、何處にも斧鑿の痕を留めず、その筆を切つて落し、少しも技巧を加へず、そして

自然の音に協つた處は、取りも直さず、李白その人擅場の絶技で、つまり、その天分の然らしむるところである。

贈別從甥高五

從甥高五に贈別す

魚目高太山。不如一瓊璠。
 賢甥即明月。聲價動天門。
 能成吾宅相。不減魏陽元。
 自顧寡籌略。功名安所存。
 五木思一擲。如繩繫窮猿。
 櫪中駿馬空。堂上醉人喧。
 黃金久已罄。爲報故交恩。
 聞君隴西行。使我清心魂。
 與爾共飄飄。雪天各飛翻。
 江水流或卷。此心難具論。

魚目、太山より高きも、一瓊璠に如かず。
 賢甥、即ち明月、聲價、天門を動かす。
 能く吾が宅相を成して、魏陽元に減せず。
 自ら顧るに、籌略寡く、功名安にか存すところ。
 五木、一擲を思ふ、繩の窮猿を繫ぐが如し。
 櫪中、駿馬空しく、堂上、醉人喧し。
 黃金久しく已に罄き、爲に報ず故交の恩。
 君が隴西の行を聞き、我をして、心魂を清ましむ。
 爾と共に、飄飄、雪天各、飛翻せむ。
 江水流れて或は巻く、此心具さに論じ難し。

貧家羞好客。語拙覺辭繁。

貧家、好客に羞づ、語、拙にして、辭の繁きを覺ゆ。

三朝空錯莫。對飯却慚寃。

三朝空しく錯莫、飯に對して却つて慚寃。

自笑我非夫。生事多契闊。

自ら笑ふ我は夫に非ず、生事多くは契闊。

積蓄萬古憤。向誰得開豁。

積蓄す萬古の憤、誰に向つて開豁を得む。

天地一浮雲。此身乃毫末。

天地一浮雲、この身乃ち毫末。

忽見無端倪。太虛可包括。

忽ち見る、端倪なく、太虛、包括すべきを。

去去何足道。臨歧空復愁。

去去何ぞ道ふに足らむ、岐に臨んで空しく復た愁ふ。

肝膽不楚越。山河亦衾裯。

肝膽、楚越ならず、山河亦た衾裯。

雲龍若相從。明主會見收。

雲龍、若し相從はば、明主會す收められむ。

成功解相訪。溪水桃花流。

成功、解く相訪はば、溪水、桃花流れむ。

【字解】(一)魚目、魚の目、睛の珠に似たるを云ふ、前に魏陽元に見ゆ。(二)瓊璠、既文に「瓊璠は、魯の寶玉。孔子曰く、美なるかな瓊璠、遠くして之を望めば美若たり、近くして之を望めば惡若たり」とある。(三)明月、即ち明月珠、一に夜光の珠、いふ、亦た前に見ゆ。(四)魏陽元、晉書に「魏舒、字は陽元、少にして孤、外家郭氏に養はる。郭氏、宅を起す。宅を相するもの曰く、當に貴甥を出すべし、舒曰く、當に外祖の爲にこの宅相を爲すべし」とある。(五)五木思一擲、世説に「桓宣武、袁彦道と博蒲す、

實産道合はず、遂に色を厲しくして擲ち去る」とある。五木は元革五木經に「擲蒲は、古しへの戲、その投に五あり、故に白呼んで五木となす、木を以て之を爲る、因つて、之を木といふ。今は牙角を以てするは、飾を尙ふるなり。演繁露に、古しへは惟だ木を斷つて子となし、一具凡そ五子、故に五木と名づく。後世、轉じて石を用ひ、玉を用ひ、象を用ひ、骨を用ふ。故に、列子これを投擲といひ、律文、これを出政といふ」とあつて、つまり博奕の具、こまが五つ、はじめ木で造つたから、五木と稱したのである。【七】窮。世説に「窮蹙林に奔る、豈に木を擲ぶに暇あらむや」とある。【七】隴西。郡名、通典に「涇州、禹貢に曰く、涇を導き、鳥鼠同穴よりすと。即ち其地なり。春秋には羌戎の居たり。秦、隴西郡を置く、隴坻の西に居るを以て名と爲す。唐には涇州たり、亦た之を隴西郡といひ、襄武、隴西、涇源、障の四縣を領す」とある。【八】三朝。班固東都賦に春王三朝とあつて、韋懷太子の註には「三朝は元日なり、歳の朝、月の朝、日の朝を謂ふ」とあり、李善の註にも「三朝は歳首朔日なり」とある。しかし、こののは、三日といふ義で、これとは異なつてゐる。【九】錯莫。心通てて落ち付かぬこと。【一〇】非夫。丈夫に非ずといふ義。【一一】契聞。動苦の義。【一二】開當。さつぱりと開く。【一三】毫末。毛の先端、極めて微細なることの喩。【一四】端倪。物の限界。【一五】塵埃。路の分枝點に墮む、即ち別を爲すこと。【一六】肝膽不楚越。莊子に「その異なるものより之を視れば、肝膽も楚越なり。その同じきものより見れば、萬物皆一なり」とあるに本づく。【一七】金網。金網に同じ。被、即ち夜具と牀帳。【一八】雲龍。前に見ゆ。【一九】漢水桃花。武陵桃源の事、數ば前に見ゆ。

【題義】この首は、從甥の高五といふものが隴西に赴くに就いて贈つたので、從甥といへば、從姉妹の子と見える。その人、姓は高、排行は第五、名字閱歷等は一切分らぬが、詩中言ふところに據れば、相當の人物で、李白の縁者たるに愧ぢぬ者であつたらしい。

【詩意】たとひ、魚の目球を聚めて、泰山の高さを積み上げた處で、下らぬものは、數ばかり多くても仕方がないから、矢張、美玉と稱する璵璠の唯だ一個にも及ばない。今の滔滔たる天下は、皆魚

目同様な詰らぬ人物ばかりであるのに、賢甥のみは、夜光の珠にも比すべく、即ち真正の美玉であつて、その評判は、九重の天門をも動かした位。むかし、魏陽元といふ人は、寧氏の甥で、宅を相するものに貴甥だといはれたが、汝も亦た其通りで、わが李氏の宅相を成すこと、さながら魏陽元の如く、つまり、わが家も汝を得て、愈よ重きを加へるやうなものである。しかるに、汝の叔父である、この李白は、策略に乏しきことは自分でも承知して居る通りで、從つて、上手に世間の人に取り入ることが出来ぬ處から、功名をも成し得ず、博奕を爲すに際し、僥倖の勝を得やうとしても、さううまくは行かず、愈よ駄目と見切つて、五木の駒を一擲して起つと同じく、早や此世を思ひ切つたものの、窮猿が繩で縛られた如く、とても、自由に立ち振舞ふことが出来ないといふやうな、見じめな境涯に居るのである。されば、中に居た等の駿馬も、いつしか賣り拂つて、厩は空になり、高堂の上には居候の醉漢が、くどくどしく、譯の分らぬことを喋舌つて居るだけである。これといふのも、故交の恩に報いむが爲に、折角持つて居た黄金を用ひ盡したからで、今では生活にも苦む位、専ら汝の力を待つて居たのである。然るに、今回汝が隴西に往くといふことを聞いて、われは非常に心魂を驚かしめた。おもへば、我とても、矢張旅食して岑寂に甘んじて居る身で、汝と共に、行衛も知れず、飄飄して雪の空の果を望んで鳥が飛び起つやうなものである。滔滔たる江水も、わが恨を知つて居るやうに、時には逆流して嗚咽し、わが心中の愁は、とても言葉を以て言ひ盡すことが出来ない。さなきだに、

貧家に於ては、食客などに對しても、十分の待遇の出來ぬ處から、しきりに愧かしく、おまけに、口不調法であるから、心に思ふことも述べ盡さず、唯だ前後も揃はずに管管しく喋舌るだけである。かくて、三日の間、何とはなしに、そわそわして居て、食事の時には、碌なものも無いので、客に對する禮を失つたやうな感じがして堪らなかつた。しかし、そんな事にくよくよして居るのは、大丈夫の事に非ずといふので、自ら我が身の拙きを笑ひ、何分世わたりの仕事が出来たか、勤苦の甚しきに堪へず、かう成るのも無理もない事とは思ふものの、胸中には、萬古の憤を積み蓄へ、平生もやもやとして、鬱悶の念は誰に向つて、豁然と開き盡すことが出来やうか。おもへば、天地の大なるも、一浮雲に等しく、その身は、毫末の眇たる微物に過ぎぬが、修養の結果、道てふものを體得すれば、宇宙の邊際なきを觀じ、太虚の廣漠なるも、方寸の心の中に包括することが出来るので、人には、道を悟るといふことが、第一に必要である。されば、今日遠い旅路に上る位な事は、もとより論ずるに足らぬことで、別に臨んで愁に堪へぬといふも、畢竟詰らぬことである。すでに、萬物は皆一つ處から出たもので、根本に於ては同一であるといふ以上は、肝膽も亦た楚越の如くならず、山河も亦た雲霧と一般である。心のどかに待つて居る間には、いづれ、然るべき時機にめぐり合ひ、たとへば、雲の龍に従ひ、風の虎に隨ふが如く、一たび明主に遭遇すれば、乾度收用せられ、はては、美官にも上つて、心ゆくばかりの仕事が成すことが出来やう。かくて、一かどの功名を立てて後、われを忘れ

ずして、相訪はむとならば、桃の花咲き匂ひ、一道の清溪、徐に流るる彼の桃源の様な處に於てすべく、つまり、われは汝より先に、其處へ往つて、汝の來るを待つて居るであらう。

【餘論】この篇は、はじめに、甥の身の上を敘し、次に別離より自己の境遇に及び、平生修養を怠らず、道を體得することが必要であるといつて、彼の失意を慰め、且つ之を勵ましたので、情誼あくまで懇篤、人をして成程と領かしめる。乾隆御批には「首に贈意を道ひ、繼いで別情を敘し、白は蓋し高と最も厚善なるもの、自笑我非、夫の一段、心胸を開豁し、遐邇曠覽、沈鬱頓挫、意、杜陵に近し。これより一氣雙收、聲情倍す振ふ。後幅の雄健なからしめば、氣味衰颯たらむ、大家の風格、かくの如し」といつて居る。

贈裴司馬

裴司馬に贈る

翡翠黃金縷。綉成歌舞衣。

翡翠黃金の縷、綉して歌舞の衣を成す。

若無雲間月。誰可比光輝。

若し雲間の月なくんば、誰か光輝を比すべき。

秀色一如此。多爲衆女譏。

秀色一に此の如く、多く衆女に譏らる。

君恩移昔愛。失寵秋風歸。

君恩、昔愛を移し、寵を失うて秋風に歸る。

愁苦不窺鄰。泣上流黃機。愁苦、鄰を窺はず、泣いて上る流黃の機。
 天寒素手冷。夜長燭復微。天寒くして素手冷に、夜長くして燭復た微なり。
 十日不滿匹。鬢蓬亂若絲。十日匹に満たず、鬢蓬亂れて絲の若し。
 猶是可憐人。容華世中稀。猶ほ是れ可憐の人、容華、世中に稀なり。
 向君發皓齒。顧我莫相違。君に向つて皓齒を發す、我を顧みて相違ふ莫れ。

【字解】【一】翡翠黃金機。翡翠は綠色、黃金は黃色、つまり青黃二色の絲。【二】秀色。美色に同じ。【三】昔愛。昔日の恩愛。
 【四】不窺鄰。閉居して少しも外へ出ぬこと。【五】流黃機。黄色の絹を織る機。【六】素手。白い手。【七】不滿匹。一反とまと
 まらぬ。【八】容華。容色に同じ。【九】發皓齒。白い齒を顯はす。即ち口を開いて笑ふこと。【一〇】莫相違。わが期待に背かぬ
 様にして貰いたい。

【題義】唐書百官志に據れば、刺史の僚佐、司馬一人あり、位、別駕長史の下に在り、上州は從五品
 下、中州は從五品下、下州は正六品上とある。この詩は、李白が某州の司馬裴某に贈つて、例の如
 く、自己の不遇を訴へたのである。

【詩意】翡翠や黄金の色を爲せる絲縷を以て繡せる衣を着けて、歌舞を爲し、その容貌、亦た絶美、
 唯だ雲間にほのめく月のみが、光彩を比することが出来るといふ一美人がある。美人の絶色、かくの
 如く、従つて、その宮中に在るや、多くの女伴どもに譏られて、さまざまに讒言された揚句には、君王

當日の恩愛も、いつしか他に移り、やがて、寵を失つて仕舞つたので、秋風の淋しい頃、すごすご
 と家に歸つて來た。しかし、心中に愁へ悶え、終日垂れこめて、鄰家をも伺はず、流黃を織る機に上
 り、泣きながら、梭を投げて、せつせと仕事をして居る。頃しも秋の末、天漸く寒くして、手の冷か
 なるを覺え、夜は長くして、燈火も次第に消えかかる。かくて、十日たつても、まだ一反も仕上げず、
 朝夕妝を理むることなきを以て、ぼうぼうとした鬢は、絲の如く亂れて居る。かくの如く零落して
 居ても、矢張可憐な女で、その容貌は、相變らず、世間に類も稀である。われも、亦た此美人の如く、
 一たび君王の眷遇を獲たが、やがて、衆人に妬まれて放逐せられ、淪落の否運に苦んで居るものの、
 その天資は、依然として變じない。されば、美人が口を開いて嫣然一笑するが如く、ここに君に對し、
 おのが身の不幸を訴へて、汲引の恵を望むのであるから、君も心して之を聞き、わが期待に負かぬや
 うにして貰ひたい。

【餘論】この詩も、全篇が譬喩で出來て居て、即ち比の體である。そして、究極の著想は、結二句に
 在るので、くだくだしく述べずして、哀訴の意を寓した處が、極めて面白い。

敘舊贈江陽宰陸調

舊を敘して江陽の宰陸調に贈る

太伯讓天下。仲雍揚波濤。

太伯は天下を讓り、仲雍は波濤を揚ぐ。

清風蕩萬古。跡與星辰高。
 開吳食東溟。陸氏世英髦。
 多君秉古節。嶽立冠人曹。
 風流少年時。京洛事遊敖。
 腰間延陵劍。玉帶明珠袍。
 我昔鬪雞徒。連延五陵豪。
 邀遮相組織。呵嚇來煎熬。
 君開萬叢人。鞍馬皆辟易。
 告急清憲臺。脫余北門厄。
 問宰江陽邑。剪棘樹蘭房。
 城門何肅穆。五月飛秋霜。
 好鳥集珍木。高才列華堂。
 時從府中歸。絲管儼成行。

清風、萬古を蕩かし、跡は星辰と高し。
 吳を開いて、東溟に食み、陸氏、世、英髦。
 多とす、君が古節を秉り、嶽立して人曹に冠たるを。
 風流少年の時、京洛、遊敖を事とす。
 腰間延陵の劍、玉帶、珠袍に明かなり。
 我、むかし、鬪雞の徒、連延す五陵の豪。
 邀遮して、相組織し、呵嚇、來つて煎熬。
 君は萬叢の人を開き、鞍馬皆辟易。
 急を清憲臺に告げ、余を北門の厄より脱す。
 このごろ、江陽の邑に宰とし、棘を剪つて蘭房を樹う。
 城門、何ぞ肅穆たる、五月、秋霜を飛ばす。
 好鳥、珍木に集まり、高才、華堂に列す。
 時に府中より歸り、絲管儼として行を成す。

但苦隔遠道。無由共銜觴。
 江北荷花開。江南楊梅鮮。
 挂席候海色。乘風下長川。
 多沾新豐醪。滿載剡溪船。
 中途不遇人。直到爾門前。
 大笑同一醉。取樂平生年。

但だ苦む、遠道を隔て、共に觴を銜むに由なきを。
 江北、荷花開き、江南、楊梅鮮なり。
 席を掛けて海色を候し、風に乗じて長川を下る。
 多く新豐の醪を沾ひ、滿載す剡溪の船。
 中途、人に遇はず、直到爾の門前に到る。
 大笑同じく一醉、樂を取る平生の年。

【字解】 太伯、仲雍、漢書に「周の太王の長子太伯、次を仲雍といひ、次を公季といふ。公季、聖子昌あり。太王、國を傳へむと欲す。太伯、仲雍、辭し行いて、藥を採り、遂に荆蠻に奔り、公季、位を嗣ぎ、昌に至つて、西伯となり、命を受けて王たり。故に孔子美して稱して曰く、太伯は至徳といふべきのみ、三たび天下を以て讓る、民、得て稱するなしと。太伯、はじめ荆蠻に走る、荆蠻、これに歸し、號して勾吳といふ。太伯卒し、仲雍立つ、曾孫周章に至り、武王、殷に克ち、因つて之を封す」とある。【一】清風、陸機の詩に太伯導仁風、仲雍揚其波」とあり、晉書に「清風を萬古に激し、薄俗を當年に厲ます」とある。【二】英髦、髦は長毛餘出の義に取る。【三】古節、古人高尚の節。【四】嶽立、巍然として獨立する。【五】京洛、長安と洛陽。【六】延陵劍、新序に「延陵の季子、將に、西、晉に聘せむとし、寶劍を佩び、以て徐君を過ぐ」とある。【七】鬪雞五陵、前に見ゆ。【八】邀遮、迎へ遮る、待ち伏せをする。【九】組織、争を仕組む、わざと喧嘩を吹きかける。【一〇】呵嚇、叱りおどかす。【一一】煎熬、勢銳く逼り来る。【一二】萬叢人、多數の人の羣るをいふ。【一三】清憲臺、漢官儀に「御史を憲臺と爲す」とある、清は添へて形容したのである。【一四】北門、諸家の註に見えぬが、長安の北門で、その場所を點出ただけであらう。【一五】宰、縣令となる。【一六】剪棘樹蘭房、

韓は小人、蘭は君子に譬ふ。【一八】楊梅、やま桃、張揖上林賦の註に「楊梅、その實、穀子に似て、核あり、その味酸、江南に出づ」とあり、齊民要術に「楊梅、臨海異物志に云ふ、その子、大さ彈丸の如く、正赤、五月熟す、梅に似て、味甜酸」とある。【二〇】沽酒を買ふ。【二〇】新豐、前に見ゆ。【二一】醜美酒。【二二】刺溪、前に見ゆ。

【題義】この詩は、李白が江陽の縣令たる陸調に向つて、往年世話に成つたことを謝し、その後、久しく御目にかからぬから、其内是非逢ひたいものだといつて、相思の意を寄せたので、江陽は、唐時淮南道揚州の屬縣である。

【詩意】むかし、太伯は、周の太王の長子であつて、その父の意志を尊重して天下を弟に譲り、遠く荆蠻に逃れ、次弟の仲雍も、其波を揚げ、兄の通にして、一所に逃れて來たので、その高風は、萬世を震盪すべく、その事跡の高遠なることは、さながら、星辰の天に懸るが如くである。この太伯・仲雍の落ち付いた處が、今の吳で、やがて、その地に封せられ、仍つて、ここを開拓して、東海の邊に於て封土を守つて居た。陸氏、即ち君の一家は、先祖から其地の歴歴であつて、中にも、君は、古人高尙の節を持し、巍然獨立して、多くの人の上に抜き出て居た。かくて、少年の時は、風流を縦にし、長安洛陽等の名都に遊び、腰間には、むかし、延陵の季子の持つて居た様な見事な寶劍を佩び、玉帶は、珠袍に映じ、まことに目ざましく、綺羅びやかなる扮装であつた。われも、昔は關雎の徒に混つて、游侠を專にして居たが、いつしか五陵の豪貴子弟輩と衝突し、彼等は、待ち伏せをして、喧嘩を仕組み、叱つたり嚇したりして、勢ひ鋭く通り來つた處が、何分多勢に敵し兼ね、あはや、ひどい目に遇ひかかつて、大に苦んだことがある。その時、君は、人垣を造れる多くの見物を推し開いて、其場へ跳り入ると、鞍馬いかめしき五陵の子弟輩も、その勢に氣を呑まれ、辟易して、蜘蛛の子を散らすが如く、逃げ去つて仕舞つた。かくて、其儘には濟まされぬといふので、態態御史臺に訴へ出で、一切の跡始末をして、予を北門の厄より脱せしめたので、その恩義は、今以て忘れぬところである。聞けば、この頃、君は江陽の縣令となり、その快手腕を揮つて、至治を布き、荆棘に比すべき小人どもを剪り除き、芝蘭に譬ふべき君子輩を取り立て、一境の内が、まことに善く治まつた。そこで、城門の内、肅然として、締まりが付き、縣令の威は、五月の暑い時分にも秋霜を飛ばさむばかり、まことに凜凜たるものである。しかし、さう厳しくするばかりでなく、たとへば、好鳥が珍木に止まると同じく、幾多高才の士は、君を慕うて來り集まり、皆華堂の上に坐し、まことに賑はしい。そこで、君は役所から歸つて來ると、これ等の人を相手に酒宴を爲し、絲竹の列を爲せる間に笑ひさざめいて居るとのことである。君の噂を聞くこと、此の如くであるが、何分にも、遠路を隔てて居るから、一堂の上に相會して、共に杯を衝むことが出來ず、まことに遺憾の至である。今しも、夏の半、氣候の一番善い時で、江北では蓮の花が咲きかかち、江南では山桃の實が熟しかかつた時分である。そこで、むしろ帆を張つて、海の模様を窺ひ、風の便を窺つて、長江を下り、やがて君を訪問したいと思

喧嘩を仕組み、叱つたり嚇したりして、勢ひ鋭く通り來つた處が、何分多勢に敵し兼ね、あはや、ひどい目に遇ひかかつて、大に苦んだことがある。その時、君は、人垣を造れる多くの見物を推し開いて、其場へ跳り入ると、鞍馬いかめしき五陵の子弟輩も、その勢に氣を呑まれ、辟易して、蜘蛛の子を散らすが如く、逃げ去つて仕舞つた。かくて、其儘には濟まされぬといふので、態態御史臺に訴へ出で、一切の跡始末をして、予を北門の厄より脱せしめたので、その恩義は、今以て忘れぬところである。聞けば、この頃、君は江陽の縣令となり、その快手腕を揮つて、至治を布き、荆棘に比すべき小人どもを剪り除き、芝蘭に譬ふべき君子輩を取り立て、一境の内が、まことに善く治まつた。そこで、城門の内、肅然として、締まりが付き、縣令の威は、五月の暑い時分にも秋霜を飛ばさむばかり、まことに凜凜たるものである。しかし、さう厳しくするばかりでなく、たとへば、好鳥が珍木に止まると同じく、幾多高才の士は、君を慕うて來り集まり、皆華堂の上に坐し、まことに賑はしい。そこで、君は役所から歸つて來ると、これ等の人を相手に酒宴を爲し、絲竹の列を爲せる間に笑ひさざめいて居るとのことである。君の噂を聞くこと、此の如くであるが、何分にも、遠路を隔てて居るから、一堂の上に相會して、共に杯を衝むことが出來ず、まことに遺憾の至である。今しも、夏の半、氣候の一番善い時で、江北では蓮の花が咲きかかち、江南では山桃の實が熟しかかつた時分である。そこで、むしろ帆を張つて、海の模様を窺ひ、風の便を窺つて、長江を下り、やがて君を訪問したいと思

ふ。その時は、世にも名高き新豊の美酒を澤山に買ひこみ、王子猷の訪戴に比すべき我が船に、すつかり之を積み載せ、どこへも立ち寄らず、誰にも遇はぬ様にして、直に貴公の門前に至り、そして、一別以來の久闊を敘し、大笑して、共に酔ひ、むかしの儘の快樂を極めたいものである。

【餘論】この詩の記述に因つて、李白が長安に居た時、游侠少年輩と相争つて、あはや大事に及ぼうとしたことも分るので、どういふ事か、その詳細は知らぬが、兎に角、例の豪侠が其累を爲したものであらう。そして、陸調の盡力も、さこそと思はれ、その相思相望の情の甚だ感歎なるも、成程と頷かれる。一本には、腰間延陵劍より剪棘樹三闌房に至るまで、十二句を左の三十句に作つてある。

驂驪紅陽燕。玉劍明三珠袍。一諾許他人。千金雙錯刀。滿堂青雲士。望美期三丹霄。我昔北門厄。摧如三枝蒿。有虎挾雞徒。連延五陵豪。邀遮來組織。呵嚇相煎熬。君披萬人叢。脱我如三狴牢。此恥竟未刷。且食綏山桃。非天雨文章。所祖託風騷。蒼蓬老壯髮。長策未逢遭。別君幾何時。君無相思否。鳴琴坐高樓。淥水淨窓牖。政成閒雅頌。人吏皆拱手。投刃有餘地。廻車攝江陽。錯雜非易理。先威挫豪強。これは、無論、初稿であつて、現存する改作の方が、簡明切實で、はるかに面白い。

贈從孫義興宰銘

從孫義興の宰銘に贈る

天子思茂宰。天枝得英才。

天子、茂宰を思ひ、天枝、英才を得たり。

朗然清秋月。獨出映吳臺。

朗然たる清秋の月、獨り出でて吳臺に映す。

落筆生綺繡。操刀振風雷。

筆を落せば綺繡を生じ、刀を操れば風雷を振ふ。

夔屈雖百里。鵬鷺望三台。

夔屈、百里と雖も、鵬鷺、三台を望む。

退食無外事。琴堂向山開。

退食、外事なく、琴堂、山に向つて開く。

綠水寂以閒。白雲有時來。

綠水、寂以て閒、白雲、時あつて來る。

河陽富奇藻。彭澤縱名杯。

河陽、奇藻に富み、彭澤、名を縱にするの杯。

所恨不見之。猶如仰昭回。

恨むところは之を見ず、猶ほ昭回を仰ぐが如し。

元惡皆滔天。疲人散幽草。

元惡、皆滔天、疲人、幽草に散す。

驚川無活鱗。舉邑罕遺老。

驚川に活鱗なく、舉邑、遺老罕なり。

誓雪會稽恥。將奔宛陵道。

會稽の恥を雪がむことを誓ひ、將に宛陵の道に奔らむとす。

亞相素所重。投刃應桑林。

亞相、素より重んずるところ、刃を投じて桑林に應ず。

獨坐傷激揚。神融一開襟。

獨坐、激揚を傷み、神融して一たび襟を開く。

絃歌欣再理。和樂醉人心。絃歌、再び理するを欣び、和樂、人心を醉はしむ。

蠹政除害馬。傾巢有歸禽。蠹政、害馬を除き、傾巢、歸禽あり。

壺漿候君來。聚舞共謳吟。壺漿、君の來るを候し、聚舞共に謳吟。

農夫棄蓑笠。蠶女墮纓簪。農夫、蓑笠を棄て、蠶女、纓簪を墮す。

歡笑相拜賀。則知惠愛深。歡笑、相拜賀す、則ち知る惠愛の深きを。

歷職吾所聞。稱賢爾爲最。歷職、吾が聞くところ、賢と稱する、爾を最と爲す。

化洽一邦上。名馳三江外。化は洽ねし一邦の上、名は馳す三江の外。

峻節貫雲霄。通方堪遠大。峻節、雲霄を貫き、通方、遠大に堪へたり。

能文變風俗。好客留軒蓋。文を能くして風俗を變じ、客を好んで軒蓋を留む。

他日一來遊。因之嚴光瀨。他日一たび來遊すれば、之に因らむ嚴光の瀨。

【字解】 【一】茂宰、すぐれたる材能。 【二】天枝、王僧孺の文に「天枝峻密、帝葉英芬」とあるを用ふ。天子の連枝、李白の一家は、唐室と同系であるが故に云ふ。 【三】三台、三公の位、晉書に「三台六星、兩兩として居り、文昌に起り、列して太微に振る。」

一に曰く天柱、三公の位なり、人に在つては三公といひ、天に在つては三台といふ、開德宣符を主るなり。西、文昌に近き二星を上台といふ。司命たり、壽を主る。次の二星を中台といふ、司中たり、宗室を主る。東の二星を下台といふ、司諫たり、兵を主る。總を

昭かにし、遠を蓋ぐ所以なり」とある。 【四】退食、朝廷もしくは公堂より退出すること。 【五】琴堂、楊齊賢の説に「宓子賤、單父の宰となり、琴を弾じ堂を下らずして單父治まる。故に後世宰の室を以て琴堂と爲す」とある。 【六】河陽富奇澤、晉書に「潘岳、才名、世に冠たり、出でて河陽の令となる。岳、妻儀に美に、辭藻絶麗、尤も善く哀詠の文を爲る」とある。 【七】彭澤、名杯、晉書に「陶潛、鎮軍建威參軍となる。親朋に謂つて曰く、卿が絃歌して以て三徑の實と爲さむと欲す、可ならむか」と。執事者、これを聞いて、以て彭澤の令と爲す。縣に在るや、公田には悉く糶穀を種ましめて曰く、吾をして常に酒に酔はしむれば足れり」とある。 【八】昭同、その光、天に隨つて轉すること。詩の大雅に倅彼雲漢、昭回於天とあつて、ここでは、雲漢、即ち銀河を指す。 【九】元惡、元兇に同じ、賊首。 【一〇】酒天、洪水の天をひたすに譬ふ、註者の説に據れば、これは、上元中、宋州の刺史劉展が兵を擧げて亂を爲したことを指したので、連りに、攝・潤・昇・瀆・滄・舒・和・徐・盧の諸州を陥れ、凡そ三月にして、はじめて平定した。 【一一】會稽、春秋繁露に「大夫蠶、大夫種、大夫廬、大夫學、大夫車成。越王、この五大夫と謀りて、吳を伐ち、遂に之を滅して、會稽の恥を雪ぐ」とある。 【一二】宛陵、即ち宣城、唐時の宣州宣城郡は、宣城縣を治めて居たので、即ち漢の宛陵縣の地である。 【一三】亞相、李白の原註に「亞相李公、これを重んずるに能政を以てし、中丞李公、免じて罷め、以て官を移す」とあつて、李錡は劉展の亂を爲すに際し、難を避けて奔走せしに因つて、官を失つたが、二公に因つて職に復したものと見える。王琦の註に「唐時、御史臺に大夫一員あり、正三品。中丞二員、正四品。亞相は御史大夫をいひ、獨坐は中丞をいふ。海錄碎事に、御史大夫、これを亞相といふ。蓋し、漢時、位、宰相の副たり、故に唐人之を亞相といふ」とある。 【一四】桑林、莊子に「庖丁、文惠君の爲に牛を解く、手の觸るるところ、肩の倚るところ、足の履むところ、膝の踏るところ、杳然、鑿然、刀を奏する騞然、音に中らざるなし、桑林の舞に合ひ、乃ち經首の會に中る」とある。桑林は鴻の樂の名、後には宋に傳はつて居た。 【一五】獨坐、後漢書に「光武、特に御史中丞に詔して、司隸校尉、尚書令と會同し、並に席を專にして坐す、故に京師諺して三獨坐といふ」とある。 【一六】激揚、濁を激し清を掲げる。 【一七】絃歌、子游が武城に宰たりしことを用ふ。 【一八】害馬、莊子に「牧馬小童曰く、夫れ天下を爲むるもの、亦た奚ぞ以て馬を牧する者に異ならむや、亦た其害馬を去るのみ」とある。 【一九】嚴管、曲禮に女子許嫁纓とあり、正儀に「婦人は、質弱

く、自ら固うすること能はず、必ず變屬あり、故に仮に標を繫ぐ。標に二ある時、一は是れ少時常佩の香標、二は是れ許廓の時の繫標とある。【一〇】 雋最 第一と爲す。【三】 三江 松江、錢塘江、浦陽江を合稱す。【三】 峻節 高節に同じ。【三】 貫 連ふ。【三】 通方 方は道。【三】 軒蓋 車と車蓋。【六】 嚴光瀨 水經註に「桐廬縣より於瀨に至る、凡そ十有六瀨。第二は是れ嚴瀨、瀨は山を帯び、山下に石室あり、漢の光武の時、嚴子陵の居るところなり。故に山及び瀨、皆人の姓に即いて之に名づく。山下に磴石あり、周圍十數丈、交も深際に枕む、蓋し陵の遊ぶところなり」とある。

【題義】 從孫といへば、兄弟の孫で、その人、無論姓は李、名は銘といひ、そして、義興の縣令をして居たので、この詩を以て見れば、相當の才能があつて、治績も擧がつたものと見える。義興は、縣名、常州晉陵郡で、江南東道に屬して居た。

【詩意】 今の天子は、役に立つやうな人才を登庸せむことを心がけ、そして、宗室の疏族の中に、英才を發見されたが、即ち汝である。汝の人物の爽朗なることは、清秋の明月が、獨り高くさし上つて、吳臺に映じたやうである。汝の才藝は如何といへば、筆を落して文章を草するや、詞彩爛然として、さながら綺羅錦繡の如く、刀を操つて起つて舞へば、風雷を振動するばかり。されば、百里の小邑を預つて、尺蠖の屈するやうな境涯に居ても、やがて、三台の高きに上り、天子の宰相に成りたいといふので、かの鵬が翼を振つて、南溟に徙る時を待つて居るやうなものである。しかし、文彩風流は、居然として存し、さすがに餘裕の綽綽然たる處は、愈よ以てなつかしいので、公堂より退出して、私第に歸れば、琴堂に坐して、終日出でず、その琴堂は、山に對して開き、まことに靜な上に、景色

も宜しく、綠水は、寂として幽閑であるし、白雲は、時たま谷間から湧いて出て来る。君の才は、古しへ河陽に宰たりし潘岳と同じくして、世にも稀なる詞藻に富み、又彭澤に令たりし陶淵明の如く、酒好の名を 縦にして、常に手から杯を離さない。かくの如き一かどの人物で、又自分の親戚でありながら、どうした事か、毎度かけ違つて、今日まで一度も面會せず、かの昭回せる雲漢を天上に仰ぐの想を爲して居るのは、まことに遺憾至極の事である。さきに、上元年中、劉展といふものが滔天の惡虐を逞しうして、謀叛を企て、人民は、疲勞の極、幽草の中に奔散して仕舞つた。その時、汝の居る常州の地も、自然その餘波を被り、亂離の間、事處に遑あらず、たとへば、波立つ川には靜に居る魚なきと同じく、人民は 盡く逃げ匿れ、一邑を擧げて、留まつて居る老人さへも無い位。そこで、汝は會稽の恥を雪がむが爲に、宛陵の方へ走り去り、その爲に一時官職を失つたが、御史大夫の李公といふ人は、兼ねてより、汝の人物を重んじて居て、汝の治民の材は、庖丁が牛を屠るとき、刀を振へば、その調子が桑林の舞に合ふといつた通りであるといひ、又御史中丞の李某は、汝が濁を激し清を揚げ、その爲に、不首尾に成つたといふことを非常に氣の毒に思ひ、ともに、力を盡して、斡旋して呉れた爲に、幸に舊職に再任することとなり、心、はじめて落ち付いて、一たび襟を開き、又古しへの子游が専ら絃歌を爲して、攻學を獎勵したといふやうな文治を再び行ふことが出来た。かくて、和樂の極、人心を醉はしむる程である。元來、惡政は、一に害馬の存在に起因するから、是非

とも之を除かねばならぬし、たとひ、巢は壞れかかつて傾いても、鳥は安心して其處に歸るのである。されば、人民は、酒を用意して、君の歸任するを待ち受け、相聚まつて、舞はむばかりに聲を張り上げて歌つて居る。農夫は、蓑笠を棄て、蠶を飼ふ女どもは、身に付けて居る紐や頭上の簪を揺り落し、一齊に出でて君の歸るを迎へ、笑ひどよめいて拜賀するので、それといふも、君の惠愛の心が深くして、衆望を博し得るからである。君が數職を歴て、現在の地位に上つた其閱歴は、予が嘗て聞いて居るところで、方今賢宰と稱するのは、君が第一である。かくて、徳化は一邦の上に治れ行く互り、名は三江の外に馳ゆき、その聲譽は、まことに大したもののである。君の高節は、雲霧に薄まり、大道に通ずればこそ、遠大なる仕事も出来るので、文を能くして、風俗を變じ、客を好んで、往來の征車を引き留める。自分も、折があつたならば、他日、その地に一游し、とてもその序に、平生欣慕する嚴子陵が其名を留めた桐廬の河瀬にも往つて見たいと思ふので、兎に角、この詩を以て先觸れとする。

【餘論】この詩は、無難には出来て居るが、格別の者でもない。どうも、かういふものばかり頻りに引き續くと、いくら、李白の詩でも、少少あてられる氣味が無いでもない。

草創大還贈柳官迪

大還を草創し柳官迪に贈る

天地爲橐籥。周流行太易。
造化合元符。交媾騰精魄。
自然成妙用。孰知其指的。
羅絡四季間。綿微無一隙。
日月更出沒。雙光豈云隻。
姪女乘河車。黃金充轆轤。
執樞相管轄。摧伏傷羽翮。
朱鳥張炎威。白虎守本宅。
相煎成苦老。消鑠凝津液。
髣髴明臆塵。死灰同至寂。
鑄冶入赤色。十二周律曆。
赫然稱大還。與道本無隔。
白日可撫弄。清都在咫尺。

天地は橐籥たり、周流して太易を行ふ。
造化、元符に合し、交媾して、精魄を騰す。
自然に妙用を成し、孰れか其指的を知らむ。
羅絡す四季の間、綿微にして一隙なし。
日月更なる出沒、雙光豈に隻と云はむや。
姪女、河車に乗じ、黃金、轆轤に充つ。
樞を執つて相管轄し、摧伏して羽翮を傷つく。
朱鳥、炎威を張り、白虎、本宅を守る。
相煎して苦老を成し、消鑠、津液を凝らす。
髣髴たり、明臆の塵、死灰、至寂に同じ。
鑄冶、赤色に入り、十二、律曆を周る。
赫然として、大還と稱し、道と本と隔つなし。
白日、撫弄すべく、清都、咫尺に在り。

北鄴落死名。南斗上生籍。

北鄴、死名を落し、南斗、生籍を上げす。

抑予是何者。身在方士格。

抑も予は是れ何者ぞ、身は方士の格に在り。

才術信縱橫。世途自輕擲。

才術、信に縱橫、世途、自ら輕擲。

吾求仙棄俗。君曉損勝益。

吾は仙を求めて俗を棄て、君は損を曉つて益に勝る。

不向金闕游。思爲玉皇客。

金闕に向つて游ばず、玉皇の客と爲らむことを思ふ。

鸞車速風電。龍騎無鞭策。

鸞車、風電よりも速に、龍騎、鞭策なし。

一舉上九天。相攜同所適。

一舉して、九天に上らば、相攜へて、適く所を同じうせむ。

【字解】【一】天地爲靈。老子に「天地の間、其れ猶ほ靈のときか」とあつて、河上公の註に「天地空虛、和氣流行、萬物自ら生ず、その空虛は、猶ほ靈のときなり」とある。靈はふいご。【二】周流行太易。太易は易に見えたる變化の道、宇宙間に變化の道が行き互つて居る。【三】造化。陰陽に同じ。【四】合元符。符を合するが如し、即ち同一なること。【五】交媾。陰陽の相交ること。【六】羅絡。からみ合ふ。【七】綿微。その組織の緻密なること。【八】雙光。日月に同じ。【九】蛇女。參同契に「河上の蛇女、雲にして最も神、火を得れば飛び、埃塵を見ず」とあつて、彭曉の註に「河上の蛇女は眞汞なり、火を見れば飛騰す」とある。眞汞は水銀。【一〇】河車。抱朴子に「丹砂は黄金と爲すべく、河車は銀子と作すべし」とある。【一一】轆轤。轆はながえ、轤は轆轤の楯木で、馬領を駕せしむるもの。【一二】執輻。輻はくるる、れも。【一三】朱鳥。白虎。淳于叔の大丹賦に「升巖於巖山、号炎火張殿下、白虎偕導前、分蒼液和於後、朱朱翔戲兮飛揚色五采」とある。朱雀は火、白虎は金。【一四】十二周律曆。十二節に分ち、一定の時期を經過する。【一五】清都。北鄴。前に見ゆ。【一六】南斗。搜神記に「南斗は生を注し、北斗は死を注す」とある。【一七】玉皇。天帝。【一八】鸞車。白雲に牽かせる車。

【題義】題に大還を草創すとある。その大還は、大還丹の略、長生不死の薬である。草創は、これを煉り上げるといふ義。つまり、仙丹を煉るに就いて、感慨を起し、因つて、この詩を作つて柳官迪に贈つたといふのであるが、柳官迪は、如何なる人か、すこしも分らぬ。

【詩意】天地は、その中、空虛にして恰もふいごの如く、空虛なればこそ、萬種の現象が其中に發生し得るのである。しかし、これ等の現象は、無暗に起滅するのではなく、易に論じてある現象變化の法則は、その中に周流し、殘る限なく行き互つて居る。かくて陰陽の二氣の働は、これ等の法則と符を合せたるが如くで、二氣相交つて、萬物を生じ、従つて、精靈といふものが出来るのであるが、この道は、自然の作用に成り、もとより、微妙を極めたものであるから、その指示標的を知ることが出来ない。かくて、萬種の現象は、春夏秋冬、即ち四季の間に絡まり連り、その組織は、極めて緻密で、寸分の隙間もない位。日月の大なるも、亦た代る其間に出没し、互に相待つて、その作用を爲すので、片片では仕方がない。姪女は、即ち水銀で、北方の正氣と稱する河車に乘じ、それを鍊り上げると、金丹が出来るので、その調合する薬は、互に樞となつて、決して相誤るを得ず、それで互に管轄して居るし、又鉛汞は相制伏して、羽翮を破る位の潛勢力を持つて居る。金丹を鍊るには、朱

鳥に喩へた火を燃やし、その炎威を以て熱するので、白虎に比すべき金は、本宅を守つて、それが本位となつて居る。それを煎り上げた揚句には、嗷嗷として苦しげに聲を發し、やがて、火候が丁度適合した様になると、水銀等の調劑が、すつかり溶解して、液體となるのである。やがて明臚の座の如く、全然灰土となつて、至寂に歸し、それを更に鍊り上げると、赤色になつて、十二節の火加減を經過し、然る後、赫然として、大還丹といふものに成り、道と隔てなきものとなるのである。そこで、この仙丹を服すれば、忽ち造化の本體に參透し、白日をも掌上に撫弄すべく、清都の仙境も、咫尺の處に在るの想を爲して、自由に往來すべく、北酆の鬼府に於ては、多くの死者の中から、その名を削り去り、南斗は、長生不死の帳簿に其籍を登録することに成るので、その效驗は、まことに素張らしいものである。抑も、予は、如何なる者かといふと、身は方士の格に列し、才術も縱横自在である處から、自然に世途を輕んじて擲ち去り、今や大還草創の最中である。われは、既に仙を求めむが爲に俗を棄て、君も亦た此世に居ると心身を損ずるといふことを悟り、そして、仙を學んで精神を益さむことを求めて居るとのこと、全然趨向を一にして居るものである。たとひ、この世なる天子の宮闕に遊ばずとも、天上なる玉皇の客になりたい。さうすれば、白鷺に車を牽かせて、風や電光より速にして、飛行自在であるし、又龍に騎すれば、鞭策を勞することなく、随意に昇天することが出来る。かくて、愈よ大還丹を鍊り、その藥の效力に因つて九天の上に飛揚することが出来るやうにな

つた時は、君と相攜へて、その行くところを一にし、終始相離れず居たいものである。

【餘論】この詩は、仙丹の效驗を事として述べたもので、主として、參同契の字面を驅使して居るが、參同契その物が、吾人には、縁の遠いもので、従つて、この詩も、實の處、餘り面白いものではない。そこで、事しく字句を詮議することは斷然やめて、字解などは、極めて簡單に済まし、大體の意味を闡明するだけに止めて置いたので、どうか、其積りで見て貰ひたい。

贈崔司戸文昆季

崔司戸文昆季に贈る

雙珠出海底。俱是連城珍。

雙珠、海底より出で、俱に是れ連城の珍。

明月兩特達。餘輝傍照人。

明月兩つながら特達、餘輝傍ねく人を照らす。

英聲振名都。高價動殊鄰。

英聲、名都に振ひ、高價、殊鄰を動かす。

豈伊箕山故。特以風期親。

豈に伊れ箕山の故のみならむや、特に風期を以て親む。

惟昔不自媒。擔簦西入秦。

惟れ昔、自ら媒せず、簦を擔うて、西、秦に入る。

攀龍九天上。別忝歲星臣。

龍を攀ぶ九天の上、別に忝うす歲星の臣。

布衣侍丹墀。密勿草絲綸。

布衣、丹墀に侍し、密勿、絲綸を草す。

才微惠渥重。讒巧生緇磷。才微にして、惠渥重く、讒巧、緇磷を生ず。

一去已十年。今來復盈旬。一去すでに十年、今來つて復た旬に盈つ。

清霜入曉鬢。白露生衣巾。清霜、曉鬢に入り、白露、衣巾に生ず。

側見綠水亭。開門列華茵。側に見る綠水の亭、門を開いて、華茵に列するを。

千金散義士。四座無凡賓。千金、義士に散じ、四座、凡賓なし。

欲折月中桂。特爲寒者薪。月中の桂を折つて、特に寒者の薪と爲さむと欲す。

路傍已竊笑。天路將何因。路傍、すでに竊に笑ふ、天路、將に何に因らむとする。

垂恩儻丘山。報德有微身。恩を垂るる儻し丘山ならば、德に報するに微身あり。

〔字解〕【一】雙珠 二つの美玉、崔文兄弟をいふ。孔融の書に「意はざりき、雙珠近く老蚌に出でむとは、甚だ之を珍貴とす」とある。【二】連城珍 趙王、十和の璧を得、秦より十五城を以て之に易へむと乞ひしよりいふ。【三】特達 美なる貌。【四】餘輝 餘光。【五】傍 あまねく。【六】殊郡 郡は邑の義。【七】箕山故 高士傳に「許由、字は武仲、陽城槐里の人、滄澤の中に隱る。堯、天下を許由に讓る。由、ここに於て、中岳颯水の陽、箕山の下に遺耕し、終身天下を経するの色なし。許由没し、箕山の巖に葬り、亦た許由山と名づく、陽城の南十餘里に在り。堯、因つて、其墓に就き、號して箕山公神といひ、以て五帝に配食す」とある。【八】風期 風度と同じ、前に見ゆ。【九】不自媒 列子に「魯に儒生あり、自ら媒して能く之を治す。管仲、自ら謀するの女は、醜として信ぜず」とある。【一〇】擗登 擗は長柄の笠。【一一】攀龍 龍鬣を攀づること、前に見ゆ。【一二】歲星臣 東方朔を

いふ。列仙傳に「東方朔は、平原厭次の人なり。久しく、吳中に在つて、書師たること數十年、武帝の時、上書して、便宜を説くや、拜して、郎となる。昭帝の時に至つて、時人、或は聖人といひ、或は凡人といひ、深淺黙顯の行を作し、或は忠言し、或は戲語し、その旨を知るなし。宣帝の時に至つて、幘を官舎に置き、風、これを飄して去る。後、會稽に見はれ、藥を五湖に賣る。智者、その歳星の精たるを疑ふなり」とある。【一三】丹墀 赤地、通典に「漢省の中、朱を以て地に漆す、故に之を丹墀といふ」とある。【一四】密勿 履勉に同じ。【一五】緝論 詔書。禮記に「王言は緝の如く、その出づること論の如し」とある。次第に膨大するの義に取る。【一六】惠渥 厚き恩惠。【一七】編禱 黒くなり又薄くなる、論語に見ゆ。【一八】盈旬 十日に成る。【一九】華茵 茵は褥、しとれ、敷物。【二〇】月中桂 西陽雜俎に「月中に桂あり」と記してある。【二一】天路 昇天の路。

【題義】唐の時、州の屬吏に司戸參軍事といふのがあつて、上州は二人、從七品下、中州は一人、正七品下、下州は一人、從八品下であつた。この詩は、某州の司戸參軍事たる崔文兄弟に贈つたので、崔文その人の閥歴は、例の如く不明であるが、この詩の記述に因つて、その才藻の非凡なることは、直に想像される。

【詩意】君等兄弟二人は、さながら、海底より出た雙珠に比すべく、まことに、兄たり難く、弟たり難く、互に能く匹敵して、各十五城にも易へられやうといふ珍寶である。雙珠は、瑩明透徹、明月の如く、その餘光は、あまねく人を照らすばかり。君等の評判は、長安の都にも振ひ、その聲價の高きことは、遠き邊境の邑里をも動かした。かの徒に高節を矜る箕山の許由などは、全然その軌を異にし、天晴の風采は、自然人をして親むべきを覚えしめる。それから、われ李白は、その昔、自ら

媒して賣り出した譯でもないが、笠を荷うて、はるばると、西の方、長安の都へ入つたところが、幸にも、九天の上に龍鱗を攀ち、いつしか、天子の御ひいきに預り、かの歳星の精たる東方朔と同じ様に、賓友として待遇されたので、まことに結構な次第、かくて、布衣の身を以て、一朝、皇居の奥深い處に近侍することとなり、勉強して、詔書起草の任に當り、もとより御役に立つ處から、しきりに重寶がられて居た。かくて、微才、幸に恩惠の厚きを受けて、大に喜んで居たところが、一朝、讒言を被り、溼して縋し、磨して礪し、その本質をさへ失ふ位のひどい目に遇ひ、都から逐ひ出されて、江湖に放浪すること、十年の久しきに及び、この頃、君の居る此地に来て、最早一句を経過した。頃しも、秋の末、ひいやりとする清霜の氣は、曉さむく、衰鬢に入り、露は衣巾を溼す位で、客中の境涯の淋しいことは、又一しほである。然るに、君は、わが近きあたり緑水の上なる亭館に居り、門を開いて、客を迎へ、これを堂上の立派な褥に坐せしめ、又千金を散じて義士に與へ、四座いづれも一かどの人物ばかりで、凡庸な者は一人も居ない。君は、月中の桂を折り、その珍貴なるをも顧みず、それを官用的に使つて、寒くて困まつて居る者の薪に供せむとする位で、多くの人の君を欽慕するのも、まことに尤な次第、われも亦た君の知を得たいと思つて居る。しかし、行路の人は、竊に我が非望を笑ひ、君の知を得ることは、天に登ると同じく、なかなか六つかしく、汝は、如何なる緣故を以てするかといつて居る。なる程、縁もゆかりもないのであるが、君にして、わが境遇を憐み、ひよ

つと丘山に等しき恩惠を垂れ、わが爲に力を盡して斡旋して下さるならば、われとても、決して知己の恩を空しくはせず、この微軀を擲つて、その徳義に報じたいと思つて居る。君は、果して、わが衷情を諒とせられるか、如何。

【餘論】この詩は、はじめに、崔文兄弟の事を敘し、次に自己の失脚に及び、崔文の住する地方に來りしに因つて、その厚誼を望み、段落整然として、旨意も亦た極めて明白である。

贈溧陽宋少府陟

溧陽宋少府陟に贈る

李斯未相秦。且逐東門兔。李斯、未だ秦に相たらず、且つ逐ふ東門の兔。

宋玉事襄王。能爲高唐賦。宋玉、襄王に事へ、能く高唐の賦を爲る。

常聞綠水曲。忽此相逢遇。常に綠水の曲を聞き、忽ち此に相逢遇す。

掃洒青天開。豁然披雲霧。掃洒して、青天開き、豁然として、雲霧を披く。

葳蕤紫鸞鳥。巢在崑山樹。葳蕤、紫鸞の鳥、巢うて崑山の樹に在り。

驚風西北吹。飛落南溟去。驚風、西北より吹き、飛んで南溟に落ちて去る。

早懷經濟策。特受龍顏顧。早く經濟の策を懷き、特に龍顏の顧を受く。

白玉棲青蠅。君臣忽行路。

白玉、青蠅を棲ましめ、君臣、忽ち行路。

人生感分義。貴欲呈丹素。

人生、分義を感ず、丹素を呈せむと欲するを貴ぶ。

何日清中原。相期廓天步。

何の日か、中原を清くし、相期して、天歩廓たらむ。

【字解】(一) 李斯、宋玉、綠水曲曰すでに前に見ゆ。(二) 掃酒青天開、晉書に「尙書令顧璠、樂廣を見て之を奇とし、諸子に命じて造らしめて曰く、これ人の水鏡、これを見るに豈然、雲霧を披いて青天を觀るが如きなり」とある。(三) 嚴義、ふさふさとして居る貌、ここでは羽毛の多くて見事なることといふ。(四) 南漢、白玉、前に見ゆ。(五) 分義、交際上の義理。北史司馬子如の傳に「子如、はじめ、朝野無事となり、齊の神武と相結託し、分義甚だ深し」とあり、又劉琨傳に「我、府侯と分義すでに定まる」とある。(六) 丹素、心に同じ。(七) 中原、支那本土の中部をいふ。(八) 廓天步、天子の御足なみの差支なく自由になる標にする。天歩、天歩の反對と見れば善い。

【題義】深陽は、唐時宣州の縣で、江南西道に屬して居た。李白は放逐されし後、その地に遊んだので、前にも深陽酒樓三月暮といふ句さへあつた。この詩は、深陽の尉たる宋陟に贈つたのである。

【詩意】李斯が未だ秦に用ひられず、ただの書生であつた時分には、定めて上蔡東門の外に於て獵を爲し、兎でも追ひ廻して居たであらうし、宋玉は、楚の襄王に事へたが、詞臣として待遇され、高唐の賦などを作つて、人主の御機嫌を伺つて居て、まだ大に任用されなかつた。君も亦た其通りで、折角の才能ありながら、高官に取り立てられず、區區として地方官の末班に參して居るのは、まことに

御氣の毒である。ある時、綠水の曲を聞き、君の人物を慕はしく思つたが、今料らずも、この地に來て君に遇つたのは、まことに仕合なことで、豁然として雲霧を披き、青天が灑掃されて眼前に開いたやうな氣がする。顧みれば、われは、紫鸞の鳥の如く、羽毛ふさふさとして、崑崙山の樹に巢つて居たが、疾風忽ち西北より吹き來つて、やがて飛ばされて南溟に落ちたやうなものである。わが胸中には、早くより、經濟の策を懷き、天下を治めることも出來るといふ自信もあり、特別に、聖主の眷顧を受けて居たが、青蠅が綺麗な玉に止まつて、糞をひり掛けたやうに、無實の冤罪に汚された爲に、聖主に棄てられ、君臣の間は、忽ち行路の人も同じに成つて仕舞つた。そこで、今、この地に飄泊して來たのであるが、人生は、交誼を感ずるもので、一心をさらけ出して、互に腹藏なく、胸襟を披くのが第一である。願はくは、君と交を結びたいので、やがて力を併せて、中原を恢復し、天歩の艱難なるを濟ひ、萬乘の天子を舊都に御歸りに成るやうにして上げたいものである。

【餘論】この詩は、篇幅は短い、その章法は、前の崔文兄弟に贈つたのと全然同じく、そして、結末二句を見れば、まさしく、安祿山の亂に際したので、又この收結の爲に聊か振つた趣がある。

戲贈鄭深陽

戲れに鄭深陽に贈る

陶令日日醉。不知五柳春。陶令、日日醉ひ、五柳の春を知らず。

贈 戲贈鄭深陽

素琴本無絃。漉酒用葛巾。素琴、本と絃なく、酒を漉すに、葛巾を用ふ。
 清風北牕下。自謂羲皇人。清風北牕の下、自ら羲皇の人と謂ふ。
 何時到栗里。一見平生親。何時か、栗里に到り、一見平生の親たらむ。

【字解】【一】陶令、陶潛は彭澤令であつて、今の鄒晏も、等しく縣令である處から、直に比擬したのである。【二】日日醉、南史に「陶潛、性酒を嗜み、或は置酒して之を招けば、造つて飲み、輒ち醉ふ」とある。【三】五柳、潛の宅邊に五柳樹あり、かつて五柳先生傳を著した。【四】素琴本無絃、南史に「潛、音聲を解せず、しかも、素琴一張を蓄ふ、徽弦具せず、毎に之を撫して和して曰く、但だ琴中の趣を得ば、何ぞ絃上の聲を勞せむや」とある。【五】漉酒用葛巾、南史に「王弘、羣賢をして候せしむ。潛、その酒の熟するに値ひ、頭上の葛巾を取つて酒を漉し、復た之を戴く」とある。この時分の酒は、普通今の濁酒であるから、これを漉すのである。【六】羲皇人、南史に「潛、かつて云ふ、五六月、北牕の下に臥し、涼風暫らく至るに遇へば、自ら羲皇上の人といふ」とある。羲皇は伏羲で、つまり伏羲より以前の太古の人といふ意。【七】栗里、尋陽に在つて、即ち陶潛の居た處。ここでは、借りて鄒晏の居宅を指す。

【題義】鄒深陽は、深陽の令鄒晏といふ人で、この詩は、前首と同時の作と見える。それから、等しく、李白の手に成れる、深陽瀨水貞義女碑銘の序に「邑宰蔡陽鄭公名晏、家康成之學、世子産之才、琴清心閑、百里大化」とあるを見れば、相當の人物であつたに相違ない。この詩は、いづれ近日中に、訪問するといふ意味を述べ、通篇、すべて、陶淵明の故事を用ひたから、戲贈といつたのであらう。

【詩意】むかし、陶淵明は、酒が大好きで、日として、酔はぬことはなく、門前の五柳が、春になつて芽ぐんだのをも知らぬ位。かくて、琴はあれども、張るべき絃がなく、酒を漉すには、頭巾を用ひ、放曠古簡、その人、まことに慕ふべく、北窓の下に横に成つて、清風の中に臥し、自ら羲皇以上の太古の人であるといつて居た。今、君は、その人物、その操守、さながら、この陶淵明の如く、そして、從來我我の交情淺からねば、この深陽に來たのを幸に、いつか一度、栗里に比すべき深陽の地に君を訪問し、平生契舊の親を述べ、十分に酒邊の歡を盡したいものである。
 【餘論】この詩は、首尾を通じ、鄒晏を以て陶潛に比し、仍つて陶潛の事を敘し、結二句に於て翻折し、これを鄒晏に歸したので、いはば一種の章法である。

贈僧崖公

僧崖公に贈る

昔在朗陵東。學禪白眉空。むかし、朗陵の東に在り、禪を學ぶ、白眉空。
 大地了鏡徹。廻旋寄輪風。大地、了に鏡徹、廻旋、輪風に寄す。
 攬彼造化力。持爲我神通。彼の造化の力を攬し、持して、我が神通と爲す。
 晚謁太山君。親見日沒雲。晚に太山の君に謁し、親しく、日沒の雲を見る。

贈僧崖公

中夜臥山月。拂衣逃人羣。中夜、山月に臥し、衣を拂うて人羣を逃る。
 授余金仙道。曠劫未始聞。余に金仙の道を授け、曠劫未だ始めより聞かず。
 冥機發天光。獨朗謝垢氛。冥機、天光を發し、獨朗、垢氛を謝す。
 虛舟不繫物。觀化遊江濱。虛舟、物に繫がらず、化を觀て、江濱に遊ぶ。
 江濱遇同聲。道崖乃僧英。江濱、同聲に遇ひ、道崖、乃ち僧英。
 說法動海嶽。遊方化公卿。法を説いて、海嶽を動かし、方に遊んで、公卿を化す。
 手秉玉塵尾。如登白樓亭。手に玉塵尾を秉り、白樓の亭に登るが如し。
 微言注百川。疊疊信可聽。微言、百川を注ぎ、疊疊、信に聽くべし。
 一風鼓羣有。萬籟各自鳴。一風、羣有を鼓し、萬籟、各自鳴る。
 啓閉八牕牖。託宿掣雷霆。閉を啓く八牕牖、託宿して雷霆を掣す。
 自言歷天台。搏壁躡翠屏。自ら言ふ、天台を歴、壁を搏つて翠屏を躡むと。
 凌兢石橋去。恍惚入青冥。凌兢、石橋に去り、恍惚として青冥に入る。
 昔往今來歸。絕景無不經。むかし往いて、今來り歸る、絶景、經ざるなし。

何日更攜手。乘杯向蓬瀛。何の日か、更に手を攜へ、杯に乗じて蓬瀛に向はむ。

【字解】(一) 期陵 元和郡縣志に「期陵山は、蔡州期山縣の西北三十里に在り」とあり、太平寰宇記に「期陵の故城は、漢、縣の所治と爲す、今の蔡州期山縣の西南三十里に在り、晉の武帝、何曾を封じて期陵公となす。即ち此城なり」とある。(二) 白眉空 王琦の註に「白眉空、疑ふらくは、是れ當時禪子の名、猶ほ禪宗に稱するところ南泉願、臨濟玄、趙州諗のごときのみ。楊註に、蜀志馬良白眉の事を引く、非なり」とある。(三) 了 了然分明の意。(四) 鏡微 楞嚴經に「諸の世間、大地山河を觀るに、鏡鑑の明かなるが如く、來るも粘するところなく、過ぐるも踪跡なし」とある。(五) 輪風 法苑珠林に「華嚴經に依るに、三千大千世界、無量因緣を以て乃ち成る。且つ大地の如きは水輪に依り、水は風輪に依り、風は空輪に依り、空は依るところなし。然れども、衆生業感世界安住」とあり、なほ他の佛經に見えて居る。(六) 神遊 維摩經に「維摩詰、即ち三昧に入り、神通力を現じ、諸大衆に示す」とある。(七) 太山君 即ち泰山の神。(八) 金仙 佛をいふ。(九) 曠劫 隋書に「天地の外、四維上下、更に天地あり、亦た終極なし、然れども、皆成あり、敗あり、一成一敗、これを一劫といふ」とあつて、劫とは、世界の破滅までの時をいふ。(一〇) 天光 莊子に「宇の泰定は、天光に發す」とある。(一一) 垢氛 垢は滓、氛は氣、塵氣といふに同じ。(一二) 虛舟 莊子に「汎として驚がざるの舟の如く、虚にして遊遊する者なり」とある。(一三) 江濱 濱は水涯。(一四) 同聲 鳥に「同聲相應じ、同氣相求む」とある。(一五) 僧英 僧中の英傑。(一六) 遊方 四方に遊ぶ。(一七) 玉塵尾 塵尾は拂子、その柄を玉で造つてある。(一八) 白樓亭 會稽記に「浙江又東北、重山を徑す、西山の上に白樓亭あり、亭は本と山下、縣令殷朗、移して今の處に置く、升陟遠望すれば、山湖滿目なり」とあり、又世説に「孫興公、許玄度、ともに白樓亭に在つて、先姓名達を商略す」とある。(一九) 微言 前に見ゆ。(二〇) 疊疊 疊々たる貌。(二一) 羣有 萬物に同じ。(二二) 萬籟 籟は風の吹き入る穴。(二三) 搏壁 絕壁に手をかける。(二四) 翠屏 絕壁を形容していふ、翠色の屏風といふ義であるが、ここでは、天台の石橋の上なる石壁の名。(二五) 凌兢 恐懼の貌。(二六) 石橋 顯慶之啓蒙記の註に「天台山の石橋、略、徑、尺に盈たす、長さ數十歩、歩至つて滑に、下、絶冥の淵に臨む」とある。

【元】青冥。大空。【元】乘杯。法苑珠林に「宋の京師に釋林度といふ者あり、熊姓名氏を知らず、常に木杯に乘じて水を渡り、因つて、目と爲す。はじめ、見に冀州に在り、細行を修めず、神力卓越、世、その由来を測るなし。かつて、北方に於て一家に寄宿す、家に一金像あり、度、竊み去る。家人、覺つて之を追ひ、度が徐行するを見、馬を走らして逐へども及ばず、孟津河に至り、木杯を水に浮べ、これに憑つて渡り、風神を假るなく、輕疾飛ぶが如し。俄にして、岸に渡り、京師に達す」とある。

【題義】崖公は、詩中に道崖とあるのが本名であらう。この詩は、道崖に贈つて、その道徳を讚美したのである。

【詩意】われ曩に仰陵の地に在りし時、白眉空と稱する一高僧に就いて、禪を學んだ。この大地は、了然分明、さながら、鏡の瑩徹なるが如く、そして、世界中の物象は、常に旋轉し、風輪といつて、大風に搖動されて居るのである。かくて、造化の力、即ち宇宙間の原動力を取り來り、これを以て我が神通とするので、つまり、神通力といふものは、宇宙の秘奥に參透すれば、自然に、この身に備はつて來るといふので、われは、かくの如き佛教の奥旨を教はつたのである。晩年には、泰山に登つて山神に謁し、夕陽の没する頃、淨土に近き西方の空に出現する夕やけの雲を望み、それから、參詣者が多く聚まつて騒がしい處から、衣を拂つて、これ等の羣衆の間より逃れ出で、中夜、山頂の月に臥して居た。すると、泰山の神は、余に向つて、金仙の道を授けて呉れたが、この世界の破滅するまで、誰しも聞くことを得ざる尊い玄理であつた。かくて、神祕の極、知るべからざるものとしてある宇宙の玄機は、天光の中に閃いて、此方に於て道を體得して居れば、彷彿として、これを觀することが出

來るので、われ獨り心地朗然として、塵垢を拂ひ去り、宛然、世間離れのしたやうな氣がした。その後、わが身は汎汎たる虚舟が決して物に繋かれざるが如く、自然の物化を觀じつつ、處處飄遊して、はては南の方大江の岸邊にまで來かかつた。その江邊に於て、偶然邂逅したのは、好個同聲の友で、名を道崖といへる僧中の英傑であつた。崖公の人物は如何といふに、法を説けば、海や山をも動かし、四方に遊んでは、公卿を教化し、そして、手には玉を柄とせる拂子を攜へて居るので、丁度、白樓亭に於て、孫興公、許玄度などいふ一代の名賢が會合して談論をしたといふ其趣を思はしめる。崖公の微言は、百川を注ぐが如く、容易に盡くることなく、しかも、事理明白にして、一一傾聽するに足り、たとへば、風一たび吹いて、萬物を鼓動し、無數の窟穴が之に應じて、自然に聲を發して響くが如くであるし、閉ちてあつた八方の窓も、自然と開け、やがて一夜を経れば、雷霆の鳴りはためくを聞くやうである。崖公の自ら語るところに據れば、近ごろ、天台山に遊んだとのことで、絶壁につかまつて、翠屏の險を超え、戰戰兢兢としつつも、石橋を渡り、恍惚として、太清に入るの想を爲した。その遊も、一寸の事ではなく、久しい前から出かけて往つて、つい前日歸つて來たとのことで、山中の絶景は、すべて探り盡さぬ處も無いとのことである。なる程、天台の遊も、結構には相違ないが、いつか、崖公と共に手を攜へ、かの古しへの高僧の如く、杯を水に浮べて、やすやすと之に乗じ、遠く去つて、かの蓬萊瀛洲などいふ仙境に向ひたいものである。

【餘論】この詩は、はじめに自分が佛教を修行したことを述べ、それから、崖公に及び、その最近天台に遊びたることを敘し、ともに、手を攜へて、蓬瀛に遊びたいといふので、折角ながら、上段の自己の事は、後の方にさばかり緊密なる關係がなく、ひとり偉がりに氣焰を揚げて、筋道が通らぬ上は、龍頭蛇尾の謂を免れまいと危ぶまれる。唯だ題意に協ふだけならば、江濱遇同聲一から以下で澤山なので、その前十六句は、全然刪り去つても差支が無い。要するに、これ等の詩は、李白の作として、未だ其妙を極めざるものである。

遊溧陽北湖亭望瓦屋山懷古贈同旅

溧陽の北湖亭に遊び、瓦屋山を望み、古へを懷ひ同旅に贈る

朝登北湖亭。遙望瓦屋山。朝に北湖の亭に上り、遙に瓦屋の山を望む。
 天清白露下。始覺秋風還。天は清くして、白露下り、始めて、秋風の還るを覺ゆ。
 游子託主人。仰觀眉睫間。游子、主人に託し、仰いで、眉睫の間を觀る。
 目色送飛鴻。邈然不可攀。目色、飛鴻を送り、邈然として攀づべからず。
 長吁相勸勉。何事來吳關。長吁して、相勸勉し、何事か吳關に來る。

聞有貞義女。振窮溧水灣。

聞く、貞義の女あり、窮を振ふ溧水の灣。

清光了在眼。白日如披顏。

清光、了に眼に在り、白日、顔を披くが如し。

高墳五六墩。崒兀棲猛虎。

高墳五六墩、崒兀として、猛虎を棲ましむ。

遺跡翳九泉。芳名動千古。

遺跡、九泉に翳し、芳名、千古を動かす。

子胥昔乞食。此女傾壺漿。

子胥、むかし食を乞ひ、この女、壺漿を傾く。

運開展宿憤。入楚鞭平王。

運開いて、宿憤を展べ、楚に入つて、平王を鞭つ。

凜冽天地間。聞名若懷霜。

凜冽たり天地の間、名を聞くと、霜を懷くが若し。

壯夫或未達。十步九太行。

壯夫、或は未だ達せず、十歩に九太行。

與君拂衣去。萬里同翱翔。

君と衣を拂うて去り、萬里、同じく翱翔せむ。

【字解】(一) 游子託主人 以下の數句は、遊客が主人の辭色を仰觀し、その飛鳥を仰觀し、意、實客に在らざるを見、故に長吁して相勸め、何事ぞ來つて此地に至りしかといつたといふので、目色送飛鴻は、密雲公が、仰いで飛雁を觀、色、孔子に在らずといふこととを暗用したので、その事實は、既に前に見えて居る。(二) 貞義女 越絶書に「子胥、溧陽の界中に至り、一女子の漿を溧水の中に擊つを見る。子胥曰く、豈に食を託するを得べけむや。女子曰く、諾、と。即ち簞飯を發し、その漿を清くして之を食はしむ。子胥、食已んで、去らむとし、女子に謂つて曰く、爾の漿漿を掩へ、これをして歸はさしむる母れ。女子曰く、諾、と。子胥行くこと五歩、還つて女子を顧れば、自ら溧水の中に縱つて死す」とある。(三) 溧水 一統志に「溧水は、歷天府溧陽縣の西北四十里に在り、一

名瀾水」とある。【二】樓猛虎。蕭士贊の説に「樓猛虎とは、墳、猛虎の如きの状を謂ふ、猶ほ馬鬣封の謂のごときなり」とあるが、王琦は「墳、勢崖、猛虎の若きあり、これ遠望中、擬似の景を寫すのみ、馬鬣封を以て比と爲す、恐らくは未だ是ならず。この詩に據れば、貞觀女の墳、唐時尙ほ存す、當に瓦屋山下に在るべし、今は考ふべからず」といつて居る。【三】九泉。木華の海賦に、歐州九泉とあつて、李善の註に「地に九重あり、故に九泉といふ」とある。【四】鞭平王。吳越春秋に「吳王、郢に入る、子胥、乃ち平王の墓を掘り、尸を出し、これを鞭つこと三百、左足に腹を踐み、右手に其目を抉り、これを詣めて曰く、誰か汝をして譏諷の口を用ひて我が父兄を殺さしむる、豈に免ならずや」とある。【五】太行。山の名、險絶を以て稱せらる。

【題義】景定建康志に「瓦屋山は、深陽縣の西北八十里に在り、周廻二十里、高さ一百六十七丈、山形連互、兩崖稍や陡起、宛として、屋狀の如し。李白、かつて深陽に遊び、瓦屋山を望み、古しへを懐うて詩を賦す、即ち此地」とある。北湖といふは、よく分らぬが、格別大きな湖水ではなく、その湖岸に亭があるのであらう。この詩は、李白が深陽の北湖亭に遊んで、瓦屋山を望み、伍子胥の事を思ひ出で、仍つて賦して同遊の人に贈つたといふので、一本には「孟浩然に贈る」としてある。

【詩意】朝に深陽城を出でて、北湖亭に登り、遙に瓦屋山を望んだ。頃しも秋で、天は澄み渡つて、白露曉に降り、西風が冷いやりと身にしむを覺えた。折角、ここに遊びに来たが、主人は、飛ぶ雁に看惚れて居るのか、客が来ても、丸で相手にせず、邈然として取り籠りやうもない位。こんなに冷遇されるならば、何の爲に、態態この吳地に來たのか、まことに、詰らないといつて、同遊の人人とともに長嘆して、互に慰め合つて居た。それは扱て置き、この深陽の地には、むかし貞義を以て稱せら

れた一婦人が居たので、深水の河岸に於て窮人を救ひ、その風貌は、ありありと眼中に在るが如く、そして、白日の中に於て、その顔を見るやうな感じがする。眺めやれば、古塚が五つ六つ堆をなして高まり、丁度、猛虎が踞んで居るやうな形をして居る。彼女の遺跡は、この大地の上では、湮滅しかかつて居るが、その芳名は、千載の後なる今日までも傳はつて居る。むかし、伍子胥は、楚より出奔し、途中で落ちぶれて、食を乞うたが、その時、この女は、壺漿を傾けて之を救ひ、その爲に、子胥は、吳に逃げ込み、やがて、運が開くと、兼ねての遺恨を晴らすことが出来たので、その吳王闔閭に従つて、楚の都の郢に攻め入つた時は、墓を發いて、平王の屍を出し、これを鞭つこと三百、以て前日の仇を報いた。伍子胥の爲した事蹟は、凛冽として、天地の間に存し、その名を聞けば、霜を懐中に抱くが如く、人の氣を引き締める。おもへば、壯士たるもの、未だ榮達せずして、世間にうろついて居る間は、十歩の中、九歩までは、太行の絶險に比すべき行路難を経ねばならぬので、今日、ここに湖亭の主人に冷遇されるのも、決して怪むに足らぬことである。されば、君とともに、衣を拂うて遠く去り、江湖萬里の間に翱翔し、平生の宿志を遂げたいものである。

【餘論】游子託主人の四句は、瑣瑣たる事で、詩中に記載すべきことでもない様であるが、壯夫或未達。十歩九太行に照映して居るので、決して、徒爾ではない。全體の構想は、伍子胥のやうに、思ふ存分の事をして退けたいといふので、英氣鬱勃たる趣がある。

醉後贈從甥高鎮

馬上相逢揖馬鞭。馬上相逢うて、馬鞭を揖し、
 客中相見客中憐。客中に相見て、客中に憐む。
 欲邀擊筑悲歌飲。擊筑悲歌を邀へて飲まむと欲するも、
 正值傾家無酒錢。正に値ふ、家を傾けて酒錢なきに。
 江東風光不借人。江東の風光、人に借さず、
 枉殺落花空自春。枉殺す、落花空しく自ら春なるを。
 黃金逐手快意盡。黃金手を逐うて、快意に盡き、
 昨日破産今朝貧。昨日産を破つて、今朝貧なり。
 丈夫何事空嘯傲。丈夫何事ぞ、空しく嘯傲する、
 不如燒却頭上巾。如かず、頭上の巾を燒却せむには。
 君爲進士不得進。君は進士となつて、進むを得ず、
 我被秋霜生旅鬢。我は、秋霜、旅鬢に生ぜらる。

【字解】(一)擊筑悲歌。史記荆
 客列傳に「荆河、酒を嗜み、日に狗屠
 及び高漸離と燕市に飲む。酒酣なる
 以往、高漸離、筑を擊ち、荆河、和
 して、市中に歌うて相樂むなり。す
 でにして相泣き、旁に人なきが若し」
 とある。(二)傾家。家に有る限り
 の物を盡す。(三)進士。唐制、士を
 取るの科に種種あつて、進士は其一、
 最も普通なるものである。(四)廉
 頗。廉頗と藺相如、史記に「廉頗は
 趙の良將、勇氣を以て諸侯に聞え、
 兵に將として、數ば功あり、安平君
 に封ぜらる。藺相如、亦た趙人。趙
 王、和氏の璧を奉じて、秦に入らし
 め、卒に璧を完うして趙に歸る。趙
 王以爲へらく賢大夫、諸侯に辱めら
 れずと。拜して上大夫と爲す。又趙
 王に従ひ、秦王と渾池に會す、國に

時清不及英豪人。時清くして、英豪の人に及ばず、
 三尺童兒重廉藺。三尺の童兒、廉藺を重んず。
 匣中盤劍裝鰐魚。匣中の盤劍、鰐魚を裝ひ、
 閒在腰間未用渠。閒に腰間に在つて、未だ渠を用ひず、
 且將換酒與君醉。且つ將に酒に換へて君と酔ひ、
 醉歸託宿吳專諸。醉歸して、吳の專諸に託宿せむとす。
 たるか知つて、陰に之に結び、以て用を爲さむと欲す」とある。

歸るや、相如の功大なるを以て拜し
 て上卿と爲す、位、廉頗の右に在り
 とある。(五)鰐魚。鰐魚、その皮
 は刀劍の鞘にすることが出来る。
 【六】專諸。吳越春秋に「專諸は堂
 邑の人なり、伍胥の楚を亡けて吳に
 如く時、之に堂に遇ふ、因つて、其
 貌を相る、確鑿にして深目、虎背に
 して熊背、鱗に従ふに長、その勇士

【題義】この從甥高鎮といふのは、前に在つた從甥高五と同じ人であるらしく、つまり、高五の本名
 を鎮といふのである。この詩は、李白と高鎮と、ともに志を得ぬ處から、世上の有様を述べて、慷慨
 慨したので、まことに、痛快の詩である。
 【詩意】馬上に君と遇へば、鞭を手に執つて互に會釋し、客中に相見れば、客中に相憐むといふ次第。
 そこで、古しへ擊筑悲歌の徒に比すべき君を迎へて、今夜は一所に酒を飲まうと思ふが、如何せん、
 自分は身代限り同様、今しも、酒を買ふ錢すら無いといふ位で、まことに情なく、且つ困まつたこと
 である。折角ながら、江東の好い景色も、貧乏人には、何にもならず、落花紛紛として、その風情、

面白けれども、金が無くしては、春も何も有つたものではない、今まで、金が手に這入れば、どしどし使ひはたして、面白くやつて来たが、もとより限ある黄金の事で、無残にも、昨日すでに破産して、今日は貧乏人に成り下つて仕舞つたから仕方がない。丈夫の身として、空しく嘯傲した處で、今さら始まらないから、頭上の中を焼き棄てて、平凡の人に成つた方が善いかも知れない。君は、進士であるが、これまで格別昇進した話も聞かぬし、我は、徒に江湖に流落して、旅費に秋霜を生ずるを免れない。何にしても、天下太平の時節になると、高位美官に居る謂はゆる英豪の人達が幅を利かして居るので、誰しも此に及ぶものはなく、三尺の童子と雖も、此輩を廉頗・藺相如に比し、ひたすら尊重して崇め奉つて居る。そこで、我の如き貧生は、誰も顧みて呉れる人が無いから、仕方がない。わが家の匣の中に一つの盤劍があつて、敵の皮の鞘に收めてある。それを、我輩は、常に腰間にぶら下げて居るが、まだ一度も其劍を抜いて人を斬つたこともない。かくの如く、太平の今日、役に立たぬものであるから、この劍を解いて賣り拂ひ、君とともに一醉し、それから、吳國の專諸の様な游侠の人の處に往つて託宿しやう、かうするより外に、鬱悶を開く方法はあるまいと思ふ。

【餘論】蕭士贊は「これ太白少年任俠の作なり、專諸は刺客なり、これ公子光、專諸をして魚腸の劍を置き、吳王僚を刺さしむる事を用ふ」といひ、乾隆御批には「觸るるあつて鳴り、微に憤意を露はす、醉後披寫、自ら天趣饒なり」とある。

贈秋浦柳少府

秋浦柳少府に贈る

秋浦舊蕭索。公庭人吏稀。

秋浦舊と蕭索、公庭、人吏稀なり。

因君樹桃李。此地忽芳菲。

君が桃李を樹るたるに因つて、この地、忽ち芳菲。

搖筆望白雲。開簾當翠微。

筆を搖かせば、白雲を望み、簾を開けば、翠微に當る。

時來引山月。縱酒酣清暉。

時に來つて、山月を引き、酒を縱にして、清暉なり。

而我愛夫子。淹留未忍歸。

しかも、我、夫子を愛し、淹留、未だ歸るに忍びず。

【字解】「一」樹桃李。潘岳の事を暗用したので、その詳は、次篇の第三首の條に於て述べることにする。「二」翠微。爾雅に、「山未だ上に及ばざるは翠微」とあつて、郭璞の註に「上に近くの旁坡」とあり、邢昺の疏に「未だ頂上に及ばず、旁の陔陀に在る處を謂うて、翠微と名づく」とある。又一説に「山氣は青藍色、故に翠微といふなり」とあり、潘岳居類書に「凡そ、山、これを遠望すれば翠、これに近づけば翠漸く微、故に山色を翠微といひ、亦山腰といふ」とある。「三」縱酒。意を放つて酒を飲む。「四」酣。説文に酒樂也とある。「五」清暉。月光をいふ。

【題義】秋浦は、前に秋浦歌の條に詳しく註記して置いた。この詩は秋浦縣の尉たる柳某に贈つたのである。

【詩意】秋浦といふ處は、その名の如く、むかしから淋しい處で、役所はあるけれども、公庭には、人吏ともに稀なる有様であつた。然るに、わが柳少府が此地の尉となつてより、さながら、一縣に桃

李の花を植ゑたと同じく、一變して春の陽氣を生じ、實に麗はしく賑はしき土地となつた。そこで、柳少府自身は、公退の折など、白雲を望みながら、筆を揮つて、その作つた詩を書き、又簾を開けば、こんもりと趣ありげな山が丁度目の前に見えるし、ある時は、山の端の月を引き入れ、そして、おもふ存分に酒を飲んで、清き月の光に酔つて居る。われは、この淋しき秋浦に格別居たいと思はぬが、柳少府の賢明に感服し、夫子を愛して淹留し、歸るに忍びない様な想がする。

【餘論】乾隆御批に「その人、政を爲すの實あり、一起に於て之を見る」とあつて、起句は、専ら政績を寫し、次の四句は、公退閒散なる時の清興を敘し、結二句に於て、敬慕の意を逗露したのである。

贈崔秋浦 三首

崔秋浦に贈る 三首

吾愛崔秋浦。宛然陶令風。
門前五楊柳。井上二梧桐。
山鳥下聽事。簷花落酒中。
懷君未忍去。惆悵意無窮。

【字解】【一】陶令、五柳、すでに前に見ゆ。【二】二梧桐、元行恭の詩に惟餘二廢井、尙夾二兩梧桐とある。【三】山鳥、陸龜論に「曾子、山に倚つて吟す、山鳥下翔す」とある。【四】聽事、事を受け訟を察する處といふから、日本でいへば白洲。【五】簷花、軒端に近く咲ける花。

【題義】前のは、秋浦の尉であつたが、今度のは、秋浦の縣令たる崔某に贈つたのである。
【詩意】秋浦の縣令たる崔君が、さながら、古しへ彭澤の令たりし、かの陶淵明の風あるは、まことに愛すべきことである。門前には、形の如く、五株の柳を種ゑ、井の邊には、二本の梧桐がある。そして、訴訟人などが居ないから、山の鳥が飛んで来て、白洲に下り、軒端の花は、ひらひらと舞うて、手にせる杯の中に落ちる。かくの如く秋浦を治めて、成績を挙げられたのであるから、われは、君を慕ひ、今將に去らむとするに際して、心に忍びず、惆悵の極、窮まりなき思に惱んで居る。

崔令學陶令。北牕常晝眠。
抱琴時弄月。取意任無絃。
見客但傾酒。爲官不愛錢。
東臯春事起。種黍早歸田。

贈崔秋浦

【字解】 〔一〕北風、抱琴、ともに陶淵明の事で、前に見ゆ。〔二〕東阜、阜は澤畔の地、それが偶々東阜に在るので、これも陶淵明の歸去來辭に將有事於東阜とあるに本づく。

【詩意】 崔縣令は、陶淵明を真似、每每北牕の下に來つて畫寐をなし、月下に琴を弄すれども、唯だその意趣を取るだけで、絃を張らなくても、かまはない。それから、客に對して酒を傾け、公事には骨を折るが、絶えて錢を愛せず、賄賂などは、決して受け付けない。しかし、躬耕といふことは肝腎な事で、むかしから、賢人は矢鱈に人の世話に成らぬのを第一にして居る位。東方の澤畔は、まことに善い處で、黍などが澤山に作つてあるが、成らうことなら、君も早く官を罷め、そして、親ら田を耕したら善いではないか。

河陽花作縣、秋浦玉爲人。河陽、花を縣と作し、秋浦、玉を人と爲す。

地逐名賢好、風隨惠化春。地は名賢を逐うて好く、風は惠化に隨つて春なり。

水從天漢落、山逼畫屏新。水は天漢より落ち、山は畫屏に逼つて新なり。

應念金門客、投沙弔楚臣。應さに念ふべし、金門の客、沙に投じて、楚臣を弔ふを。

【字解】 〔一〕河陽花作縣、白帖に「潘岳、河陽の令となり、桃李の花を種う、人號して河陽一縣花といふ」とある。〔二〕玉爲人、

晉書に「裴楷、風神高邁、容儀俊爽、博く羣書に涉り、特に義理に精し、時人、これを玉人といふ」とある。〔三〕惠化、晉書に「王羣、竟陵の太守とあり、惠政あり、百姓これを歌ふ」とある。〔四〕水從天漢落、楊齊賢の説に、九華山の瀑布だらうといふことである。〔五〕金門、金馬門の略、漢宮の門。〔六〕投沙弔楚臣、長沙に投棄された賈誼が湘水を渡るとき、賦を作つて、屈原を弔つたといふこと。

【詩意】 むかし、潘岳が河陽の令たりしとき、多く花を種ゑて、花で縣を包んだ位、仍つて一縣の花とさへいはれたが、今崔君が秋浦の令となつたのを見ると、丁度、玉人といはれた裴楷を連想せしめる。かくて、淋しく荒れはてて居た秋浦の地も、この名賢の治下に在つて、追追昌えて來るし、又崔君の惠深き治化に因つて、一般の民風も、藹然として、春の如く暖かに成つて來た。秋浦の風景は、もとより尋常ならず、瀑は、さながら天上より落ち來るが如く、四邊の山は、色彩清新にして、畫屏かと疑ふばかりである。崔君の才を以て、こんな僻遠の小縣に令となつて沈淪して居るのは、まこと不遇甚しく、かの賈誼が初は漢宮の金馬門に出入し、天子の眷顧を受けて居たのに、一朝長沙に投棄せられ、賦を作つて、屈原を弔つたといふ故事を思ひ出さずには居られない。

【餘論】 本題は連作三首で、第一首は、その治化の美を贊し、第二首は、歸田の早かるべきを囑望し、ともに之を陶潛に比し、第三首は、才と位と相副はざるを傷んだので、少しも重複せず、意義は、次第に深く成つて居て、まさしく其體を得たものである。

望九華贈青陽韋仲堪

九華を望み、青陽韋仲堪に贈る

昔在九江上。遙觀九華峰。 九華を望み、青陽韋仲堪に贈る。 昔に九江の上にて、遙に九華峰を觀る。

天河挂綠水。秀出九芙蓉。 天河、綠水を掛け、秀出す九芙蓉。

我欲一揮手。誰人可相從。 我一たび手を揮はむと欲す、誰人か相從ふべき。

君爲東道主。於此臥雲松。 君は東道の主と爲らば、此に於て雲松に臥せむ。

【字解】(一) 九江、郭璞の山海經註に「九江は、潯陽の南に在り、江は潯陽より分れて九となり、皆東して大江に會す、書に曰く、九江孔殷と、是れなり」とあるし、通典に「九江は潯陽郡の西北に在り」としてある。この詩に謂はゆる九江は、池州の江を指したので、九江の下流を承けるから、又九江の稱を冒したのである。(二) 東道主、左傳に「もし都を會いて東道の主と爲さば」とある、案内者といふ義。

【題義】太平寰宇記に「九華山は、池州青陽縣南二十里に在り、舊と九子山と名づく、李白、九峰蓮花の削成するが如きあるを以て、改めて九華山となし、因つて、詩あり、曰く、天河挂綠水、秀出九芙蓉と、今山中に李白書堂の基址あつて存す。又按ずるに、顧野王之輿地志に云ふ、その山上に九峰あり、千仞壁立、周圍二百里、高さ一千丈、碧雞の類を出す」とあり、劉禹錫は「九華山は、池州青陽縣の西南に在り、九峰秀を競うて神采奇異、むかし、予、太華を仰ぎ、以爲へらく、この外、奇なしと。女兒の荆山を愛し、以爲へらく、この外、秀なしと。今九華を見、はじめて、前言の容易なる

を悼むなり」といつて居る。次に元和郡縣志に「青陽縣の西南、池州に至る七十里、本と漢の涇縣の地、天寶元年、洪州都督徐輝奏し、吳立つるところの臨城縣南に於て置き、宣州に屬す、青山の陽に在り。故に名づく。永泰二年、池州に隸す」とある。この詩は、李白が池州に遊び、九華山を望み、その山に登りたいといふので、その近傍なる青陽の地に住する知人韋仲堪に寄せて、その同行を促したのである。

【詩意】さき頃、九江の岸上に居て、遙に九華山を望んだ。そこには、瀧があつて、銀河の綠水を懸け下したるが如く、まことに見事で、その周圍には、九つの峰が秀でて峙つて居る。そこで、われは、一たび、手を揮ひ、その山中に分け入つて、靈異を尋ねたいと思ふが、誰が一處に行くか。幸にし、君が案内者となつて呉れるならば、その處に於て、雲を凌ぐ松の下に臥し、ともに、浮生の塵を脱し、いかばかり愉快な事であらうか。

【餘論】この詩は、平易淺近、且つ極めて簡單なものであるが、中に仙氣を含み、飄飄として仙せむと欲する趣のあるのは、さすがに李白の手筆である。

終